

博士論文

現代日本語における直喩の構文論的研究

中央大学大学院

文学研究科 国文学専攻

菊地 礼

目次

序章

1. はじめに.....	5
2. 先行研究.....	7
2.1. 語彙論的比喩論.....	8
2.2. 構文の類型化.....	10
2.2.1. 構文・文法形式の収集と分類.....	10
2.2.2. 比喩の構文の類型化.....	11
2.3. 意味論的比喩論.....	14
2.3.1. 隠喩への還元.....	14
2.3.2. 隠喩からの区別.....	14
2.4. 文法に着目した比喩論.....	15
2.5. 先行研究のまとめと問題.....	17
3. 本論文の方法.....	17
3.1. 本論文における「構文」.....	18
3.2. コーパスによる傾向調査.....	18
4. 用例収集の概要.....	19
5. 本論文の構成.....	21

第1章 直喩と助動詞

1. はじめに.....	23
1.1. 本章の目的.....	23
1.2. 先行研究とその問題.....	23
2. 直喩の形成.....	24
2.1. イメージ.....	25
2.2. 確かなイメージとしての提示.....	27
2.3. イメージの理解.....	30
3. みとめ方と直喩.....	32
3.1. 助動詞ごとの比喩用法の違い.....	32
3.2. 直喩を形成しない「らしい」.....	33
3.2.1. 助動詞としての「らしい」.....	33
3.2.2. 「らしい」と比喩の不親和性.....	34
4. 「ようだ」と直喩.....	35
4.1. 助動詞としての「ようだ」.....	35
4.2. 外的な根拠によるイメージの確度.....	37
5. 「みたいだ」と直喩.....	38
5.1. 助動詞としての「みたいだ」.....	38
5.2. 内的な証拠によるイメージの確度.....	40
6. 「そうだ」と直喩.....	42
6.1. 助動詞としての「そうだ」.....	42

6.2. 将然相によるイメージの確度	43
7. 知覚動詞と直喩	44
7.1. 調査とその結果	45
7.2. 命題外で機能する知覚動詞と直喩	47
7.2.1. 「ように＋知覚動詞」を用いた直喩	48
7.2.2. 「と＋知覚動詞」を用いた直喩	49
7.2.3. 真と仮定して事態を提示	50
7.3. 命題内で機能する知覚動詞と直喩	52
7.3.1. 「格成分＋知覚動詞」の直喩	52
7.3.2. 直接経験として事態を提示	53
8. おわりに	54

第2章 助動詞による直喩のヴァリエーション

1. はじめに	55
1.1. 本章の目的	55
1.2. 先行研究と問題	55
1.3. 方法	55
2. 「ようだ」型直喩の表現価値	56
2.1. 「ようだ」直喩の出現分布	56
2.2. 「ようだ」型直喩の構文	58
3. 「みたいだ」型直喩の表現価値	60
3.1. 「みたいだ」直喩の出現分布	60
3.2. 話者判断としての「みたいだ」型直喩	62
3.3. 心理的距離の形成	65
4. 「そうだ」型直喩の表現価値	67
4.1. 「そうだ」型直喩の出現分布	67
4.2. 「そうだ」型直喩の構文	69
5. おわりに	70

第3章 直喩と副詞

1. はじめに	71
1.1. 本章の目的	71
1.2. 先行研究と問題	71
2. 対象の定義	72
2.1. 比況と比喩の区別	72
2.2. 対象となる副詞	73
3. 比喩における副詞の働き	74
3.1. 比喩に対する評価の顕在化	74
3.2. 異質な情報であることの明示	75
4. 「まるで」と直喩	76
4.1. 「まるで」の意味	76
4.2. 「まるで」と比喩	78

4.2. 「まるで」の導く直喩	79
4.2.1. 「まるで」型直喩の出現分布	79
4.2.2. 最適なイメージとしての提示	80
4.2.3. 「まるで」型直喩の構文	81
5. 「あたかも」と直喩	82
5.1. 「あたかも」の意味と比喩	82
5.2. 「あたかも」の導く直喩	84
5.2.1. 「あたかも」型直喩の出現分布	84
5.2.2. 説明のための直喩	86
5.2.3. 「あたかも」型直喩の構文	87
6. 「さながら」と直喩	88
6.1. 「さながら」の意味と比喩	88
6.2. 「さながら」の導く直喩	90
6.2.1. 「さながら」型直喩の出現分布	91
6.2.2. 実感を表す直喩	92
6.2.3. 「さながら」型直喩の構文	93
7. おわりに	95

第4章 構文成分としての直喩

1. はじめに	96
2. 直喩と副詞・形容詞	96
2.1. 形式	97
2.2. 意味	98
3. 様態・属性と直喩	99
3.1. 複合的な情報の伝達	99
3.2. 複合的情報のメカニズム	101
3.2.1. 連用修飾構造	101
3.2.2. 連体修飾構造	102
3.3. 目の前性の喚起	103
4. 程度表現としての直喩	105
4.1. 程度型直喩とは	106
4.1.1. 意味的側面	106
4.1.2. 構文的側面	107
4.1.3. 分布	107
4.2. 直喩と程度	108
4.3. 共有イメージの利用	110
4.3.1. 名詞を用いた喩辞	110
4.3.2. 動詞（句）を用いた喩辞	112
4.4. 程度の実感的理解	113
5. おわりに	114

結論

1. 直喩のレトリックとしての位置付け.....	116
1.1. みとめ方とイメージを用いたレトリック	116
1.2. 直喩と目の前性.....	119
2. 本論文のまとめ.....	120
3. 理論的な寄与.....	122
4. 今後の課題.....	123
参考文献.....	124
資料.....	129
コーパス	129
書籍.....	129

序章

1. はじめに

まず、本論文における直喩の定義を述べる。直喩は「ようだ」をはじめとした文法形式を持つ比喩文である。直喩と隠喩・換喩・提喩といった他の比喩表現とは文法形式とそれらが形成する構文によって区別される。直喩の構文は主に文末部と文頭部から構成される。文末部には「ようだ」「みたいだ」などの助動詞を主に利用する。これらの助動詞は直喩において脱落させることができず、その形成に必須の要素である。一方で、文頭部は「まるで」や「あたかも」などの副詞を用いるが、これらは脱落させることが可能であり、必須要素ではなく選択的な要素である。つまり、必須要素である助動詞の持つ働きが直喩と他の比喩法を区別する。これらの助動詞は、「彼が犯人のようだ」のような推量などの他用法から分かるように、事態に対して確定していないけれども確からしさがあることを表示している。このような確からしさの表示は文法カテゴリーとしてはみとめ方に関わる。隠喩もまた「A は B だ／である」という肯定を表す形式を用いる点でみとめ方を用いており、「A は B でない／じゃない」のような否定形式を用いた比喩法である反直喩もまたみとめ方に関わる。これらの比喩表現はコピュラ文「A は B だ」から否定形式「A は B でない」まで言語形式上の真偽の極性に対応する。直喩は、真か偽の極ではなく、確からしさなどの度合いによって表示するため、両者の中間に位置する。直喩は助動詞のほかに「思う」「感じる」のような動詞、「的」「風」といった接辞によっても形成される。これらも極による認定ではなく度合いによる認定を表す。よって、本論文は直喩を主に度合いによる認定を表す文法形式によって表出する比喩文と定義する。

このような直喩を形成する構文は中村（1977）において「比喩指標」と定められ¹、「は」「の」「ようだ」のように構文を構成する個々の文法形式は「比喩指標要素」と定められた。日本語における比喩指標要素はその種類及び出現頻度が明らかにされている（中村 1977、小松原・田丸 2019、加藤ほか 2020）。

¹ 本論文は、「比喩指標」に相当する概念として「構文」を用いる。中村（1977）における比喩指標は「受容主体が表現主体の比喩意識を感じとる」（中村 1977 : p.175）ための形式とされ、比喩であることを明示するという意味合いが強い。本論文は、イメージをどのような態度で提示するかという情報の取り扱い方を文法形式が担い、情報の提示の仕方によって表現上の性質・働きが定まると見て、比喩の明示性という観点には取らないため、「比喩指標」を術語として採用しない。なお、中村（1977）などの先行研究に言及する際には「比喩指標」及び「比喩指標要素」を用いる場合がある。

【表 1】：比喩指標要素の度数と順位①（中村 1977 を参考に作成）

指標要素	よう	まるで	でも ²	みたい	気がする	もの	ほど	見える	～という	も
度数	5,448	383	238	224	219	210	190	157	123	107

【表 2】：比喩指標要素の度数と順位②（加藤ほか 2020 を参考に作成）

指標要素	よう	する	みたい	まるで	である	もの	感じる	思う	～状	たとえる
度数	357	223	61	47	38	35	20	18	18	14

【表 1】【表 2】は中村（1977）と加藤ほか（2020）の調査で明らかとなった比喩指標要素の出現度数の上位十要素を挙げたものである。中村（1977）は日本近代文学を対象としており、加藤ほか（2020）は「現代日本語書き言葉均衡コーパス」（Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese 以下、BCCWJ）を用い、現代日本語の広範なテキストジャンルから収集しており、両者は時代・対象の範囲に異なりがある。そのような異なりの中でも、「よう³」「まるで」「みたい」「もの」は出現度数十位以内に入っている。これらは比喩指標要素として中心的形式であると言える⁴。また、【表 1】における「気がする」「見える」や【表 2】における「感じる」「思う」のように知覚や思考、認識に関わる動詞（句）が上位に入っている。ほかに、「たとえる」のような喩えへのメタ的な言及を行う動詞や複合助詞「という」、接尾辞「状」「ほど」、判断辞「である」が比喩指標要素として頻繁に用いられていることが分かる。

このように、日本語において直喩は多様な文法形式によって構成され得る。しかし、【表 1】【表 2】ともに助動詞「よう」が出現度数第一位となり、出現度数第二位の「まるで」（【表 1】）と「する⁵」（【表 2】）を大きく上回っており、実際の出現形式は「よう」に偏ることが分かる。つまり、日本語において数多く存在する直喩の構文を形成する文法形式から「よう」が主に選択されているのである。また、「よう」の類義助動詞である「みたい」も【表 1】では第四位、【表 2】では第三位と上位に位置する。「ようだ」「みたいだ」のようなみとめ方や真偽判断に関わる文法形式が直喩の形成に用いられやすいことが分かる。このような調査結果からは以下の点が明らかとなっている。

①：直喩は多様な文法形式によって形成される。

②：実際の出現は「ようだ」「みたいだ」「まるで」といった特定の形式に偏る。

①からは直喩の構文が表現の意図や目的に応じて使い分けられていることが予測される。②からは直喩を形成するための条件があり、その条件を満たしやすい文法形式が主に用いられるのだと予測される。このような構文ごとの使い分けの実態と直喩を形成するための条件を明らかにする必要がある。また、直喩は「雪のような肌」「雪みいたな

² 取り立てに関わる副助詞「でも」や「も」は「A でも見るような心地」や「A も驚くほどの B」のように他の比喩指標要素との共起によって比喩指標を構成する。

³ 中村（1977）及び加藤ほか（2020）は基本形として「よう」と表記する。本論文は「ようだ」と表記するが、先行研究への言及に際しては「よう」と表記する場合がある。

⁴ 「もの」は「ようなもの」「みたいなもの」のように「助動詞連体形＋もの」の形式で主に出現する。

⁵ 「する」は「耳にする」「口にする」のように換喩として解釈される「耳」「口」などと共起するものであり、直喩とは見なしがたい。どこまでを比喩指標要素と認定するかは今後の課題である。

肌」が肌に対してそれとは物理的に全く異なる事物・事柄である「雪」を用いて表現するように、物理的には成立しない事象であるイメージを用いるものであり、多様な文法形式による使い分けの中でもイメージを使用する点は共通する。そのような直喩の中核であるイメージはどのような性質であるのか、それを用いた表現はどのようなものであるかを明らかにする必要がある。

本論文はこのような直喩を構成している文法形式やイメージに着目し、直喩が形成されるメカニズム、文法形式の選択によって生まれるヴァリエーションごとの表現上の性質・働き、イメージを用いてどのような表現を形成し、構文中で働くかを構文論とコーパス調査を用いて定性分析と定量分析の両面から論じる。そして、それを構成する文法形式やイメージの分析と定量調査による運用傾向の実態から直喩の性質や特徴を導き出し、レトリックとしての位置付けを明らかにする。

2. 先行研究

本節は直喩に関する研究を方法論に着目して整理する。そして、これまでの比喩研究が採用してきた方法論の直喩分析における問題と限界を述べる。直喩は【表 1】【表 2】に見たように多様な文法形式とその組み合わせによる多様な構文を持つ。これらの構文は、多様であることが分かっているが、個々の構文が持つ表現上の性質・働きや「ようだ」や「みたいだ」、「まるで」などの文法形式が直喩の形成において選択される理由は明らかでない。これらの問題を解くためには、直喩の構文を構成する「ようだ」などの助動詞、「まるで」などの副詞が担う文法的意味と比喩の関わりを論じる必要がある。しかし、これまでの比喩研究は喩えの媒体である喩辞⁶や表出する構文・文法形式を収集・整理し、比喩を用いる主体が使用可能な喩辞・構文をリスト化する語彙論的な方法や類似性という事柄的意味に着目して隠喩との比較から分析する意味論的な方法が主であった。直喩を対象とする研究の方法論は以下のようにまとめられる。

①：類型化比喩論

A：語彙論的比喩論

B：構文の類型化

②：意味論的比喩論

③：文法に着目した比喩論

以下、2.1 節から 2.4 節にかけ、それぞれの方法論の代表的研究を取り上げ、その問題点や直喩を取り扱う上での限界を見る⁷。

⁶ 本論文では、喩えに用いる語・句を「喩辞」と呼称し、喩えられる対象を表す語・句を被喩辞と呼ぶ。「雪のような肌」「肌は雪のように白」は喩辞が「雪」であり、被喩辞は「肌」となる。なお、「肌は雪のように白」「雪のように白い肌」などの連用修飾型の直喩において喩辞の修飾を受ける「白い」は「被修飾部」とする。これは肌を雪に喩える根拠に相当する属性を明示したものである。

⁷ 本節でまとめる先行研究は現代語の直喩を対象としたものであるが、古代語における直喩に着目した研究がある。

半沢幹一（1979）「上代の比喩表現について - 「共通性」と素材との関連から - 」は、『古事記』『日本書紀』『風土記』を対象として、比喩の収集及び比喩の表現対象となりやすいカテゴリーと喩辞のカテゴリーの関係を分析する。また、半沢（1981）「万葉比喩論序論 - 直喩の認定と表現形式」は『万葉集』における直喩を分析している。白井伊津子（2010）「万葉後期の譬喩表現 - 直喩の形式」もまた、

2.1. 語彙論的比喩論

比喩は文学作品における代表的なレトリックと見られ、言語芸術の分析を主とする文理論や表現学の対象とされることが多い。その中で比喩は、作家の内面的イメージなどの心理的情報を反映する言語表現として捉えられ、直喩もまた作家・作品の内面的特徴を分析する対象として扱われる。

代表的な研究として、中村明（1977）は「作品の底を流れるイメージ」（『比喩表現の理論と分類』所収）において川端康成作品の比喩を分析し、山口仲美（1984）『平安文学の文体の研究』は、「源氏物語」「浜松中納言物語」「夜の寝覚」「今昔物語集」を対象とした平安文学における直喩表現を分析している。

両者は比喩表現「AはBのようだ」「AはBだ」などにおける喩辞（「B」）が作家の内面性を反映すると見て、対象となるテキストに用いられた喩辞を分析対象とする。その根拠について、中村は「触覚的喩詞が異常に多かったり、＜母＞や＜海＞に関わる喩詞が頻出したりすることは、作品のイメージや作家の方法にとってけっして無関係ではない」（中村 1977：p.64）と述べ、山口は「比喩には、表現主体が対象を如何に見ているかと言う事、即ち、表現主体の発想法とも言うべきものが示されている」（山口 1984：p.115）と述べる。このように比喩と作家の内面性を結びつけ、作家が比喩表現に用いた喩辞を収集し、分類・整理することで作家・作品に通底するイメージや比喩の運用傾向を抽出するという方法論が確立する⁸。このような方法論を用いることによって、中村は川端作品の喩辞を「光」「水」「におい」「幼」「小動物」「神秘」「怪奇」「抽象」の範疇へとまとめ上げ、それらに通底する「孤児の感情」が存在することを指摘す

『萬葉集』における直喩を分析する。また、古典語における比喩研究は比況助動詞の意味用法の研究の一環として進められる。内田賢徳（1976）『「ゴト」と「ゴトシ」-直喩の述語-』は、「如し」を直喩の述語として捉え、その機能を能喩（喩辞）と所喩（被喩辞）の関係付けに見る。そして、その関係付けは、能喩に内在して、さらに所喩にも共通しうる属性や事柄を媒介にして両者を比喩として結び付けるものであると指摘する。「如し」については春日和男（1968）「比況（ごとし・ようだ）」が「如し」の史的発生を考察し、富田正一（1958）「平安時代の『ごとし』」は、平安期において和歌や詞書には「如し」が用いられ、散文は「やうなり」が用いられるというジャンル別の使い分けを論じる。また、五十嵐三郎「ごとし（ごとくなり・やうなり）-比況（古典語）-」は「ごとし」がもともと比喩・類似の意味に限定されており、後に活用形が生じることで種々の用法が生じ、意味が複雑化したと指摘する。「如し」以外に上代における比喩の指標となる「じもの」を小柳智一（2014）『「じもの」考-比喩・注釈-』が論じている。「じもの」が『萬葉集』の時点ですでに古い言葉として意識されていることが指摘されている。また、山口堯二（2002）『「やうなり」>「やうだ」の通時的变化』は、「やうなり」から「やうだ」への通時的变化を論じている。また、古典文学作品における比喩の用例収集と分析を行った多門靖容『比喩表現論』（2006）がある。

⁸ 比喩のイメージについて、収集・整理ではなく、比喩的イメージが生成されるプロセスを考察した研究がある。そのような研究としては、金岡孝（1960）「比喩について-その表現心理的構造と言語的性格」、半沢（2016）『言語表現喩像論』がある。

金岡（1960）は人間の知覚を感性的・種類の・個別的と三種類に分け、感性知覚と種類知覚との関係から比喩の成立を論じる。「落葉の雨」という比喩は落葉という現前の事態への感性的知覚が過去に経験した雨の感性的知覚を喚起する。それによって、落葉が雨という種類として知覚される。これによって比喩が成り立つ。そして、落葉を雨と見ながらも、落葉を落葉として種類知覚していることによって錯覚から区別される。半沢（2016）は、比喩の表現過程を図式化し、ある表現における概念の不整合によって、イメージとしての解釈が誘起されることで比喩が成立すると述べる。そのイメージが意味として整合化されることで「意味喩」となり、既成のイメージとして整合化されることで描写的な「イメージ喩A」となり、既成のイメージとしても不整合であり、イメージを組み替えることで理解される「イメージ喩L」となることを論じた。イメージを一律に扱うのではなくグラデーションで捉えている。これらの研究は、表現主体においてどのようにイメージが生成され、現実の事柄に適用して表現されるかの過程を論じたものである。

る。山口は「源氏物語」の直喩が、感覚的・直感的に表現されたものではなく、対象を的確に表現するために人工的で時間をかけて作り込んだものであるとし、後代の作り物語の表現への影響を指摘する⁹。このような文体論・表現学が対象とする比喩表現は作家など言語の創造的な運用に長けた表現主体を前提として論じられる。そのような比喩観に対して、比喩が日常言語に遍在しており、人間の認識と不可分であるという観点を取る分野として認知言語学がある。

比喩が日常言語に遍在し、人間の認識と不可分であるという比喩観は認知言語学以前には、I・A・Richards (1936) “The Philosophy of Rhetoric” や P・Ricoeur (1975) “La métaphore vive”、によって提示されている。また、日本においても佐藤信夫が『レトリック感覚』や『レトリック認識』などの一連の著作において「発見的認識の造形」という観点から比喩や修辞を文に対する装飾ではなく、人間の外界の認識を的確に表現するために必要な方略として位置付けている。しかし、これらの論考は比喩・レトリックに対する捉え方を提示するものであったが、研究を行う上での具体的な方法論が明確でなかった。それに対して、Lakoff & Jonson (1980) “Metaphors We Live by” は日常言語に見られる「時間を消費する」「時が流れる」などの慣用的メタファー表現に着目し、それらが<時間は資源である><時間は流体である>などのような「資源→時間」「流体→時間」という写像 (mapping) 関係から構成される高次の概念メタファーから生産されることを理論化した。この理論は概念メタファー理論 (Conceptual Metaphor Theory) と呼称される。具体的な表現を収集し、それらを包括する概念メタファーを設定し、Source domain (資源・流体) の持つ特徴・性質が Target domain (時間) へと移行する写像関係を明らかにすることで、人間の比喩的な認知体系の解明を目指している。方法論的に明確であり、日本語においても多くの論考が日本語概念メタファーの解明に取り組んでいる¹⁰。このような概念メタファー理論は、日本においては瀬戸賢一によって「レトリックの宇宙」(1986)、「メタファー思考」(1995)、「認識のレトリック」(1997)などの著作を中心に紹介され、近年では、鍋島弘治朗が『日本語のメタファー』(2012)や『メタファーと身体性』(2016)によって、脳科学や神経科学の知見を取り入れ、「身体性」を中心としたメタファー論として展開されている¹¹。

⁹ このような表現論的技法は様々な作家に応用される。木坂基 (1976) 「近代比喩と文体 - 独歩・藤村・漱石・芥川の直喩 -」、橘豊 (1999) 「比喩における喩義」(『日本語表現論考』第一章三節)、はんざわかんいち (1987) 『『日日の祝祭』というレトリック - 庄野潤三の実感比喩 -」、多門靖容 (1996) 「喩辞によるテキストのイメージ記述についての覚え書き」、水藤新子 (1998) 『『流れる』の比喩表現』、藁谷隆純 (2005) 『『蹴りたい背中』における直喩表現の一考察』などが各種の文学作品を対象とした分析を行っている。特に村上春樹作品に着目した研究が多く、松川美紀枝 (2006) 「現代における比喩の構造とその効果 - 村上春樹『海辺のカフカ』における直喩表現に着目して -」は、村上春樹の長編小説『海辺のカフカ』における直喩の運用に着目している。「ようだ」などの比喩指標が付属することで比喩であることを明示して読者の注意を向けることで、詳細に指定した喩辞を読者に読み解くよう仕向けると指摘する。しかし、比喩研究の対象として松川 (2006) のように村上春樹作品が選択される理由は、「村上春樹の比喩表現はその手法を、『独特』『ユニーク』などと多くの研究者によって評され」(松川 2006 : p.115) の言葉に見られるように印象論に止まっている。

¹⁰ 個別の概念メタファー論としては、気象現象を Source domain としたメタファーを松浦光 (2017) 『現代日本語における気象現象の概念化：概念メタファーによるアプローチ』、液体を Source domain としたメタファーを後藤秀貴 (2018) 「<感情は液体>メタファーの成立基盤と制約 - 概念メタファーの『まだら』をめぐる」、植物を Source domain とした錢秀双 (2019) 「概念メタファー<人間は植物>の日中対照研究」などがある。

¹¹ 概念メタファー理論だけでなく、比喩が日常言語に遍在しており、人間の認識を基礎付けているという観点から、人間の認識と言語を結びつける認知言語学では、言語の意味や文法の基盤として比喩を位置付ける。主に、語の多義や文法化といった言語変化におけるプロセスの説明概念として捉えられる。語の多義の記述への比喩の位置付けは靱山洋介 (2002) 『認知意味論のしくみ』、靱山 (2019)

以上のように表現学・文体論、認知言語学における比喩論は、比喩の使用主体の内面的情報を反映する表現として喩辞を捉え、その分析を通してイメージなどの心理・認知を解明することを志向する。喩辞の表示するイメージと主体の心理の結びつきが問題となり、それを運用する構文や文法形式は問題とされない。一方でそのような方法論は分析対象が喩辞に偏り、それを表出する構文や文法形式が問われないという問題を持つ。いずれの構文・文法形式においても、表現対象である被喩辞に対して比喩の素材となるイメージを提示する喩辞が選択されていることは共通するため、喩辞を選択した表現主体の認識の反映としては等価値なものとして捉えられている。ゆえに、「A は B だ」による隠喩と「A は B のようだ」による直喩は等価と見なされ、形式的な有標性を持つ直喩の位置付けが不明確となる。しかし、喩辞によるイメージ喚起のみが重要であり、それを表出する構文が表現の性質・働きに寄与しないならば、いずれの構文も等価値となり、構文の分布はランダムの出現となり均衡的になるはずである。だが、実態としては【表 1】【表 2】に見たように「ようだ」が主に選択されるなどの偏りが存在する。これは、実際に比喩を運用するためには、他の構文から排反的に特定の構文が選択されることを示し、比喩を研究する上で、構文・文法形式との関わりを分離して論じることができないことを意味する。

2.2. 構文の類型化

以上のように語彙論的比喩論は、比喩と構文・文法形式との関わりが不明瞭である。一方で、「ようだ」や「まるで」といった文法形式やそれらが形成する構文に着目し、その収集と整理を行う研究がある。

2.2.1. 構文・文法形式の収集と分類

構文や文法形式の類型化は、実例から帰納的に行われることが望ましい。そのような研究の前提として、調査資源が整備される必要がある。中村明（1977）『比喩表現の理論と分類』や加藤祥ほか（2020）『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に基づく指標比喩データベース」、Komatsubara Tetsuta（2021）”The Corpus of Japanese Figurative Language”は実例に基づいた比喩研究を行うための前提となる研究資源を整備することを目的としたものである。

中村（1977）は比喩の形式的特徴に着目し、「指標比喩」「結合比喩」「文脈比喩」に分類し、それらの比喩表現を日本近代文学作品 50 篇から収集している。「指標比喩」はおおむね直喩に相当する。指標比喩を構成する構文を「比喩指標」と呼び、比喩指標を構成する個々の言語形式を「比喩指標要素」と定めた。収集した比喩指標要素は品詞と意味的特徴から 7 類 82 種 359 号へ分類され、300 を超える語句が比喩の指標となり得ることを明らかにし、それらが組み合わさった 1000 を超える構文が比喩指標として運用可能であることを明らかにしている。また、加藤ほか（2020）は中村（1977）における比喩指標要素をキーとして BCCWJ から指標比喩を収集している。収集した指標

「百科事典的意味と比喩 - 指示対象の特徴の重要性 -」や大堀壽夫（2002）『認知言語学』などがある。これらの研究は、日常言語の生成・変化のダイナミズムを捉えるために、比喩を用いている。つまり、理論上の説明概念であり、言語技法としての比喩を論じるものではない。

比喩例に対して、喩辞・被喩辞などの情報を付与し、出現するレジスターの分布や新規性・分かりやすさなどをクラウドソーシングによって評定し、その結果を分析している。Komatsubara (2021) は、「青空文庫」の電子データをもとに近代文学作品からレトリックを収集し、意味・構文の情報をアノテーションした「日本語レトリックコーパス」を構築している。

中村 (1977) のデータは紙媒体による収集であり、電子データとして公開されていない。また、加藤ほか (2020) が構築した「指標比喩データベース」は現在未公開であり、Komatsubara (2021) が構築した「日本語レトリックコーパス」は公開から日が浅い。このようなデータベースの研究資源としての活用は今後の課題となる。

2.2.2. 比喩の構文の類型化

比喩の研究資源は現在においても整備中であり、類型化の対象となる比喩例には制限がある。そこで、構文・文法形式を固定し、そこに現れ得る喩辞・被喩辞の意味関係から直喩の類型化を試みる研究がなされる。中村明 (1977) 「言語形式と比喩的対比」(『比喩表現の理論と分類』第 1 部第 6 章) は「ような」を用いた連体修飾型の直喩における喩辞と被喩辞の意味的な対比関係とその言語形式上の明示の可能性を以下の 5 類 13 種に類型化する。

第 1 類：「全体→全体」

第 1 型：帯のような川 ($A \doteq B$)

第 2 類：「全体→部分」

第 2 型：真珠のような花子の涙 ($A \doteq B$ の b)

第 3 型：真珠のような涙 ($A \doteq b$)

第 3 類：「部分→全体」

第 4 型：卵の黄みのような夕日 (A の $a \doteq B$)

第 5 型：黄みのような夕日 ($a \doteq B$)

第 4 類「部分→異部分」

第 6 型：動物の歯のような娘の皮膚 (A の $a \doteq B$ の b)

第 7 型：動物の歯のような皮膚 (A の $a \doteq b$)

第 8 型：歯のような娘の皮膚 ($a \doteq B$ の b)

第 9 型：歯のような皮膚 ($a \doteq b$)

第 5 類「部分→同部分」

第 10 型：関取の腹のような妊婦のおなか (A の $ab \doteq B$ の ab)

第 11 型：関取の腹のようなおなか (A の $ab \doteq ab$)

第 12 型：関取のような妊婦のおなか ($A \doteq B$ の ab)

第 13 型：関取のようなおなか ($A \doteq ab$)

事物そのものを A 及び B とし、 A や B に含まれる要素を a 及び b としたとき、それぞれ A と B 、 a と b の取り得る可能的な対応関係の言語化を類型化している。なお、 ab は A と B に共通する要素であることを表している。同様の類型化は、渡辺ゆかり (2000) 「直喩を表す『体言句 X のような体言句 Y 』の意味的特徴」も行っている。渡

辺は「星のような瞳」型の関係と「猫のような瞳」型の直喩を区別する。前者は星と瞳が直接的に対応するものであるが、後者は猫が瞳と対応するのではなく、猫の瞳が人の瞳と対応する。つまり、＜猫の瞳＞を「猫」によって表しており、換喩が介在するのであり、「猫のような瞳」は瞳の類似性だけでなく、猫と瞳の隣接性が内包される。これは、中村（1977）における第1類「全体→全体」タイプの対比関係と第5類「部分→同部分」タイプの対比関係の対立を捉えたものであり、第5類のような対比関係にズレが生じる例を「全体」「部分」という指示対象レベルの説明概念から「隣接性」という意味変化の説明概念によって捉え直していると評価される。これらの類型化は内省における可能的な言語表現を対象としており、どのような対比関係の言語化が直喩において可能であるかを示したものである。

一方で、実際に用いられた直喩表現の類型化を試みた研究として、稲益佐知子（2004）「直喩表現の研究手法についての一試案 - 枠組みの提示と分析」と稲益（2015）「恐怖を修飾する表現：直喩の果たす役割に着目して」がある。稲益（2004）は、「肌が雪のように白い」のような喩辞・被喩辞・根拠を揃えた構文の直喩を対象とし、被喩辞の語彙的性質と主部と述部の整合性・不整合性から類型化する。

●主部と述部が整合：75例¹²

可視：「彼は若い頃遊び過ぎた中年のように変に悟った顔をしていた」、33例

不可視：5例

人物：「街の住人も動物園の去勢ライオンのようにウロウロしている」、35例

抽象：「まるで目の前にある現実のように生々しい、リアルな夢」、2例

●主部と述部が不整合：28例

可視：「新しいビルが細菌のように繁殖していた」、12例

不可視：「臭い息がのろしのように立ちあがる」、9例

人物：「黴のようにこびりついて残っている一人の男」、1例

抽象：「眠りは真綿のように私をしめつける」、6例

このような類型化の上で、それぞれの頻度を集計している。「新しいビルが～繁殖していた」のように主部と述部が意味的に不整合であるような例を多層構造型の比喻と位置付け、村上春樹や島田雅彦が主に使用していることを明らかにしている。稲益（2015）は被喩辞を恐怖に関わる語彙に限定し、かつ連体修飾型の直喩に限定することで特定の対象を表現する直喩の意味的パターンを分析する。喩辞と被喩辞の意味関係として、直喩に用いられる事柄が恐怖によって引き起こされる変化状態、恐怖の原因、恐怖の様態であることを指摘する。直喩の喩辞は恐怖の原因が最も多く、次点が変化状態であり、様態例が少ないことを指摘する。そして、隠喩との比較を行い、隠喩においては様態例が増加することを述べる。内省における可能的な類型を提示した中村・渡辺に対し、稲益（2004）と稲益（2015）は実際に運用された直喩の類型を提示している。しかし、比喻はテキスト中に出現する頻度が低い表現であるため大規模な用例収集が困難であり、対象となるテキストが限定的となっている。

¹² 掲載している用例は稲益（2004）に挙げられている例を一部改変している。次の小松原・田丸（2019）においても同様である。なお、「主部と述部が整合」の「不可視」例は掲載が確認できなかった。

そのような用例数の確保の難しさに対して、小松原哲太・田丸歩実（2019）「日本語における直喩の写像方略の類型」は、Komatsubara（2021）にて構築した「日本語レトリックコーパス」を用いて直喩の収集を行っている。そして、収集された用例を認知言語学の観点から構文と概念写像の対応関係に着目して以下の5種に類型化する。

●直接的

直接写像方略：「飾燈のような美しい花」、256例、①

●間接的

異なるドメイン間

起点領域：主観性明示方略：「この語が自分の顔を打ったように感じた」、19例、②

目標領域：挿入方略：「狐は風のように走り出した」、57例、③

同一ドメイン内

起点領域：隠喩支援方略：「手を魚のように泳がせている」、30例、④

目標領域：例示方略：「お八重の笑顔は女神のように美しく」、299例、⑤

①は事物同士の対応関係となり、中村（1977）における第1類「全体→全体」タイプに対応する。そのような直接的な対応関係にない例が②③④⑤であり、「墨汁のようないらだたしさ」のように「墨汁」と「いらだたしさ」という異なるドメインに属する事物を用いたタイプの表現が②③として区別され、「哲学者のような面持ち」のように表情という同一のドメイン内に属する事物を用いたタイプの表現が④⑤として区別される。そして、②と③、④と⑤は、「手を魚のように泳がせている」における「魚」と「泳ぐ」の関係のように被修飾部の事象・動作が起点領域（喩辞）に属する表現と「狐が風のように走り出した」における「狐」と「走り出す」のように被修飾部の事象・動作が目標領域（被喩辞）に属する表現を区別する。事物に関する概念同士の対応関係とその言語化を類型化する点で中村（1977）における類型化と同旨である。しかし、中村が可能な対応関係のリストアップであるのに対し、小松原・田丸（2019）はコーパスを用いた用例調査に基づいており、日本語において実際に運用された類型である点で、実態に即した形で直喩の類型を明らかにした研究として評価される¹³。

これらの研究は、日本語直喩表現が取り得る構文もしくは用いられる文法形式の種類を明らかにすることはできる。しかし、それらの文法形式がどのような理由で選択され、直喩を形成しているかは明らかでない。構文や文法形式の類型化は喩辞の収集・整理と同様に直喩の多様性を明らかにするものである。

¹³ 以上の類型化は「AはBのようだ」「AのようなB」におけるAとBの意味的關係や「ようだ」の取り得る形態、「ようだ」に相当する形式など一文の中で直喩が取り得る形式に着目したものであるが、直喩が持ち得る機能の面から下位分類する研究がある。

大山敏子（1956）『英語修辭法』、池上嘉彦ほか編（1983）『大修館英語学辞典』や山梨正明（1988）『比喩と理解』は直喩を「その対象の性質、形状、様態を特別の誇張をとまわずにたとえる」（山梨1988：p.181）ものである「記述的直喩」と、「問題の対象の性質、形状、様態の度合いを修辭的に特別に強める」（ibid：p.182）ものである「強意的直喩」へと分けている。前者は様相を表す表現、後者は「氷のように冷たい」のように程度性を表したものである。『大修館英語学辞典』は記述的直喩を「単純直喩」と「拡充直喩」へとさらに分けている。また、美学の観点から波来谷史代（2009）「直喩の二種類について - ソシュールとヤーコブソンの言語理論を手がかりに -」は、喩辞と被喩辞の關係に着目して「隠喩的直喩」と「換喩的直喩」へと二分する。隠喩的直喩を詩的、換喩的直喩を散文的とし、散文的な換喩的直喩が詩に用いられるのは、直喩自体が持つラングの再構成の機能、倒置法などの他の技法のサポートのためであると論じる。

2.3. 意味論的比喩論

2.1 節と 2.2 節に見た研究は、語彙や構文・文法形式といった直喩表現のヴァリエーションを類型化し、リスト化することを主な方法論とした。そのような類型化による比喩論ではなく、比喩表現を意味論的に分析した研究がある。

2.3.1. 隠喩への還元

意味に着目する場合、隠喩との対比からなされる。そのような研究の嚆矢は修辞学である。修辞学においては、比喩を始めとしたテキスト中の表現技法を同定する基準やそれぞれの言語技法の特徴が考察される。ギリシア・ローマ時代において、アリストテレス『修辞学』『詩学』に端を発し、クインティリアヌス『弁論家の教育』において集大成を見せる¹⁴。日本においては明治期に西洋修辞学が輸入される。初期は、西洋修辞学の翻案に止まるが、明治 30 年代以降、高田早苗 (1889)『美辞学』、島村瀧太郎 (1902)『新美辞学』など独自の体系を志向した修辞学書が現れる。このような修辞学の伝統において直喩は類似性に基づく点で隠喩と同様であるが、形式的な指標を持つことで隠喩と区別されてきた。言い換えれば、形式以外はおおむね隠喩と等価な表現として捉えていた。それに対して、五十嵐力 (1909)『新文章講話』は「結体：臃化」「増義：存餘」「融会：奇警」「順感：変性」という二対四組の「詞姿の原理」を用いることで、各修辞法が読み手に与える効果を多面的に捉えようとしている。直喩においても、これらの詞姿の原理が複数関与することを指摘し、比喩であることの説明だけでない多様な表現効果を捉えようとした。しかし、修辞学全体としては、隠喩と直喩の形式の違いを意識していても、その形式的差異を積極的に分析することなく、比喩としては同一的であるとされてきている。

現代において、修辞学は個別の学問分野としては衰退しているが、隠喩との区別の問題は理論的問題として取り組まれている。鍋島弘治朗 (2016)『メタファーと身体性』は直喩の形式的指標を「メタファー明示表現」と位置付け、「シミリはメタファーの一種であり、メタファーらしさ、及びメタファーの明示性の度合いがあるだけと考える方が合理的」(鍋島 2016 : p.284) と述べ、従来の修辞学と同様に直喩と隠喩を本質的に等価とする。鍋島 (2016) は認知言語学の観点から従来の直喩・隠喩の区別を追認したものとして評価される。

2.3.2. 隠喩からの区別

一方で、直喩を隠喩から区別し、その独自性を考察する論考として佐藤信夫 (1978)『レトリック感覚』がある。佐藤 (1978) は、隠喩が常識的な類似性を基盤とするのに対し、直喩は隠喩に還元できない独創的な喩辞と被喩辞の結び合わせが可能であるとし、その機能を「類似設定」(佐藤 1978 : p.89) と定めた。そして、『……のやうに』という結合表現によって、非常識的な類似性を読者に強制」(ibid : p.81) すると述べ、「よ

¹⁴ ギリシア・ローマ時代における直喩に相当する概念については、星屋雅博 (2006)「直喩 古典修辞学的考察」が分析している。

うだ」などの文法形式の働きとして定めた。以後の隠喩と直喩の比較研究は佐藤の提示した「類似設定」の概念を基本的に踏襲する。

平井昭徳（1989）「直喩と隠喩 - 類似性との関わりをめぐって - 」は、直喩と隠喩における喩辞と被喩辞の類似性の違いに着目する。隠喩は類似性が発話者と聞き手で共有されており、直喩では共有されていないとする。ゆえに、隠喩は共通理解を基盤とした効果的な表現を行い、直喩は発話者が新たに発見した類似性をもとにした詳細な説明を行うとする。杉本巧（2005）「隠喩と直喩」は、直喩が類似点への言及を行い、隠喩は対象を他の事物・事柄と見なすという見なしの機能を持つと主張する。このような機能の違いが解釈の違いに繋がり、隠喩は見なしであることから喩辞と被喩辞が逸脱した関係であってもよく、異常な結合の意味を聞き手が解釈することに繋がる。一方で、直喩は類似点への言及であり、似ている部分が一つでもあれば合理的な解釈が可能であるとする。加藤祥（2018）「隠喩と直喩の違いは何か - 用例に見る隠喩と直喩の使い分けから - 」は、BCCWJ から収集したデータを用いて、実例から隠喩と直喩の違いを帰納的に論じる。隠喩は目に見えない内面的な類似性へと言及するのに対し、直喩は外面的な類似性へと言及することが多いことを指摘する。また、直喩の方が慣用的ではない one-shot の写像がなされることを指摘する。one-shot であるということは、その場における最適な表現を行っているものであり、佐藤の「類似設定」を支持するものである¹⁵。

修辞学に端を発する隠喩と直喩の区別の問題に対して、佐藤・平井・杉本・加藤は類似性のあり方から直喩を隠喩とは異なる機能を持った表現技法として区別する。従来、直喩と隠喩は形式の違いは意識されていても、本質的には同等の表現技法であるとされてきた。それは、形式が異なっているにもかかわらず、喩える事物と喩えられる事物を比較するという二事物の比較の構造が共有されているためである。そのような比喩の研究史にあって直喩を隠喩から区別した点でこれらの研究は評価される。しかし、直喩の独自の機能とされる「類似設定」はその言語形式上の根拠が薄弱である。佐藤（1978）は「ようだ」などの文法形式の働きとして定めているが、「ようだ」を始めとした直喩の文法形式のどのような性質・意味が類似設定を可能とするかは明らかでない。

2.4. 文法に着目した比喩論

意味論的比喩論が類似性という喩辞と被喩辞の意味的關係の分析を主とするのに対して、直喩の文法的側面に着目する研究がある¹⁶。

利沢行夫（1985）『戦略としての隠喩』は、直喩の文法的な特徴に着目し、「X は Y のようだ」のような叙述用法が少ないことを指摘し、「X のような／に Y」という修飾限定用法が主であることを述べる。そして、「X のように Y」という副詞的に用いた直

¹⁵ 以上のような区別に対する論考は類似性を基盤とする隠喩と直喩の關係に対するものである。一方で、直喩と換喩や提喩との關係を示唆する論考として森雄一（2002）「明示的提喩・換喩形式をめぐって」がある。森は、「小町は美人の代名詞だ」「長嶋は巨人のシンボルだ」といった表現を、「小町：美人」といった提喩關係、「長嶋：巨人」という換喩關係を「代名詞」「シンボル」によって明示的にするものとして捉えている。これまで、隠喩に対する形式的指標の付加による明示形式とされてきた直喩とは別に、換喩・提喩においても明示的な形式が存在することを指摘した研究として評価される。

¹⁶ 以下の研究は日本語を対象としたものであるが、日中対照研究を行った論考として苗苒（2001）「中国語直喩表現及び中日直喩構文の比較：『象... - 样』と『ようだ』」がある。中国語においても、日本語と同様に直喩は述語句型と修飾型に分かれる。一方で、中国語は「X 象 Y - 样」構文を用いた述語句型の出現頻度が高く、「ように」を用いた連用修飾型の頻度が高い日本語と異なることが報告されている。

喩は隠喩へと変換不可能であることから、連用修飾用法が、直喩の真価であると指摘する。連用修飾用法は、副次的に喩辞の観念を提示するものであり、隠喩のように喩辞と被喩辞の観念が同一視されることはなく、観念同士が干渉し合わないとする。利沢の論考は、文法形式の存在によって修飾を可能とするという直喩の文法的特徴が比喩におけるイメージのあり方の違いにまで影響を及ぼすことを論じたものとして評価される。渡辺ゆかり（2001）「ヨウニ節を用いた直喩表現の類型」は、「ように」節を用いた直喩表現を被修飾部の違い、従属節述語のテンス・アスペクトの違いによって下位類型を行う。そして、「ように＋知覚自動詞」「ように＋なる」「ように＋する」「ように＋して」のように「ように」節を脱落することのできない必須成分としての直喩と、脱落することのできる付加的成分としての直喩に分ける。付加的成分としては属性副詞的であり、「ように＋動き・変化・程度を伴わない状態や様子」である情態用法と「ように＋程度性を伴う状態や様子」である程度用法へと分けることが可能であることを指摘する。修飾形式の直喩については、光信仁美（2013）『『ような』と『ように』の交代 - 名詞句 N1 のような X な N2 における -』は、「N1 のような X な N2」と「N1 のように X な N2」という構文において「ような」と「ように」の交代を論じる。前者は「N1 のような」と「X な」が被修飾部 N2 と異なる属性を表しており、並列的な修飾であるとする。「ような」と「ように」の交代は事態としてのあり方を変えるものではないが、焦点が変わることを指摘する¹⁷。

また、「肌は雪のように白い」における「白い」のような被修飾部は「肌」と「雪」を結びつける根拠として働くことが多い。このような被修飾部に着目した研究として、橋本邦彦（1984）「直喩文の構造と機能」、芹沢剛（1993）「直喩の形式とその意味（一） - 共通性と能喩の関わり -」、芹沢（1995）「直喩の形式とその意味（二） - 共通性の言語化をめぐる -」がある。

橋本邦彦（1984）は、直喩は直喩要素（喩辞）と主題要素（被喩辞）の類似性の比較を行う表現ではなく、喩辞が根拠（共通性）とともに叙述の要素となると指摘する。そして、叙述句を構成する直喩要素と根拠の関わりについて、根拠「白い」を総称的な属性を表す要素とし、総称的で具体性に欠く「白い」を喩辞が具体的に限定すると論じる。芹沢剛（1993）は、喩辞との関係から根拠を「上位属性」「非上位属性」「偶有性」に分類する。喩辞が水であれば、透明性などは典型的に想起されるため上位属性、ぬるさなどは典型から外れるため非上位属性、美味しさは場合に左右されるため偶有性となる。喩辞としての「水」においていかなる属性が上位属性・非上位属性・偶有性となるかをアンケート調査から導き出している。芹沢剛（1995）は、上記の根拠の三分類を受け、それらが構文的に明示されることの効果を論じる。上位属性の明示は、表現したい属性を明確にし、非上位属性や偶有性の明示は喩辞から想起することが難しい属性を明示することにより、発話者の表現意図が聞き手に伝わりやすいようにするという説明的な効果があるとする。

¹⁷ 連用修飾の他に、連体修飾と比喩の関係について、複合助詞「という」との関わりから論じる研究もある。多門靖容（2004）「比喩と連体修飾、メンバ、カテゴリと存在」は連体修飾型の比喩「X という Y」をカテゴリー包摂から論じている。また「X という Y」形式は、大田垣仁（2015）「指定辞『トイウ』の比喩的な用法について - コピュラ文との対照からみた -」がある。「X という Y」と「X は Y だ」形式との比較から、比喩に用いられる「という」において N1 と N2 の関係の「一般化」もしくは「再カテゴリー化」という二種の機能があることを指摘する。多門・大田垣は「という」型の比喩を直喩の問題としては論じておらず、「X のような Y」のような典型的な比喩的修飾節との関わりは不明である。

修飾形式とは別に、叙述句としての比喩を、「A は B だ」形式の隠喩をモデルとして多門（2010）「隠喩とはなにか」が論じている。「A は B だ」型の隠喩をカテゴリー包摂から論じ「X は Y だ」型に代表される隠喩を「その発話主体も組み込んで世界を新しく整理する行為だ」（多門 2010 : p.524）とする。

2.5. 先行研究のまとめと問題

以上に概観した直喩に関わる研究を整理し、その問題点をまとめる。語彙論的比喩論は、作家や作品、慣用表現といった母集団から喩辞の収集し、整理することでその特徴を論じる。同様に構文と文法形式の収集・整理も進められている。これらは日本語における直喩の多様性を解明した研究として評価される。一方で、直喩を支える意味・文法的なメカニズムを明らかにするものではない。そこで意味論的比喩論は隠喩との比較から喩辞と被喩辞の類似性という命題内の要素を分析することで、直喩を支える意味的なシステムを解明しようとした研究として評価される。しかし、命題内の要素に着目しているため、文法形式に則した分析を行う余地がある。以上のように多様性の解明と意味的な側面に着目した研究が主であり、文法的な側面に着目した研究は僅少である¹⁸。先行研究において直喩の文法的側面への分析が少ないことを鑑み、本論文は文法形式に則した分析を行うために構文論を用いる。また、2.1 節に見たように特定の作家や作品からの用例収集、もしくは内省判断によって進められてきた状況を踏まえ、直喩のより一般的な性質を捉えるために大規模な均衡コーパスである BCCWJ を用いて調査を行う。

3. 本論文の方法

以上の問題を踏まえ、本論文は助動詞や副詞の意味を取り扱うための枠組みとして構文論を採用し、また実態に即した運用の解明のためのコーパス調査を用いる。その構文

¹⁸ 半沢幹一（1993）「比喩は死にますか？ - 慣用と否定をめぐって -」が比喩と否定の関係を論じており、肯否の文法カテゴリーと比喩の関係を論じたものとして評価される。「A は B のように C」（「顔が鬼灯のように赤い」）という比喩文に対する否定（「顔が鬼灯のように赤くない」）に関する三通りの解釈の可能性を提示する。

①：当該表現が比喩であることの否定。

②：顔が赤くないことへの鬼灯によるイメージ付与。

③：比喩の適切さの否定。

①は比喩であること自体を否定するものであり、そもそも比喩文として受け入れられていない。②は比喩の否定ではなく、否定文への比喩による修飾であり、かつ「鬼灯は赤い」という前提認識に反することから成立しづらく、色彩において非限定的であることから具体性を志向する比喩と馴染まないとする。③は当該の顔の赤さを表現するために「鬼灯」は適切でなく「トマト」が適切であるというように、選択された事物の適切さの否定となる。①は比喩であることが前提として認められておらず、②③の否定は当該文が比喩であること自体に作用しない。つまり、否定は比喩を否定することができないのである。このような否定の作用域に入らない原因を比喩が真偽を問うことのできる分節的な命題なのではなく、イメージに関わる表現であるためだとする。否定という文法カテゴリーと比喩の関係を分析することで、否定し得ないイメージが比喩の本質であることを明らかにした論考として評価される。また、否定形式によって表出される比喩については、佐藤信夫ほか（2006）『レトリック大辞典』が「反直喩」と定め、隠喩・直喩とは異なる比喩法と認定している。また、小出美河子

（1997）「比喩的構造にもとづく否定形式の表現」はそのような反直喩に相当する否定形式を用いた比喩「A は B じゃないんだから」について、落語を対象資料として、その表現の特徴を分析している。岡本雅史（2020）「直喩標識としての『じゃないけど』：談話における直喩とアナロジーの再考に向けて」は同様の否定形式を対象とし、日常談話の用例をもとに分析している。

論とコーパス調査の概要を述べる。

3.1. 本論文における「構文」

まず本論文が用いる構文論について述べる。「構文」は現在、依拠する理論的立場によって *syntax* の意味、もしくは *construction* の意味と二様に用いられている。前者は、文が組み立てられるシステムを捉えたものであり、日本語においては文末述語を中心とした文法的範疇の階層である文法カテゴリーと個々の文の成分の関係を論じるものである。後者は、*construction grammar* (Goldberg, 1995) における *construction* の訳語である。*construction* とは、「A が B する」などの連なりを一まとまりの形式と見なし、その形式に一定の意味が付与されていると見るという捉え方を表す概念である。語彙項目と同様に文法項目としてそれらの形式が存在するものとして文を捉える。つまり、文を一つの形態素と見なし、その意味と多義の発生・拡張を分析する分野である。

本論文では、「構文」を *syntax* の意として用いる。それは「ようだ」「まるで」などの個々の文法形式の働きに着目し、それらが属する文法カテゴリーとの関わりから論じるためである。*syntax* を表す語として「統語」を用いないのは、直喩がどのように構成されるか、または文を構成する成分としてどのように働くかという構成に着目するためである。このように個々の文法形式の働きや文の成分として直喩を捉えるためには、「X のような Y」を一まとまりとして捉える *construction* は不向きである。ゆえに、本論文は、文を作るに際して、どのような要素をどのような規則で組み上げるかを取り扱う構文 (*syntax*) 論を用いる。

3.2. コーパスによる傾向調査

直喩の多様な構文は主に文末形式と文頭形式によって構成される。文末部は、「ようだ」「みたいだ」などの助動詞、「思う」「感じる」などの知覚動詞といった発話者の心理的な捉え方を表す文法形式群から選択される。文頭部は、「まるで」「あたかも」「さながら」といった比喩を予告するという点で範列的な関係にある副詞群から選択される。これらの文法形式は置換可能であることが多く、成立する環境や成立しない環境を明瞭に整理することが難しい。

- (1) よくよく眼を凝らすと、大きいとも小さいともつかぬ奇怪なカタツムリのような螺旋状の空間の輪郭のようなものが、かすかに見てとれる。

(サンプル ID : LBc9_00162 野田昌宏『銀河乞食軍団』¹⁹⁾)

- (1') よくよく眼を凝らすと、大きいとも小さいともつかぬ奇怪なカタツムリみたいな螺旋状の空間の輪郭のようなものが、かすかに見てとれる。
(2) ユダヤ人が『タルムード』やユダヤの古典を、かびが生えた古書のように扱わずに、まるで昨日書かれた書物のような新鮮さをもって読むのは、長い

¹⁹ 本論文は分析対象となる直喩表現に下線を引く。直喩以外の分析対象には二重下線を引く。また、分析対象とは別に注目する部分に波線を引く。なお、「サンプル ID 著者『書名』」と記した出典は全て BCCWJ である。BCCWJ 以外の用例を用いる場合は、書籍は「著者『書名 (もしくは作品名)』」と記し、Twitter から得た例は「Twitter : 年.月.日」と記す。出典を表記しない例は作例である。

歴史の経験から生みだした教訓を大切にするからである。

(サンプル ID : PB41_00126 ラビ・マービン・トケイヤー(著)/加瀬英明(訳)『ユダヤ 5000 年の教え』)

(2') あたかも昨日書かれた書物のような新鮮さをもって読むのは、長い歴史の経験から生みだした教訓を大切にするからである。

(2'') さながら昨日書かれた書物のような新鮮さをもって読むのは、長い歴史の経験から生みだした教訓を大切にするからである。

直喩の文法形式は、このように相互に置換可能な例が多く、「ようだ」が A の環境で用いられ、「みたいだ」は B の環境で用いられるというようなクリアカットな使い分けにはなっていない。しかし、これらの直喩の構文は出現するレジスターに偏りがある。加藤ほか (2020) にて構築した「指標比喩データベース」を用いて文法形式ごとのレジスター分布を確認すると次の【表 3】となる。「手にする」「口にする」などの「する」を用いた換喩、「思う」「感じる」などの動詞を指標とした比喩、「まるで」などの副詞が前置した比喩、その他の接辞などが付加された比喩の分布である。直喩に関わるのは D (動詞) タイプと F (副詞) タイプである。

【表 3】：指標比喩のレジスター分布

レジスター	する	D (動詞)	F (副詞)	その他
OC (Yahoo!知恵袋)	11	5	9	0
OW (白書)	44	1	3	0
OY (Yahoo!ブログ)	13	8	42	0
PB (書籍)	52	22	209	14
PM (雑誌)	38	13	127	20
PN (新聞)	66	22	77	23

D 及び F の分布を見ると、OC (Yahoo!知恵袋)・OW (白書)・OY (Yahoo!ブログ) に対して PB (書籍)・PM (雑誌)・PN (新聞) への出現数が多いことが分かる。特に、PB (書籍) への出現頻度が高い。これは、PB のジャンルとして文学が存在するためである。フィクションに用いられることを主としつつ、新聞のような実際に起きた出来事や意見の記述を主とするテキストにも出現する。一方で、F タイプは OY への出現も多く見られる。このように直喩の構文一般として書籍への出現が多いという共通した傾向を持ちつつも、F タイプが「Yahoo!ブログ」に現れやすく、構文ごとの分布に偏りがある。つまり、直喩の構文はランダムに用いられ、均衡的な出現分布になるのではない。それは直喩の構文ごとに異なる表現上の性質・働きを持ち、表現の意図・目的に応じて使い分けられていることを意味する。このような出現傾向の偏りから直喩の働きを論じることができる。よって、本論文は BCCWJ を用いて分析対象となる直喩表現を収集し、テキストジャンル分布や構文タイプの集計を行うことで出現傾向を明らかにした上で、直喩の表現上の性質・働きを論じる。

4. 用例収集の概要

本論文が以下の章で用いる用例の概要を述べる。本論文は BCCWJ を用いて収集した

用例を対象として分析を行う²⁰。収集した直喩表現の概要は以下となる。

① 「ようだ」型直喩：助動詞「ようだ」を用いた直喩表現

検索システム「中納言」にて語彙素「様」で検索を行うことで収集された助動詞「ようだ」の全 362,563 例から比喩として用いられている例を目視で選別した。その結果として、23,262 例を得た。その内、「まるで」などの副詞が前置した表現は除くことで、19,158 例の「ようだ」型直喩を得た。

② 「みたいだ」型直喩：助動詞「みたいだ」を用いた直喩表現

検索システム「中納言」にて語彙素「みたい」で検索を行うことで収集された助動詞「みたいだ」の全 24,220 例から比喩として用いられている例を目視で選別した。その結果として、3,861 例の「みたいだ」型直喩を得た。

③ 「そうだ」型直喩：助動詞「そうだ」を用いた直喩表現

検索システム「中納言」にて語彙素「そう」、品詞を「形状詞 - 助動詞語幹」及び「名詞 - 助動詞語幹²¹」で検索を行うことで収集された助動詞「そうだ」の全 54,758 例から比喩として用いられている例を目視で選別した。その結果として、263 例の「そうだ」型直喩を得た。

④ 知覚動詞型直喩：知覚動詞を用いた直喩表現

BCCWJ をもとにして加藤ほか（2020）にて構築した直喩表現のデータベースである「指標比喩データベース」を用いて収集した。分析対象となる知覚動詞として、「感じる」21 例、「思う」27 例、「考える」5 例、「見る」4 例、「見える」2 例、「思い知る」2 例、「その他」24 例の計 85 例が収集された。

⑤ 「まるで」型直喩：副詞「まるで」と助動詞「ようだ」を用いた直喩表現

「ようだ」型直喩の収集において除いた、副詞を前置した直喩の中から「まるで」を前置する直喩文を選別した。その際、比喩判断の揺れによる漏れが存在する恐れがあったため、検索システム「中納言」にて語彙素「丸で」で検索を行うことで収集された副詞「まるで」の全 8,226 例から助動詞「ようだ」と共起する例を目視で選別した。それによって、「まるで～よう」構文が 4,590 例収集された。この構文を比喩として用いている例を目視で選別した。それによって漏れた例を補うことで 3,071 例の「まるで」型直喩を得た。

⑥ 「あたかも」型直喩：副詞「あたかも」と助動詞「ようだ」を用いた直喩表現

「ようだ」型直喩の収集において除いた、副詞を前置した直喩の中から「あたかも」を前置する直喩文を選別した。その際、比喩判断の揺れによる漏れが存在する

²⁰ ただし、立論の都合上、BCCWJ 以外の書籍や Web サイトから収集した用例を掲載する場合もある。

²¹ 前者は「瓶が落ちそうだ」のように用言の連用形に接続して物の様態を表すものであり、後者は「彼は鹹だそうだ」のように用言の終止形に接続して主に伝聞を表す。本論文は、様態「そうだ」と伝聞「そうだ」の両者を含めて収集した。

恐れがあったため、検索システム「中納言」にて語彙素「恰も」で検索を行うことで収集された副詞「あたかも」の全 1,121 例から助動詞「ようだ」と共起する例を目視で選別した。それによって、「あたかも～よう」構文が 717 例収集された。この構文を比喻として用いている例を目視で選別した。それによって漏れた例を補うことで 262 例の「あたかも」型直喩を得た。

⑦「さながら」型直喩：副詞「さながら」と助動詞「ようだ」を用いた直喩表現「ようだ」型直喩の収集において除いた、副詞を前置した直喩の中から「さながら」を前置する直喩文を選別した。その際、比喻判断の揺れによる漏れが存在する恐れがあったため、検索システム「中納言」にて語彙素「宛ら」で検索を行うことで収集された副詞「さながら」の全 524 例から助動詞「ようだ」と共起する例を目視で選別した。それによって、「さながら～よう」構文が 99 例収集された。この構文を比喻として用いている例を目視で選別した。それによって漏れた例を補うことで 82 例の「さながら」型直喩を得た。

以上の方法によって収集された直喩表現をもとにして議論を行う。

5. 本論文の構成

本論文は「序章」「結論」と本論 4 章で構成する。

「序章」は本論文の対象とその定義、目的、方法を述べた。また、直喩に関わる先行研究を概観し、その問題点と方法論的な限界を述べた。先行研究の方法論的な問題を踏まえ、本論文では構文論とコーパス調査を用いることを述べ、その概要を述べた。

第 1 章は直喩を形成するために必要な条件と直喩の形成における助動詞の関与を論じる。直喩はイメージを構文によって言語化し、それが聞き手に理解されることで成り立つ。ここで、他者が理解するに足る根拠と確度がイメージにあることを表す必要があり、これを助動詞などの文末部が担う。「ようだ」や「みたいだ」といったみとめ方・真偽判断に関わり、確からしさを表示する助動詞によって主に形成される。一方で、「そうだ」や「らしい」も確からしさを表示を行うが、直喩の形成は稀であるか困難である。また、「感じる」や「思う」といった人間の知覚や思考に関わる動詞（句）が直喩を形成することもできる。これらの文法形式の意味・性質が直喩の形成に必要な条件を満たすことで直喩の文末部として選択されることを論じる。

第 2 章は文末部の選択によって生じる直喩のヴァリエーションを論じる。選択可能な文法形式群の中から排反的にある文法形式が選択されることで直喩表現は形成される。ある文法形式が選択されることで、他の選択されなかった文法形式とは異なる表現上の性質・働きを獲得する。このような他の文法形式との差異から獲得する性質・働きを「表現価値」と呼称し、「A は B のようだ」型直喩、「A は B みたいだ」型直喩、「A は B そうだ」型直喩の表現価値をコーパスによる実態調査から明らかにする。

第 3 章は直喩の文頭部である副詞と比喻の関係、副詞の選択によって生じるヴァリエーションを論じる。直喩に前置される「まるで」「あたかも」「さながら」などの副詞を比喻に対する叙述態度をコントロールする事柄目当てのモダリティ副詞として捉える。そして、叙述態度をコントロールすることで直喩の情報としての質が変わることを見る。

このような副詞による直喩のヴァリエーションである「まるで」型直喩、「あたかも」型直喩、「さながら」型直喩の表現価値を副詞の意味とコーパスによる実態調査から明らかにする。

第4章は文の中で直喩がどのような成分として働くかを典型例である「ようだ」型直喩と副詞・形容詞との比較から論じる。直喩は、物事のあり様を表す修飾成分として主に用いられる点で様態副詞や属性形容詞と類似する。しかし、複合的な属性や目の前性を喚起する点で区別される。また、状態や属性の程度を表す周辺的な用法が存在する。これは程度副詞と類似する。しかし、直喩はイメージを用いる点で程度副詞と異なる。程度という発話者の心理内において相対的に決まり、かつ抽象的な範疇をイメージによって聞き手に具体的に理解させる表現であることを論じる。

結論では本論文の議論を総括し、直喩のレトリックとしての位置付けを述べる。そして、議論のまとめと理論的な寄与及び今後の課題を述べる。

第1章 直喩と助動詞

1. はじめに

1.1. 本章の目的

本章は、直喩を形成するために必要な条件とその成立を支える文法的な要素である文末部が果たす働きを論じる。対象となる文法形式は直喩を形成する典型的な助動詞である「ようだ」とその類似形式である「みたいだ」「そうだ」に加え、直喩において周辺の形式である「思う」や「感じる」といった人間の知覚・思考に関わる動詞である。

1.2. 先行研究とその問題

日本語において直喩を形成する文法形式は、中村（1977）や小松原・田丸（2019）、加藤ほか（2020）の調査から、助動詞をはじめとして接辞や形式的な動詞・名詞など多様であることが明らかとなっている。このような多様な形式は、中村（1977）や鍋島（2016）によって意味的な範疇が整理されている。中村（1977）は指標喩の収集・分類を行った上で、喩指標要素を「類似」「同一」「比較」「混同」「連想」「強意」「限定」の範疇に分けている。鍋島（2016）は、形式的な指標を「メタファー明示表現」とした上で、その意味的な範疇を「類似」「同一」「同一性の否定」「引用」「仮想」「相違の否定」とした。本章が対象とする「ようだ」や「みたいだ」は中村（1977）、鍋島（2016）では「類似」の意味的な範疇に属するとされ、「思う」や「感じる」などは鍋島（2016）には言及がなく、中村（1977）では「連想」の範疇に属するとされる。「そうだ」は両者とも、どの範疇に属するかが言及されていない。「ようだ」「みたいだ」は類似性を表す要素として見られ²²、「思う」「感じる」は対象から惹起される主体の心理内における連想を表す成分として見られ、「そうだ」は未分析の状態にあることが分かる。「ようだ」「みたいだ」は、類似性との関わりから直喩における働きが論じられている。

また、木下（2003）は、類似性を担う文法形式として「ようだ」を捉え、同様に類似性を表示する「似ている」との違いを考察している。「AはBのようだ」はAをBの一種として、新たなカテゴリーを生成する機能を持つと主張する。「ようだ」と「似ている」では表す類似性の質が異なり、「ようだ」は差異が捨象され、類似点のみに焦点が当たり、「似ている」は類似点と差異が同時に焦点化されると述べる。森山（1995）は、「ようだ」「みたいだ」を推量・喩・例示を表し得る多義的な助動詞として捉え、その多義性を「AはBのようだ／みたいだ」におけるAとBの二項の関係性から論じる。二項は同一・包含・不一致・不明の関係が論理的な関係として仮定され、そのような二項の関係と「ようだ」「みたいだ」が担う類似の意味との関係から推量や喩が生じる

²² 他に、内田（1977）は、「ようだ」「みたいだ」を「直喩の述語」とし、「喩の意味を表わすのが本来」（p.359）とする。そして、「ようだ」「みたいだ」の機能を「所喩と能喩の関係決定」とであるとす。所喩と能喩の関係とは、二つの事柄に共通項と差異を有するというものであり、「ようだ」「みたいだ」という助動詞を喩において類似性を表示する要素として捉えている。

とする。

これらの研究は「ようだ」「みたいだ」といった助動詞が類似性を表すと見て、その類似性の質や類似性を明示することと比喻の関係を論じている。しかし、「ようだ」「みたいだ」が類似性を表す文法形式だとすると、推量・婉曲・祈願・命令・目的・結果など、これらの文法形式が獲得し、かつ類似性が関与しない用法を説明することが困難となる。「ようだ」「みたいだ」などが類似性を表すとするのは、これらの助動詞の文法的意味として妥当ではなく、意味分析としての妥当性に疑問がある²³。また、「思う」「感じる」のような知覚動詞と直喩の関係は他に言及する研究はない。

つまり、直喩の成立条件と成立するに際して文末部が果たす働きは未解明の状態にある。そこで本章は直喩が成立するために必要となる条件を考察し、文末部の文法形式に要求される性質を述べる。その上で、各文法形式の意味がその条件を満たし、直喩の形成を文法的に支えることを見る。

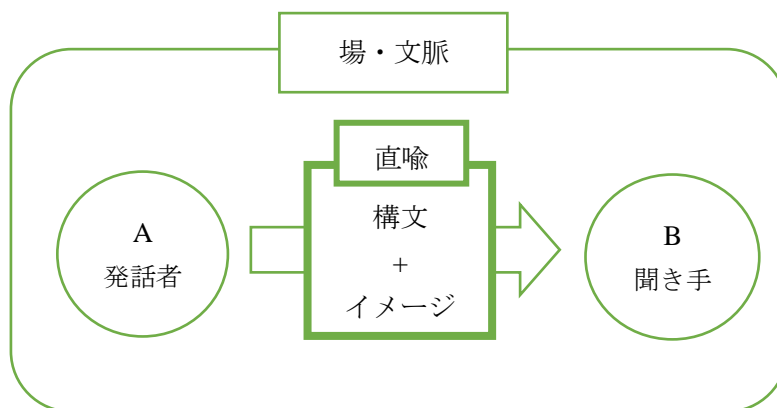
2. 直喩の形成

本節は直喩の成立条件を述べる。直喩は、発話者²⁴の意図をイメージに仮託し、そのイメージを構文によって言語化することで聞き手へと伝達する技法である。この伝達は、特定の間・文脈の中で行われ、特定・不特定の他者である聞き手に向けられる。イメージ・構文のような言語内の要素、間と文脈・聞き手のような言語外の要素に支えられて直喩は成立する。

直喩は言語技法であり、何らかの情報を伝達するために用いられる。その伝達は、発話者から聞き手へとなされ、両者を取り巻く環境として間・文脈がある。ここで間とは発話者と聞き手で共有する空間を言い、文脈とはある発話までに共有してきた時間を言う。発話者・聞き手、間・文脈のような直喩を支える言語外の要素を「外部要素」と本論文は呼ぶ。また、発話者から聞き手に伝えられる内容があり、それをイメージに仮託し、構文によって言語化する。伝達内容・意図、イメージ、構文という直喩を支える言語内の要素を「内部要素」と本論文は呼ぶ。直喩はこのような外部要素と内部要素に支えられて成立する。

²³ 「類似する」「類する」「似る」「似ている」のような動詞によってメタ的に言及する動詞を類似性標識と認めることはできる。しかし、これらの形式が比喻表現を形成する事例は稀であり、一般化することは難しい。

²⁴ 本論文では直喩の送り手を「発話者」とし、直喩の受け手を「聞き手」とする。ここには、書記言語における書き手・読み手も含まれる。



図：直喩の内部要素と外部要素

ある場・文脈の中で、発話者 A から聞き手 B に対してイメージを構文によって言語表現化して提示することが喩の基本的な働きであり、その図示である。これまでの喩研究は、序章 2.1 節や 2.2 節に見たような語彙論的手法によるイメージの種類のリストアップやイメージを手がかりとした発話者 A の心的情報の析出、構文の種類のリストアップがなされてきた。このような研究は、聞き手 B の存在や場・文脈の要素が欠落している。ある場・文脈において聞き手が理解してはじめて喩表現は成立するのであり、聞き手の理解は発話者が提示したイメージとそれを言語表現化している構文を手がかりとする。ここで構文は、発話者の意図を聞き手が理解するための言語的な手がかりとして位置付けられ、発話者の意図と聞き手の理解を支える働きを持つ。このように喩表現は、場・文脈、発話者と聞き手という言語外の要素、イメージと構文という内部要素に支えられて成立する²⁵。

2.1. イメージ

直喩はイメージを用いた表現である。喩表現におけるイメージは、半沢（2016）において「言語刺激によって喚起・再生される対象の意図的な表象像」（半沢 2016：p.80）として規定される。また、ここでいう「表象像」は視覚的な像に限定されず、「それ（引用者注：視覚）を中心としつつも、他の感覚モダリティ（聴・嗅・味・触覚）に対応するイメージを排除するものではな」（ibid：p.80）いとする。本論文もまたこの規定に従いつつ、イメージを言語によって喚起される知覚像と規定する。

- (1) 春朗は、自分の肩にふれた禿のかわいい紅葉のような小さな手をさすった。

（サンプル ID：PB29_00224 大下英治『北斎おんな秘図』）

- (2) そして今日は土曜日、村の人たちはまだ眠りを貪っているなか、ザクザクと氷のような雪を踏みながら撮影ポイントに向かう。

²⁵ このような図式は直喩だけでなく、隠喩・換喩・提喩・諷喩といった他の喩法にも当てはまる。喩法が、対象 A に言及するためにそれとは異なる言語形式 B によって表現するという性質を持つ以上、発話者がある文法形式を用いて提示したイメージは、場と文脈から情報が共有され、聞き手に理解される。換喩や提喩は隣接性や包含性に依拠するためイメージの質が異なることで直喩とは区別される。諷喩は一文と他の文との関係というテキストレベルで生じる喩であるため、構文を越えた単位で成立することで区別される。隠喩とは、類似性を基にする喩であることで共通し、その理解が場と文脈、聞き手とのイメージ・情報の共有である点でも共通する。隠喩と直喩は構文によって区別され、どのような文法的な支えによってイメージを提示し、聞き手の理解を促すかに違いがある。

- (3) 過去の二人は玉椿の八千代をかけて契りをこめた……といふではない、互に胸の底を明し合うて恋を語った……といふでもない、たゞ夜詰を交代の奥女中が長い遠い畳廊下の彼方と此方に、あちらからも懐しい火が来る、こちらからも懐しい火が往くと、囲うてゐる袖の隙から、持った手燭から流るゝ真紅の光を、ほのめかし合うたに過ぎぬやうなもので、自分は彼の女を思つてゐる、私は彼の男を思つてゐると、互に自覚はしていたものの (…)

(大塚楠緒子「客間」)

(1) は小さな手を大きさ・形状において類似する「紅葉」の視覚的イメージを用いて喩えている。(2) は、固い雪の感触を「氷」の触覚的イメージを用いて喩えている。このように「紅葉」「氷」のような名詞(句)が指示する事物のイメージによって表現対象を具体化する。また、(3) のように詳細に造形されたイメージも用いられる。

これらの直喩において、たとえば[紅葉のような手]という事象は、人間の手が紅葉から組成されることはあり得ず、物理的には無価値な情報を提示している。このような情動的な特徴を中村(1977)は「事実否定性の意識」と呼び²⁶、前田(2006)は「反事実的リアリティ」と呼ぶ。しかし、コミュニケーションに用いられることを考えた場合、事実ではないことを他者に伝える(存在しない・成立しない事象を述べる)ことは、Grice(1989)における会話の公理、特に偽の情報を述べてはいけないという質の公理に違反し、嘘や思い込みを述べることと同様に聞き手において価値ある情報とならないことが予想される。しかし、比喩は物理的に存在しない・成立しない事象を述べているにも関わらず、ナンセンス文の発話と等価ではなく、コミュニケーションにおいて意味ある発話行為となる。比喩には事実否定性・反事実的リアリティ以外の条件が存在することを意味する。

イメージとは物理的世界には存在しないが発話者の心理的世界に存在する知覚像である。事象の物理的真偽よりも発話者の心理内における確からしさが優先されることで、直喩は発話者の心理的な情報の伝達としてコミュニケーション上の価値を獲得する。直喩は主体が対象に感じた心理的な実感を他者に伝えるために用いられるのである。

- (4) 秋子の眼は、いつもは淡桃色の靄に囲まれたように潤んでくるのだが、その日は、ガラス玉のように眼窩に嵌っているだけだった。

(吉行淳之介「娼婦の部屋」)

- (5) 三宅さんは革ジャンパーのポケットから薄い金属製のフラスクを出して、啓介に手渡した。啓介はふたを回して開け、唇をつけずに口の中に注ぎ、ごくりと飲み下した。そしてふうっと息を吸い込んだ。

「うめえ」と彼は言った。「こいつはまぎれもない21年もののシングル・モルトの逸品だ。樽はオークですよ。スコットランドの海鳴りと、天使の吐息

²⁶ 中村は「事実性否定の意識」の他に「修辞意識」を比喩の条件に求める。「修辞意識」は「送り手側に表現効果を高めようとする意識があるかどうか」ということである。表現上の効果を得るために、たとえば、肌ではない雪という事実否定的な事物同士を結びつけ、「雪のような肌」という比喩表現が成立する。表現主体の事柄への認識と対人的使用における目的を比喩の成立条件として論じたものである。しかし、聞き手における比喩解釈の問題と「修辞意識」などの発話者における意識の問題が混在している。また、情報の質として偽のみを条件としたため、嘘や思い込みなどとの弁別が困難となっている。

が聞こえる」

「あほ、適当なこと言うな。ただのサントリーの角瓶やないか」

(村上春樹「アイロンのある風景」)

(4) は「秋子」の眼の無機質さなどを表すために「ガラス玉」を用いて表現する直喩である。対象となる秋子に対して発話主体が見て取る意志性の欠如などを無機物という意志を持たない事物によって表す。心理的な実感が喩辞に仮託されている。[秋子の目はガラス玉である]という評価は、物理的な性質としては無価値な情報であるが、発話主体の心理的には有意味である。一方で、(5)における「啓介」の発話はウィスキーを「21年もののシングル・モルト」と評しているが、後続する三宅の発話で「サントリーの角瓶」であることが明示される。啓介の発話は当該ウィスキーの物理的な性質において偽の言明を行っていることが分かる。物理的に偽の情報を言明する点では(4)と同じだが、[このウィスキーは21年もののシングル・モルト]という評価は比喩とはならない。啓介はお調子者として描写されており、当該のウィスキーへの評価も安物であることを承知しながら述べたものである。つまり、啓介の心内において「21年もののシングル・モルト」という評価は真ではなく偽となる。物理的にも偽であり、心理的にも偽となるためにイメージとしての価値を獲得せず、比喩ではなく「適当なこと」となる。(4)と(5)の違いから、比喩は<物理的には偽である／成立しない事象>が<心理的には真である／成立すること>によって成立することが分かる。

2.2. 確かなイメージとしての提示

物理的に成立しない事象が心理的に肯定されることでイメージは情報としての価値を獲得する。直喩は、イメージの心理的な肯定を「ようだ」などの助動詞をはじめとした文末部を用いて表す。直喩を形成する文法形式は「ようだ」や「みたいだ」などの助動詞が主である。これらの助動詞は文法カテゴリーとして、みとめ方(極性、肯否、polarity)やモダリティに属し、事柄の成立・不成立や真偽判断を表す。

一般に文は、事柄的内容を表示する命題・事象部と命題・事象に対する発話者の心的態度を表示するモダリティから成る。

[命題・事象] + [モダリティ]

そして、命題や事象は述語を中心として事態の参与者などを表示する格成分の付加によって構成され、述語文末において文法的意味を担う助動詞や接辞が付与される。これらの機能語が表示する文法カテゴリーには階層性がある。

[[[[[[命題 (格成分+述語)] ヴォイス] アスペクト] みとめ方] テンス] 丁寧さ]

テンス・丁寧さの外側がモダリティとなり、命題に対する発話者の捉え方や伝達態度を担う。直喩を形成する主な助動詞である「ようだ」や「みたいだ」は従来、「真偽判断のモダリティ」(益岡 2000)、「徴候性判断のモダリティ」(仁田 2000)、「認識的モダリティ」(木下 2013)とされてきた。しかし、これらの助動詞はモダリティとしての働

きだけでなく、みとめ方としても働く。「ようだ」「みたいだ」は修飾節を形成することが可能であるなど、今・この話者判断を表す典型的なモダリティである「だろう」などとは異なり、修飾節の形成やテンスの分化を見せる。

- (6) 彼は学生のように／みたいだ。
- (7) 彼は学生だろう。
- (8) 学生のような／みたいな人。
- (9) *学生だろう人。
- (10) 学生のようにだった。
- (11) *学生だろうった。

(6) (7) のように「ようだ」「みたいだ」は文末に使用された場合、命題「彼は学生」に対する心的態度を表し、モダリティに相当する働きを見せるが、(8) (9) のような修飾節では心的態度の表明は潜在化し、(10) のように過去時の判断を表すことができ、テンスの分化が見られる。「だろう」は今・この話者判断であるという性質上、(9) のように修飾節へ生起せず、また (11) のように過去形を持たない。「ようだ」や「みたいだ」は文法カテゴリーとしてはみとめ方に近い位置で働く。

- (12) 彼は練習をし [[[[[てい] ない] ようだ] った] だろう] ね。]
- (13) 彼は練習をし [[[[[てい] なかつ] た] よう] だろう] ね]
- (14) 学生である人
- (15) 学生でない人

(12) のように述語文末において、「ようだ」はみとめ方「ない」とテンス「た」の中間に位置している。典型的なモダリティ「だろう」は「ないだろうった」のようにみとめ方とテンスの中間に位置することは不可能である。(13) のように「ようだ」がテンスの外側に生起することも可能であるが、これは文末に現在形で生起し、判断辞「だ」を伴うことで今・この発話者の判断という条件を満たして擬似的にモダリティとして用いた例となる。また、みとめ方に関わる文法形式である「である」「でない」は (14) (15) のように、修飾節に生起して対象となる人物が「学生」であるかどうかの真偽の認定を表示することが可能である。これは (8) のように「ようだ」「みたいだ」などが修飾節を形成することと類似する。このように、文上の位置の近接や文末部・修飾部の両方への生起可能性から、「ようだ」「みたいだ」などの助動詞は主にみとめ方のカテゴリーに関与することが分かる。これらの助動詞は、命題の真偽や事象の成立に対する肯定・否定に対して、どちらかの極ではなく確からしさや蓋然性といった度合いによって認定していることを表示する。そして、その認定（心理における真偽・肯定の判定）と言及される物理的世界における真偽や事象の成立・不成立の関係によって比喩や推量、婉曲などの事柄の真偽に関わる用法を獲得する。

- (16) 社長、車が来たようです／みたいです。
 (17) 会場は満員のようだ／みたいだ。
 (18) 肌は雪のようだ／みたいだ。

【表 1】：事柄のみとめ方と用法

用例	命題	真偽（物理）	真偽（心理）	用法
16	「車が来た」	真	真（確か）	婉曲
17	「会場は満員」	真偽未確認	真（確か）	推量
18	「肌は雪」	偽	真（確か）	比喻

(16) は車が来たことは目視によって確認できていたとしても、目上の人間に「車が来た」と直言することを回避するために確定情報ではなく、発話主体が認定した確からしさのもとに命題を提示することで婉曲性を獲得する。(17) は命題「会場は満員」の真偽は主体にとって未確認だが、チケットの売れ行きなどを根拠として、真であることが確かである判断を表す。真偽未確認の命題に確からしさを付与することで推量用法を形成する。(18) の比喻用法は、命題「肌は雪」は物理的には成立せず、偽の情報である。しかし、ある人物の肌の美しさに対する主体の実感として述べるならば、心理的には真の情報となる。物理的には存在しない事象を心理的には確かとすることで比喻用法が形成される。

このようなみとめ方に関わる文法形式がイメージを文法的に支えることで直喩が成立する。2 節に述べたように、イメージは聞き手に理解されてはじめて情報としての価値を持つ。つまり、発話者が心理的に肯定するだけでなく、聞き手もまた肯定する必要がある。イメージという発話者の心理内の知覚像を聞き手が理解するためには根拠が必要となるため、直喩を形成する文法形式としては根拠を持った肯定を表すことが要求される。「ようだ」や「みたいだ」はそれらが表す確からしさが根拠に基づくものであることを表しており、証拠性 (evidentiality)²⁷を有する。

- (19) 寄ってみると中は広い、奥さんはパスタランチ、親父はハンバーグランチをオーダー。食事が出来る前に珈琲が出てきた。これはサービスらしく、食後にもご馳走になれた。話を聞くと以前は和風料理の店だったようだ。

(サンプル ID : OY01_00236 Yahoo!ブログ)

- (20) ニュースによりますと、リーマンブラザーズが破産法適応申請の見通しとの事です。いろいろ噂されていましたがね。資金の出し手がみつからなかったみたいです。

(サンプル ID : OY01_01568 Yahoo!ブログ)

- (21) 役員経験は初めてなのでドキドキですが、なんだか楽しそうです☆きっと忙しくなるんだろうと思うけど、ヒマよりいいよねー^^

(サンプル ID : OY08_01172 Yahoo!ブログ)

(19) は料理屋について「以前は和風料理の店だったようだ」と述べている。「話を聞くと」とあり、その判断の根拠となる情報の存在が示されている。根拠を有した判断

²⁷ 「証拠性」は日本語記述文法研究会編 (2003) によって「その情報が何に基づくかということについての認識的な意味」(p.164) と定義される。

として「ようだ」が用いられている。(20) はリーマンブラザーズに資金の貸し手がいなかったことを推定している、「ニュースによりますと」とあり、「ようだ」を用いた(19)と同様に判断の根拠となる情報の存在を示している。一方で、「だろう」を用いた(21)の場合、役員に選出されることで「忙しくなるんだろう」と推定しているが、「役員経験は初めて」とあるように判断の根拠となる情報はない。根拠となる情報の有無で推定に用いる形式が分かれていることが分かる。このように根拠に基づいた確からしさの認定を表す「ようだ」や「みたいだ」を用いることで、発話者の心内だけでなく、聞き手においても理解されるに足る根拠を有した確かなイメージであることを表す。このようにして、直喩の文末部は、発話者にとっては心理的な肯定を表してイメージを有意義なものとし、聞き手においては理解するに足る根拠を有したイメージとして提示する働きを持つ。

2.3. イメージの理解

直喩は、物理的・現実的には成立し得ない事象を発話者の心理内のイメージとしては成立すると認め、その心理的な真を優先するというプロセスによって成り立つ。そして、そのイメージが聞き手に理解されてはじめて有意義な表現となる。聞き手の理解は場と文脈というコミュニケーションの環境に影響を受ける。

イメージは発話者の心理内に存在する知覚像である。直喩においてイメージは喩辞に託される。喩辞の表すイメージがどのように解釈されるかは場と文脈によって変わる。たとえば、次の(22)と(23)のように同じ「ガラス」という喩辞を用いていても、その意味するところは異なる。

- (22) ぼくは、彼女の何を知っているだろう。かわいい顔、ほっそりした手足、ふしぎな、人にふれさせぬガラスのような心、中に火を秘めた氷のような、悲しみと生の歓喜、激しさと幼さ、いろいろなものが混じりあって七色の変化をみせる心――

(サンプル ID : LBI9_00044 栗本薫『猫目石』)

- (23) いそいそと矢印をたどっていくと、まともや立派な石の碑と対面した。「天皇・皇后両陛下下行幸啓記念碑」、ドッシリと玄関前に据えてある。ガラスのように磨きあげた黒石で、平成八年(千九百九十六)の建碑。

(サンプル ID : LBs9_00167 池内紀『ニッポン発見記』)

(22) は心のあり様を「ガラス」と形容する。精神的な脆弱さをガラスの脆さによって表現する。(23) は黒石でできた建碑の艶を「ガラス」の光沢によって表現する。(22)と(23)は同じ「ガラス」を喩辞に用いているが、(22)は脆さを取り立て、(23)は光沢を取り立てる。このように直喩は場と文脈によって喩辞が表すイメージの解釈が変わる。つまり、イメージそれ自体には先天的に解釈される内容はなく、場・文脈、発話者の意図によって解釈が決まるのである。そして、聞き手はその場において共有する情報や文脈の中で形成される知識を用いて、イメージを適切に解釈することができる。

- (24) かつて、私はある日本人の大学学長のお招きにあずかったことがあり、その時は十九品の料理が出されたが、どれもみな紙のように薄くスライスした魚か肉が（十七皿は魚で、二皿は肉だった）、皿いっぱい同心円状に少しずつ重ねて盛りつけてあった。

（サンプル ID：PB43_00285 リチャード・ルイス(著)/阿部珠理(訳)『文化が衝突するとき』）

- (25) ひどく犬の多い土地で、彼らはまるで水族館の鯽の群れのように雨の中をあてもなく歩きまわっていた。(…) 犬たちはみんな尻の穴までぐしょ濡れになり、あるものはバルザックの小説に出てくるカワウソのように見え、あるものは考えごとをしている僧侶のように見えた。

（村上春樹『1973年のピンボール』）

- (26) すると私は、このような他者の関心から長いこと遠ざかっていたような気がした。愚痴をいっているのではない。私も長いこと他者に熱い関心を持つことがなく、そういう人間が相手から関心を得られないことは仕方がなかった。ただケイの関心を、渴いた喉が久し振りに飲む水のように思うことに、やましさがあった。

（山田太一『異人たちとの夏』）

(24) はスライスしてある肉の薄さを「紙」と表現する。紙が薄いものであることは大方の人間に共有された知識であり、その共有知識を利用して当該の肉の薄さを具体化する。このように前もって共有された知識を利用する他に、共有が前提されないイメージを用いることもある。(25) はバルザックの小説『農民』の冒頭にカワウソが描かれることを典拠とした表現となる。バルザックの当該の小説を読んだ経験のない読者には理解されない直喩となる。ゆえに、(26) の波線部のように聞き手がどのようにイメージを解釈すればよいかを補助する必要がある。(26) は「私」が他者との関わりが薄かったという情報が直喩表現「渴いた喉が久し振りに飲む水のように」の前文脈で展開されている。そのような状況にある話者にとって、他者からの関心は喉の渴きを癒す水と等価であり、「水＝関心」という物理的に成立しない関係が、当該の話者にとっては真であり、文脈を追って「私」の心理を理解している読者にも共有可能なものとなる。

このようにイメージの適切な解釈は聞き手の知識や経験に依存するところが大きい。そこで、発話者は自身の意図を聞き手に了解させるために、解釈に必要な情報を後文脈で補填することがある。

- (27) また、酒発祥の地にちなんだオリジナルの純米大吟醸「江戸三」も、水のようにクセがなく、それでいて料理の味を引き立てると好評。

（サンプル ID：PB3n_00029 鬼頭英治『Me'nage kelly』）

(27) は日本酒の味・質感を「水」と喩えたものである。この表現における水は無味であることや流体であるという点ではなく、口中を強く刺激しないという点が卓立される。そのようなイメージとして理解すべきものであることを被修飾部「クセがなく」によって表す。どの点で理解するかを明示することで、ここで「水」をどのように解釈すべきかを共有できるようにしている。このように直喩の被修飾部にその表現

を理解するポイントを置く場合だけでなく、詳細な説明を加えることもある。

- (28) 亀蔵と云う、無頼漢とも云えば云われる、住所不定の男のありかを、日本国中で捜そうとするのは、米倉の中の米粒一つを捜すようなものである。どの俵に手を着けて好いか分からない。然しそれ程の覚束ない事が、一方から見れば、是非共為遂げなくてはならぬ事である。そこで一行は先ず高崎と云う俵をほどいて見ることにした。

(森鷗外「護持院原の敵討」)

- (29) 「(…) 武者小路の特徴は、なんといっても会話の多さと、その軽妙さね。ページを埋めつくすほどの長台詞が出てくることもしょっちゅうだけど、すべてにリズムがあつて、すらすら読み進めることができるの！言うなれば武者小路の作品は、一流の料亭でいただくお豆腐料理のようなものよ。食感はさっぱりあっさりしていながら、大豆の風味が絶妙の甘さとコクをかもしだし、あとを引くような苦りがあつて、最後の一口まで食べ終えた瞬間、ああ、美味しかったなあつて、溜め息をついてしまうのよ」

(野村美月『文学少女と月花を孕く水妖』)

(28) は住所不定の亀蔵を探し出し、仇を討つことを述べたものである。日本全国から住所不定の人物を探すことを「米倉の中の米粒一つを探す」と評する。直喩の後に「どの俵に手を着けて好いか分からない」とあり、困難であることの説明が行われている。(29) は武者小路実篤の小説の読書経験を「一流の料亭でいただくお豆腐料理」と評する例である。当該の発話は、文学作品を食すことで味を感じるという特殊な能力を有した人物の発話である。通常、読者は文学作品を食すことはできず、味読という語はあっても味覚を刺激されることはない。ゆえに、「食感はさっぱりあっさりしていながら、大豆の風味が絶妙の甘さとコクをかもしだし、あとを引くような苦りがあつて、最後の一口まで食べ終えた瞬間、ああ、美味しかったなあつて、溜め息をついてしまうのよ」という食の経験に則した直喩表現の説明を行う。

3. みとめ方と直喩

以上に述べたように、直喩は内部要素と外部要素に支えられることで、他者へとイメージを用いて意図・内容を伝達する手段として成立する。以下の節では直喩の内部要素である構文とそれを構成する文法形式に着目する。特に、助動詞や知覚動詞の持つ文法的な意味を分析し、それらが根拠を持った肯定を表すことで、直喩の形成に必要な条件を満たすことを確認する。

3.1. 助動詞ごとの比喩用法の違い

直喩の文末部は、主に「ようだ」「みたいだ」といったみとめ方に関わる助動詞が選択される。みとめ方とは、事柄の成立・不成立や命題の真偽を話者がどのように認定しているかを表す範疇である。「ようだ」「みたいだ」「そうだ」「らしい」などはその認定に証拠性が関与する。しかし、これらの助動詞すべてが等しく直喩を形成するわけでは

なく、形式ごとに差がある。これは、それぞれの助動詞と比喩に親和性が存在することを意味する。

【表 2】：助動詞ごとの比喩用法の割合

用例数	ようだ	362,563	みたいだ	24,220	そうだ ²⁸	54,758	らしい	28,416
比喩数	ようだ	19,158	みたいだ	3,861	そうだ	263	らしい	1(?)
比喩率	ようだ	5.3%	みたいだ	15.9%	そうだ	0.5%	らしい	0.004%

【表 2】は BCCWJ から収集した「ようだ」「みたいだ」「そうだ」「らしい」の全例から比喩用法を選別し、全例に占める比喩用法の割合を算出したものである。「ようだ」は全 362,563 例のうち、比喩用法は 19,158 例であり、全例に占める割合は 5.3%である。「みたいだ」は 24,220 例のうち、比喩用法は 3,861 例であり、全例に占める割合は 15.9%である。「ようだ」よりも高い値を示すが、これは本章 5.1 節で見ると「みたいだ」が「ようだ」よりも用法の種類が少ないためである。「そうだ」は全 54,758 例中、比喩用法は 263 例であり、全例に占める割合は 0.5%である。「らしい」は全 28,416 例中、比喩と推量で解釈が揺れる例があり、当該例を比喩と判断すると 1 例となり、比喩用法の割合は 0.004%である。ただし、後に述べるように当該例は推量用法の亜種とすることが妥当であり、実質的には 0 例である。この調査からは、比喩化する割合が高く、比喩との親和性が高い「ようだ」「みたいだ」と、比喩化することはあるが稀である「そうだ」と、比喩化することがほとんどない「らしい」という違いが存在することが分かる。これらは類義の助動詞であるが、比喩との親和性という点では異なる。また、本章 7 節に見るように「思う」「感じる」などの知覚動詞もまた比喩化することはあるがその割合は低く、その点では「そうだ」に近い。文法形式のどのような性質が比喩との親和性を高くするかが問題となる。

3.2. 直喩を形成しない「らしい」

以上に見たように、「ようだ」「みたいだ」は直喩の形成に高い頻度で用いられ、「そうだ」は低頻度ながら直喩の形成が可能である。一方で、これらと同様にみとめ方に関わる「らしい」は直喩を形成すること自体が困難である。本項は「らしい」の文法的意味が比喩と不親和であることを見ることで根拠への確証的な態度が直喩の形成に必要であることを見る。

3.2.1. 助動詞としての「らしい」

「らしい」は【表 2】に見たように、直喩の形成自体が困難である。これは「らしい」の助動詞としての性質が比喩に適わないためである。「らしい」は発話主体が対象に抱く判断や思考内容に対して確からしさを付与するが、その判断根拠に確証がないことを

²⁸「そうだ」は BCCWJ にて形状詞もしくは助動詞語幹とアノテーションされている。前者は「落ちそうな花瓶」などのような主に用言の連用形に後接するものであり、後者は「彼は鹹だそうだ」「彼は留学するそうだ」などのように用言の終止形に後接するものである。本稿は両者ともに集計の対象とした。なお、形状詞にのみに集計の対象を限定すると、38,826 例中 261 例 (0.67%) となる。

表示する。結果として「ようだ」や「みたいだ」などと比べて、確からしさが弱く、判断の責任性が回避される²⁹。

- (30) 善也は顔をしかめ、ポケットから両手を出し、ホームベースに向かってゆっくり大股に歩いた。ついさっきまで、息を詰めて父親らしき男のあとをつけていた。それ以外のことはほとんど何も頭に浮かばなかった。

(村上春樹「神の子どもたちはみな踊る」)

- (31) 時折り出会うクルマも、幅が狭くカーブが多く、ガードレールもない道ゆえにのろのろとしか走っておらず、静かなものだ。歩いていたのは、道ばたの家の人に竜ヶ岩洞への道を尋ねている、リュックを背負った若い男一人だけだった。その竜ヶ岩洞なるものは、私は行かなかったけれども、竜ヶ石山の南西の裾の、田畑の神社の近くにあるらしい。

(サンプル ID : LBa2_00013 堀淳一『消えた鉄道を歩く』)

(30) は対象人物である男についての善也の推測を表すものである。善也は幼少期から父親が不在であり、その姿を見たことがない。母親は、父親について、医者であり、かつ耳たぶが欠けていることを善也へと伝えていた。その情報をもとにして、街中で偶然見つけた耳たぶの欠けた医者風の男性を「父親」と推測してその後を尾行する。耳たぶの欠損した医者という特殊な人物であることから、自身の父親である確からしさが存在するが、街中で偶然出会ったものであり、また問いただして確証を得ているものでもないため、確証性は低くなる。これによって、当該の男性について、確証は弱いながらも「自身の父親である」という認定を表す。(31) は「竜ヶ岩洞」という場所に関する推量である。発話者は別の男性が道を尋ねていることを聞いている。その内容から「田畑の神社の近くにある」ことを推測している。他人同士のやり取りを又聞きして得た根拠であり、かつ自分では行って確認を取ったものでもない。ゆえに、根拠に対する確証が弱い。「(竜ヶ岩洞は) 田畑の神社の近くにある」という命題に対して、自身では確証を取っていない根拠に基づいて確からしさの判定を行うことで推量用法を形成している。

3.2.2. 「らしい」と比喩の不親和性

「らしい」において比喩と判断することが可能な事例は本論文の調査では次の (32) のみである。

- (32) まわりのどこかから生臭いような酸っぱいような嫌な臭気がしてきた。空地全体にただよっているようであった。近くの土中か落葉の下に土竜か何か動物の腐った死骸が埋まっていて、そこから湧く腐臭が霧に閉じこめられているらしく思われた。

(サンプル ID : LBd9_00022 藤枝静男『昭和文学全集』)

²⁹ 杉村 (2001) は「ようだ」と「らしい」の違いとして、「判断に話し手の責任が加わるかどうかといった点にある。すなわち、話し手の責任において判断を下す場合、『ヨウダ』は使えるが『ラシイ』は使えないのである」(杉村 2001 : p.35) と述べる。

(32) は空き地に漂う異臭の原因を推定している文である。動物の死骸から発せられる死臭が霧に包まれて通気の悪い空間に籠っているという判断内容は、真偽未確認の事態として推量用法の可能性もあれば、偽の事象として比喻用法の可能性もある。この例を比喻として解釈する可能性が生じているのは「らしい」節が「思われる」を修飾する補文となっているためである。これは本章 7 節で述べるように知覚動詞が話者の感覚体験や思考において偽の事象を真とすることが可能なためである。(32) において「思われる」を脱落させ、「らしい」を文末とすると、推量としての解釈が優勢となる。このように「らしい」は単独で比喻用法を獲得することはほぼ不可能であり、(32) は「らしく思われた」という形式によって偶発的に産出された推量用法の特殊な事例である。このように「らしい」は他の文法形式と共起することで、比喻として解釈され得る表現を形成することができるにとどまる。

このように「らしい」は比喻用法の獲得が困難である。これは「らしい」の助動詞としての性質に起因する。「らしい」は前項に見たように確からしさを表すが、根拠への確証が弱い。比喻は物理的な事象ではなく主体の心理内に存在するイメージを用いるという性質上、そのイメージをあらかじめ共有していない聞き手に有意味なものとして理解されるには、本章 2.2 節で見たようにイメージが曖昧でなく確かであること、また理解するに足る根拠が存在することを表示する必要がある。「らしい」は確からしさを表す点で前者の条件を満たすが、根拠への確証性が弱いという性質によって後者の条件を満たすことができない。このように「らしい」は助動詞としての性質が聞き手とのイメージの共有に要する条件とそぐわないため、直喩を形成する文法形式として選択されない。

4. 「ようだ」と直喩

以上に論じたように直喩の文末部として選択されるには確からしさと根拠への確証性が必要となる。「ようだ」は助動詞としての意味がその条件に適うため、【表 2】のように高頻度で直喩の形成に用いられる。本節は、「ようだ」の助動詞として持つ意味の分析を行い、比喻との関わりを論じる。

4.1. 助動詞としての「ようだ」

「ようだ」は対象へと抱く発話者の判断や思考内容に確からしさが存在することを表示する。そして、その確からしさの認定が外的な根拠に基づく。

- (33) 大豆 プロテイン、ビタミン B 1、ミネラルが豊富。でんぷんは少ない。タンパク質の質がよく、リノール酸も多くふくまれます。大豆でつくった豆乳は、潰瘍、ガン、肝臓、膀胱の病気によいようです。

(サンプル ID : PB14_00005 北山耕平『自然のレッスン』)

- (34) 写真の前列に四人ならんで腰かけてるまんなかの久布白直勝牧師は、とりにいる父よりも、一まわり長身で、肩幅もひろく、がっしりしている。父は身長は百六十四センチくらい、そのころとしては、ふつうよりすこし背は高いほか。写真のうしろの列の男たちは立ってるので、身長などの比較は

できないが、久布白牧師はひととき大きいようだ。

(サンプル ID : PB19_00002 田中小実昌『アメン父』)

(33) は栄養成分の記述を通して、豆乳が病気に有効であることを述べる。データという根拠に基づき、[豆乳が病気によい] という命題に確からしさを付与する。(34) は久布白直勝という牧師の身長について述べた文である。写真に写り込んでいる人々との大きさの比較から[久布白牧師はひととき大きい] という命題を確かとする。このようにデータや見た目という発話者の外部に存在する情報を根拠とした確からしさの認定を行う。これによって種々の用法を獲得する。

(35) 翌日仕事場で、佐々木は包装紙で包まれた小さな骨箱のようなものを小村に渡した。手触りからすると、箱は木でできているようだった。言われたように重さはほとんどなかった。

(村上春樹「UFO が釧路に降りる」)

(36) 「君達は、何ともないの?」「いやー、スルメを食べに行ったのは、一郎君だけです。オレ達は蕎麦を喰ったから」と二人は至極元気のようだ。(中略)
「いや、甘くベタベタに煮込んだスルメを喰ったんだって。それだと云ってるんだ、原因は…。(後略)」

(サンプル ID : OB0X_00013 檀一雄『火宅の人』)

(37) 空海において、すでに、かれ自身がいうように即身にして大日如来の境涯が成立しているとすれば、かれの書というのは、最澄のように律義な王義之流を守りつづけているというのも、おかしいであろう。

(サンプル ID : OB0X_00014 司馬遼太郎『空海の風景』)

(38) そしてすぐ彼は、斎藤伍長の顔は眠い顔ではなく、考えている顔だったことに気がついた。なにか一生懸命に考えこんでいる顔だった。(やはり眠いだ。眠いと、考えこむような顔になることもあるのだ。(後略))

(サンプル ID : OB0X_00020 新田次郎『八甲田山死の彷徨』)

(35) は同僚の佐々木から小箱を釧路へと運んでほしいという依頼を受け、その小箱が手渡された場面である。包装紙に包まれ、どのような材質かが視覚的に確認できないなかで、手触りから木製であると推測している。箱の材質は未確認だが、[箱は木でできている] という判断内容の確からしさを手触りという外的根拠によって認めることで、事物の属性を推定する用法となる。(36) は外見から「元気のようだ」と内面の様子を推し量っている。スルメを食べた一郎は体調を崩した一方で、「蕎麦を喰った」二人は体調を崩すことを回避している。二人の外見や蕎麦を食べたという情報を根拠として[二人は元気だ] という命題を確かとすることで人物の内的な状態を推量する用法となる。(37) は王義之流の書を守り続けた人物の例として「最澄」を挙げる例示用法である。空海の書に比肩し得る例として最澄が最も確かな人物である。当該の文脈で挙げる例として確かであることを表すことで例示用法を形成している。(38) は当該人物の顔の様子を「考えこむような」と表す様態用法である。「考えている顔だった」「考えこんでいる顔」と前文脈に明示されており、表情の様子として「考えこむ」とすることが確かとなる情報が明示されている。表情から推定される精神活動を確かとすることで表情

の様態を表す用法となる。このように「ようだ」は外的根拠に基づいた確からしさの認定を表す³⁰。

4.2. 外的な根拠によるイメージの確度

以上のように外的な根拠に基づいた確からしさの付与を「ようだ」は行う。物理的な事象としては成り立たないイメージに対し、「ようだ」が根拠を持った確からしさを与えることで、心理的に有意な情報として提示することができる。これによって、発話者にとって伝達するに足る確からしさが存在することを表示し、かつ聞き手が理解するに足る根拠があることを明示する直喩となる。

- (39) ——それは今も思いだす、月の澹い夜のこと、海の上に浮ぶ靄は煙のようだったが、煙は沈んで低く這い、沖はあいまいに、湾口のあたりの眺めさえすっかり距離感が失われていた。

(三島由紀夫「月澹荘綺譚」)

(39) は海上に浮かぶ靄の様子を表現したものである。靄と煙という形状・性質において近い事柄を引き結ぶ。このように近しい事物同士を用いる場合、どのような表現として提示したかという意図や事物同士が結びつく根拠を理解することは容易である。ゆえに、「ようだ」によって、発話者にとって確かであり、かつ聞き手にも理解するに足る根拠が存在することを明示する。しかし、このような容易に表現の意図や共通性が見出されるイメージによる表現だけでなく、作家の個別性の強いイメージを用いる (40) のような例もある。

- (40) 細く高い鼻が少し寂しいけれども、その下に小さくつぼんだ唇はまことに美しい蛭の輪のように伸び縮みがなめらかで、黙っている時も動いているかのような感じだから、もし皺があったり色が悪かったりすると、不潔に見えるはずだが、そうではなく濡れ光っていた。

(川端康成『雪国』)

(40) はヒロインである駒子の唇の様相を描写したものである。喩辞「蛭の輪」は美しさを喚起させない事物であるが、蛭の表皮が持つ艶や蛭に対する生理的な感情が結びつくことで美しさと同時に駒子の唇に対して島村が抱く生理的な欲望を表現する。美しい唇と醜怪な蛭は美の評価という点で対極性を持ち、通常ならば共起しない。しかし、形状、色合いなどの共通項が見出される。また、「伸び縮みがなめらか」「動いているかのような」「濡れ光っていた」のように動きや状態を注釈的に補足することで蛭の動きと唇の動きを重ね合わせる。このように共通項や注釈的要素によって、「唇」を修飾する発話者の確かなイメージとして「蛭の輪」は読者にとっても理解可能な形で差し出される。(39) (40) はともに偽の事象を用いているが、類似した事物を結びつける (39)

³⁰ このような「ようだ」の根拠について、菊地 (2000) は「判断材料は、ある対象についての観察 (体験)」(菊地 2000 : p.46) とした上で「判断材料は、観察プラス推論、あるいは伝聞したこと」(ibid : p.47) である「らしい」との違いを論じている。

と対極的な事物を結びつける (40) のように、事象を構成する事物同士の関係に違いがある。

イメージのように物理的に存在せず、発話者の心の中に存在する事象を語るとは、発話者と聞き手の情報の共有性が低い場合、理解されない可能性がある。ゆえに、「ようだ」を用いて、対象へのイメージに根拠の確度が高く、確度を保証する根拠の存在を明示することで、理解するに足る表現として提示する。それによって、聞き手は情報を文脈から探し、イメージを再構築する。(40) のような対極的な事物同士を用いたイメージが聞き手に理解されるためには、両者を結びつけた根拠とその結びつけが確かであるという確証が必要である。そのような比喩の解釈上の要求に対して、「ようだ」は対象へと抱いた思考・判断の確からしさを表示するという性質によって、聞き手側にとって意外な結合であってもそれらは発話主体にとっては確証のあるイメージであり、確証を得るだけの根拠を見出していることを表示することができる。

このように、「ようだ」型直喩は、(39) における「靄：煙」といった近しい事物を用いた比喩から (40) における「蛭：唇」といった通常結びつかない事物同士を用いた直喩表現を形成することができる。イメージの確度と根拠の存在を表示することで相手にも理解される見積もりが高くなるためである。比喩が解釈においてイメージの確度と情報の共有を要するため、発話者の確からしさを認定を表示する「ようだ」が直喩の形成において選択されるのである。「ようだ」はイメージの確度の指標なのである。

5. 「みたいだ」と直喩

以上の考察から「ようだ」は外的根拠に基づいた確からしさによって、発話者にとっての確証と聞き手の理解を保証することが分かった。それは、イメージの確度の指標として文末部に選択されることを意味する。一方で、「ようだ」の類義の助動詞として「みたいだ」があり、同様に直喩を形成する。「みたいだ」もまた確からしさを表すが、「ようだ」とどのように異なり、どのような確度をイメージにもたらすかを本項は見る。

5.1. 助動詞としての「みたいだ」

「みたいだ」は「ようだ」と同じく対象への思考や判断内容に確からしさが存在することを表す。一方で、「ようだ」が外的な根拠によって確からしさを認定するのに対し、「みたいだ」は自身の観察結果や自身の経験といった内的情報を参照して確からしさを認定する³¹。

- (41) 帰国して、近くの泌尿器科にすぐさまかけこんだ。引退間際の老医者は、オレを落ちつかせるためか、冷静に落ちついて宣告した。「急性の尿道炎みたいですね。薬を飲んでしばらくゆっくり安静にしてください。そうしたら直ります」

(サンプル ID : PB12_00004 西牟田靖『世界殴られ紀行』)

- (42) 「病は気から、ですね。具合が悪くなったら、元気になりそうなものを食べ

³¹ 宮地 (1968) や原口 (1974) などが述べるように、「みたいだ」は歴史的には「見た+やうだ」から成り、主体の知覚経験からの推し量りを表していたことに根ざすと推測される。

ばいい。風邪をひいたら焼肉を食う、胃の悪いときはガツやミノを食う。これ、けっこういいみたいです」

(サンプル ID : PB14_00090 実著者不明『薬屋さんで買える、良薬事典。』)

- (33 [再掲]) 大豆 プロテイン、ビタミンB 1、ミネラルが豊富。でんぷんは少ない。タンパク質の質がよく、リノール酸も多くふくまれます。大豆でつくった豆乳は、潰瘍、ガン、肝臓、膀胱の病気によいようです。

(サンプル ID : PB14_00005 北山耕平『自然のレッスン』)

- (43) 「トミちゃんにはまだ人生の悩みなんてものがわからないんだわ。あなたがお酒を飲むのは、ただ楽しいからだけでしょう？ 酔っぱらうのが嬉しいからでしょう？ だけど、あたしは違うの。忘れたいのよ。何もかも忘れたいの。だから飲むのよ。飲まずにいられないから飲む人間のつらさ、悲しさってものが、トミちゃんみたいな若い娘にはわからないんだわ」

(サンプル ID : OB1X_00023 五木寛之『青春の門』)

- (44) 「なによ」「おれたち、また時期がくれば昔みたいにがんばる気になるんだろうか」「どういうこと、それ」

(サンプル ID : OB1X_00216 五木寛之『四季・奈津子』)

(41) は陰部に違和感があるとする「オレ」に対して、診察結果を述べる老医者 of 発話を示した文である。診察の内容という自身の観察結果を根拠とし、「急性の尿道炎」と判断することに確からしさがあることを述べる。(42) は風邪をひいたときには食べたいものを食べることが最も効果的であるという経験談を述べる。発話者は焼き肉を食べることが治癒に繋がると思っている。このような知見は客観的な根拠に乏しく、発話者の経験や記憶に依存する。同じ治癒の確からしさを述べる(33)の「ようだ」例と対照的である。(43) は人生の悲しさを理解できない若い女性の例として対話相手である「トミちゃん」を挙げる。その時点の場において最も適切な例として挙げられている。(44) は将来、頑張ることができるかを問うている場面である。その中で、頑張っていた時期の例として自身の過去を取り上げ、「昔」と表現している。自身の過去とその記憶という内的な情報を用いた例示となっている。

「みたいだ」が内的な情報を根拠として確からしさを表示する助動詞であることは、獲得する用法が「ようだ」と異なることから証される。「ようだ」と「みたいだ」の獲得する用法は次の【表3】のように非対称的である。

【表3】：「ようだ」と「みたいだ」の用法

用法	ようだ	みたいだ	「ようだ」文例	「みたいだ」文例
比喩	○	○	肌は雪のようだ	肌は雪みたいだ
例示	○	○	ワインのようなお酒	ワインみたいなお酒
様態	○	○	怒ったような顔	怒ったみたいな顔
推量	○	○	彼が犯人のようだ	彼が犯人みたいだ
婉曲	○	○	車が来たようです	車が来たみたいです
知覚内容	○	○	苦しいように見える	苦しいみたいに見える
思考内容	○	○	どこかで聞いたように思う	どこかで聞いたみたいに思う
指示詞接続 ³²	○	△	このように	これみたいに
結果	○	△	勉強ができるようになる	?勉強ができるみたいになる
目的	○	△	間に合うように走る	?間に合うみたいに走る
命令	○	×	書類、やっておくように!	×
祈願	○	×	目を覚ましますように	×

「ようだ」にあつて「みたいだ」にない用法が存在し、「みたいだ」にあつて「ようだ」にない用法はない³³。「ようだ」は用法が多岐にわたり、「みたいだ」は用法の範囲が狭い。

比喩、推量、婉曲のような事柄の真偽に関わる用法は「みたいだ」「ようだ」とともに獲得する。「みたいだ」が獲得できない用法は「命令」「祈願」であり、「結果」「目的」も不自然となる。「命令」「祈願」「結果」「目的」は未実現の事態の成立に関わるものである。「命令」「祈願」用法は他者への行為指定としてそれを適用したものであり、他者への行為指定として用いないものが「結果」「目的」用法である。「みたいだ」は未実現の事態に関する確からしさを表示することができない。

このように、「ようだ」は実現・未実現、事柄の真偽に対する判断の確からしさを述べることができるのに対して、「みたいだ」は未実現の事態を取れず、既に実現した事態を取る。これは「みたいだ」が観察結果や経験、記憶といった自己の内的情報を参照した確からしさの付与であるという制約上、生じていない事態については解釈できないためである。「みたいだ」と「ようだ」の用法の範囲の違いは、両者の確からしさの認定の根拠の違いを反映している。このように「みたいだ」は話者の観察結果や経験、記憶といった自己情報を参照して確からしさを付与する助動詞である。

5.2. 内的な証拠によるイメージの確度

「みたいだ」は以上に見たように内的な情報を根拠として確からしさを表示する。これを利用して、根拠を持った確からしさをイメージに付与することで直喩を形成する。根拠に基づいて対象の具体的な様相を表す確かなイメージを提示するという点では「よ

³²「この」「その」「あの」といった連体詞として用いられる指示詞には「みたいだ」は接続できないが、「これ」「それ」「あれ」などの代名詞として用いられる場合は接続可能である。

³³ただし、例示の一部において、「みたいだ」から「ようだ」へ変換すると不自然になる用例が存在する。このような例示は発話主体が情報の焦点を掻い摘んで表示するものであり、一種の要約である。このような要約は発話者の解釈過程を経たものであり、自己の内的情報による確からしさを表示する「みたいだ」が好まれる。

○サビが「あなたがいないベッドで眠れない」みたいな曲。

(サンプルID : OC01_02766 Yahoo!知恵袋)

○?サビが「あなたがいないベッドで眠れない」のような曲

うだ」型直喩と類似する。

- (45) そこで、三人のうちで一番足の早いアックンが、ヒロミンちに走り、オレとタケちゃん、ヒロミを背負って山道をおりただけど、すっごい苦勞のすえに、ふもとにたどり着いたときには、顔は風船みたいにパンパンにふくらみ、手の方は、指先からヒジまでがハレあがっていた。

(サンプル ID : PB1n_00003 花形みつる『グッバイムカつきベイビー』)

腫れあがった顔の形状を「風船」によって表している。膨れ上がっていることやそれによる張りを、空気を充填した風船の膨れ上がり方と表面の艶によって表す。このような対象の形状のような外的あり様を表す表現においては「ようだ」型直喩と極めて近似する。一方で、確からしさを導く根拠の違いは、次の(46)のように外的なあり様ではなく、抽象的な関係性や視認できない対象において、「ようだ」型直喩に変化すると表現の性質が異なることで顕在化する。

- (46) 日本の学生はたった1人。学習院大の鶴園裕基(二十)。父親で金沢大教授の裕(五十五)が早大時代にここで暮らし、裕基が5歳のころ、父の国内留学でまた一家で住んだ。ドラえもんを国で何と呼ぶか、ロンドンのようなテロが東京で起きないか、食事しながら話す。「寮に入って本当に良かった。みんな家族みたい」と裕基。

(サンプル ID : PN5a_00015 『朝日新聞』)

- (46') 「寮に入って本当に良かった。みんな家族のよう」と裕基。

(46) は留学先の寮の人々が自身に親切であり親身に話をすることから、その関係性を「家族」と喩える。当該の日本人の経験に依拠した関係性を評価した表現であり、内的情報を根拠とする「みたいだ」が選択される。一方で、(46') のように「ようだ」型直喩への変換は可能であるが、(46) に比べると他者の目線から見て、客観的なあり様として提示するような表現となる。このことから、「みたいだ」型直喩が客観的な様子の表示よりも発話者がどのように見ているか、解釈しているかをイメージに仮託していることが分かる。また、このような表現の違いに応じて前置する副詞に違いがある。

- (47) 化学薬品無添加の加工品の実態をいざ調査！食べくらべFILE十五レトルトカレー1 見た目をくらべる
前野 1は野菜カレーかな？ いろんな野菜がたくさん入っていて、インドカレー屋さんのカレーみたい。
根岸 3はなんか焦げたコーヒー豆みたいなにおいがする。

(サンプル ID : PB2n_00049 森泉麻美子『無添加生活』)

(47) は加工品カレーの食べ比べとその評価を述べている。ある商品の香りを「焦げたコーヒー豆」と表現する。この表現は、副詞「なんか」によって導かれている。「みたいだ」型直喩は、このような「なんか」「なんだか」のような副詞に導かれる例が、

「ようだ」型直喩よりも多い³⁴。自身の内的な経験や観察を探索することでイメージを導き出していることを明示する。このように「みたいだ」はイメージの確度と内的情報による根拠を表すことで直喩の文末部に選択される。そして、自身の経験や観察結果といった内的な根拠であることによって、発話者にとって対象がどのように見えたか、解釈されたかを表す。

6. 「そうだ」と直喩

本節は「そうだ」が直喩の形成に用いることが可能である一方で、その頻度が低い理由を論じる。「そうだ」は「ようだ」「みたいだ」と同様にみとめ方に関わる助動詞である。一方で、【表 2】に見たように直喩の文末部に選択される頻度は低く、「ようだ」「みたいだ」のように比喩との親和性が高くないことが見て取れる。

6.1. 助動詞としての「そうだ」

「そうだ」は、発話者が自身では確認の取れていない事態について、それが存在することや、未実現の事態について、それが生起することに確からしさがあることを表す³⁵。「ようだ」においては「A のような B」の修飾部 A は対象 B の様相への判断内容として提示されるが、「A そうな B」の修飾部 A は対象 B から推測される性質・属性を提示する。

- (48) 小学校を卒業するまで、善也は週に一度は母親といっしょに布教活動に出かけた。母親は教壇でいちばん布教の成績がよかった。美人で若々しく、いかにも育ちがよさそうで (事実よかった)、人好きがした。

(村上春樹「神の子どもたちはみな踊る」)

- (49) 3 図 4 図 (紛れる) 白 a とはオサえてくれず、4、6 に切られては、わけの分からない戦いになりそうです。

(サンプル ID : LBa7_00011 林海峰『強くなる小目の定石』)

- (50) 引き戸を開けて、女が姿を現す。男の意に反して、機嫌の良さそうな表情だ。

(サンプル ID : LBa9_00016 原田宗典『優しくって少しばか』)

- (51) 近藤はユンちゃんがあげてくれた缶詰の桃を美味しそうに食べた。

(サンプル ID : LBb0_00001 吉川精一『月曜日のカーネーション』)

- (52) 「死因ですが、毒殺ではありませんでした。薬物の反応は全く見られません。ふたりとも…」そこで中森の言葉が途切れた。顔が少し蒼ざめている。「どうしたんだ」「いえ、失礼しました。死因は頸髄切断。即死だそうです」

(サンプル ID : LBh9_00154 麻耶雄嵩『翼ある闇』)

³⁴ 「ようだ」型直喩においては、「なんか」系の副詞が 19,158 例中 72 例 (0.38%) 出現するのに対し、「みたいだ」型直喩においては 3,861 例中 31 例 (0.8%) 出現する。約 2.5 倍多く出現する。

³⁵ 「そうだ」の意味として、提示される事態と現実事態の「近接性」(日本語文法学会編 2014)や「隣接性」(木下 2013)の概念が用いられることがある。しかし、「近接性」や「隣接性」は事柄の内容に関わる概念である。本章では発話者による事象の捉え方に重点を置き、未発生・未確認事態への確らしさの付与とする。

(48) は善也の母親が周りの人々からどのように評されているかを述べた部分である。善也の母親は育ちの良さがその見た目や行動に反映され、それをもとにして周囲の人間は真偽不明ながら、[育ちが良い] という出自を確かなものとする。これによって、善也の母親の見た目や行動を根拠とした彼女の出自への推量が形成される。対象の様相そのものではなく、様相から推測される出自へと確からしさを付与する。(49) は囲碁の盤面について述べたものである。「白 a とはオサえてくれず、4、6 に切られては」と条件を提示し、その条件下では戦局が読めないものとなることを述べる。「わけのわからない戦い」はまだ生起していない事態であるが、提示された条件下では生起することが確かであるとする。このように生起していない事態について、その生起が確かであるとすることで発話主体の予測を表すことができる。(50) は女性の表情から機嫌の良さという内面的な感情を読み取っている。機嫌がよいかどうかは確認の取れていないことだが、女性の表情からそうであることが確かだとする。そのような確からしさを認定するに足る表情であると表示することで女性の様子を表す用法となる。(51) は缶詰の桃を食べる「近藤」の様子を描写したものである。美味しいと感じているかどうかは未確認だが、近藤の食べ方から美味しいことが確かであるとする。そのように美味しさを確かに感じさせる食べっぷりであると表示することで行為の様相を表す。(52) は伝聞用法である。即死かどうか発話者には真偽の確認が取れていない命題について、「即死だ」という他者の判断を提示する。その他者判断に確からしさを与えることで、他者の確かな判断として聞き手に伝達する。他者判断を自身の確かな判断として利用することで伝聞用法が形成される。このように「そうだ」は発話者が確認していない事象・属性の存在やまだ発生していない事象の生起が確かであることを表す。

6.2. 将然相によるイメージの確度

本章 4 節と 5 節に見たように、「ようだ」「みたいだ」は根拠を有した確からしきの付与を行う形式であることにより、イメージを確かなものとして表示する。「そうだ」もまた、前項に見たように確からしさを表し、イメージの確度の指標となることができる。しかし、【表 2】に見たようにその頻度は低い。それは、「そうだ」が形成する直喩が「凍りそうに冷たい肌」のように対象の状態や属性の程度を表す表現となり、そのような程度表現が直喩において周辺的なためである。

- (53) 『大和朝廷は百済の亡命政権』という説が正しいとしたら、これらの恥ずべき侵略行為も報復を望んだ過去の『情報遺伝』が成せるわざかも知れない。そう思うと、人間に刻まれた「情報遺伝」のおぞましさに、心が凍りつきそうな気分になってしまいました。

(サンプル ID : PB10_00085 木島光絵・木島輝美『ふりかえ』)

- (54) そろそろ麻酔注射を打つという。心臓が破裂しそうにドキドキした。でも何とか耐えられた。

(サンプル ID : PB40_00094 瑞やえ子『神様がくれたプレゼント』)

(53) は歴史上に起きた事件が遺伝子に組み込まれた情報によって引き起こされたものだという情報に接して恐怖を覚えるものである。恐怖を覚えているという自身の心的

状態を「心が凍り付きそうな気分」と表現する。心のあり様を表しつつ、感じている恐怖が甚だしいことを表す。抽象体である心が凍るという実際には起き得ない事象の発生が確かとする。実際には起き得ないことが起こると錯覚するほど恐怖の程度が高いことを表すことで成立している。(54)は麻酔注射を受けることに対する緊張感を述べた文である。「心臓が破裂する」という実際には発生し得ない事象を修飾部に提示することで、そのような事態が起きかねないほど緊張の度合いが高いことを述べる。

このような「そうだ」型直喩は、実際には発生し得ない事象の将然相として現前の対象を捉えることによって成立するものであり、アスペクトとの関係から成る。将然相とは事態の発生の直前を捉えた局面である。「そうだ」が起きていない事態の生起の確からしさを表すことで、実際には発生しないけれども発生する直前であるという心理を形成し、擬似的に将然的な局面を表すことができる。

- (55) 友生の墜落は前にも一度あり、その時は未遂で済んだのですが、肝を冷やしました。それは、岩手山に登る前、八幡平をハイキングしている時のことでした。また、友生が墜落しそうになって私が雪面を滑落したこともありました。

(サンプル ID : PB20_00047 石井善子『明日の思い出』)

ハイキング中の対象の様子について述べている。友生がバランスを崩したことを「墜落する」ことの直前の局面（将然相）として捉えるものである。このようなアスペクト表現は対象の様子から未実現の事態の発生が確かであるとする「そうだ」の文法的意味に動機付けられる。(53) (54) のような「そうだ」を用いた直喩は、修飾部に実際には発生し得ない事象を提示し、その実現が予想されるほど気分の冷たさや緊張感の度合いが高いことを表現する。

このように「そうだ」は、現前の様子を発生し得ない事象の将然相とすることで、程度表現相当の直喩を形成する。しかし、直喩は様態を表現するために用いられることが多く³⁶、程度型表現は周辺的である。「そうだ」はイメージの確度の指標となり得るが、「そうだ」型直喩が程度表現として働くことで、様態の表示を主に求める直喩の使用動機にそぐわないため、使用頻度が低くなるのである。直喩を形成すること自体が困難な「らしい」とは異なり、形成する直喩が周辺的な表現であるため、【表 2】に見たように比喩用法の割合が低くなる。

7. 知覚動詞と直喩

直喩は以上に論じたみとめ方に関わる助動詞を文末部とすることが多い。一方で序章【表 1】【表 2】に見たように、主体の知覚や認識を表す動詞（句）も直喩を形成する文法形式となることができる。本節では、知覚や認識に関わる動詞や動詞句（以下、知覚動詞）が直喩を形成できる仕組みを論じる。

³⁶ 典型的な直喩である「ようだ」型直喩は、本論文が用いている全 19,158 例のうち、様態表現が 17,823 例、程度表現 265 例、量表現 344 例、評価表現 726 例となる。

7.1. 調査とその結果

これらの動詞（句）がどのような理由で直喩を構成する文法形式として運用することが可能であるかは、これまでの比喩研究において論じられていない。その原因の一つに、用例数の確保の難しさがある。みとめ方に関わる助動詞以外の文法形式を用いた直喩用例の出現頻度は低く、実例を収集するのが困難であったためである。しかし、形式的な特徴があるため、コーパスによる検索と収集が可能である。

その点に着目して、BCCWJ によって収集した直喩のデータベースである「指標比喩データベース」を用いて実例を確保した。当該データベースは、加藤ほか（2020）によって BCCWJ を用いて比喩指標を有する比喩表現である「指標比喩」（≒直喩）用例を収集し、各種情報をアノテーションしたものである。作成に際しての検索には、中村（1977）に挙げられた比喩指標要素をキーとして用いた。BCCWJ のコアデータの 6 レジスター（Yahoo!知恵袋・Yahoo!ブログ・白書・書籍・雑誌・新聞）における 1,290,060 語から 816 例の直喩を収集した。また、BCCWJ コアデータの内、加藤・浅原・山崎（2019）にて構築された新聞・雑誌・書籍に対する分類語彙表番号を各短単位に付与したデータを用い、キーとなる比喩指標要素の類義語句を含めて収集を可能にした。これにより、中村（1977）では収集されなかった比喩指標要素が収集される。その結果として 107 例を得た。全体として 923 例の直喩候補の表現を得た。

中村（1977）は比喩指標要素を動詞類（D）、副詞類（F）、助詞類（J）、形容（動）詞・助動詞類（K）、名詞類（M）、連体詞・接頭辞類（R）、接尾辞類（S）へと語の文法的特徴によって分類し、そこからそれぞれの語の意味的特徴によって種へと下位分類し、種に属する一つ一つの語を号とした。本節で扱う知覚動詞³⁷は動詞類（D 類）の第 1 種である（以下、D 類 1 種）。D 類 1 種に属する語は人間の精神活動を表し、その多くを知覚動詞が占める。本節は D 類 1 種に含まれる知覚動詞「感じる」「思う」「考える」「心得る」「受け取る」「錯覚する」「紛う」「見る」「眺める」、そして、それらと同じ分類語彙表番号を有する各種の動詞を分析の候補とした³⁸。結果として分析の候補となる比喩と共に知覚動詞³⁹は、「指標比喩データベース」に収集された全 923 例のうち、「感じる」21 例、「思う」27 例、「考える」5 例、「心得る」0 例、「受け取る」0 例、「錯覚する」0 例、「紛う」0 例、「見る」4 例、「眺める」0 例、「見える」2 例、「思い知る」2 例、「その他」24 例が収集された（【表 4】「比喩例数」）。

³⁷ 「思う」「考える」などの思考動詞も含まれるが、本論文ではまとめて「知覚動詞」とする。

³⁸ 分析の候補となった動詞は以下の通りである。「似る」(2.1130)「思える」(2.3061)「思われる」(2.3061)「思える」(2.3061)「気づく」(2.3062)「見える」(2.3091)「知る」(2.3062)「思い知る」(2.3062)「(怒りを) 買う」(2.3066)「例える」(2.3103)「引く」(2.3063)。丸括弧内は分類語彙表番号である。なお、【表 4】に対象として掲載している知覚動詞と重複して出現する用例もあり、それらは除いている。直喩例が確認された「見える」「思い知る」は【表 4】に反映し、それ以外の動詞は「その他」とした。

³⁹ 同意味の分類語彙表番号から得た例には「実感」等の名詞も含まれている。しかし、本論文は構文に着目するため、格を支配しない名詞類は対象に含めない。

【表 4】：比喩と知覚動詞⁴⁰

知覚動詞	用例数	比喩例数	比喩率 (%)	直喩例数
感じる	289	21	7.3	5
思う	1,741	27	1.6	10
考える	839	4	0.5	2
受け取る	40	0	0	0
錯覚する	5	0	0	0
見る	2,080	5	0.2	2
眺める	52	0	0	0
見える		2		2
思い知る		2		2
その他		24		0
合計	5,046	85		23

「受け取る」「錯覚する」「眺める」は比喩との共起例が確認されなかった。【表 4】の「比喩例数」に含まれる 85 例は、次のように種々の構文を含む。

(56) 梅雨はすでに明け、九州地方は一気に夏模様である。質量を感じさせる強い日差しがビルや街路樹に降り注ぎ、道路に濃い陰影をつくっていた。

(サンプル ID : PB43_00054 野田榮一『社長業、代行します』)

(57) なにしろ声がいい。森進一にそっくりなんです。聞いているうちに、彼の声が肌に染み入るように感じて、鳥肌が立ったくらいです。

(サンプル ID : PM41_00071 実著者不明『週刊新潮』)

(58) 心臓が皮膚を破るかと思われるほど高鳴った。

(サンプル ID : PB39_00009 小坂春生『五十メートルの戦記』)

(59) 火口だった場所は、すり鉢のように深くえぐれている。けれど、今はそこに緑の木がのび、時の流れを感じさせる。

(サンプル ID : PB1n_00024 広緒恵利子『命を救え！愛と友情のドラマ』)

(60) 「最近の営業マンはパソコンに向かってばかりだ。商品がどのように売られ、ユーザーが何を考えているかを肌で感じなければいけない」と、現場重視を説く。

(サンプル ID : PN1c_00018『読売新聞』)

(56) は「質量」によって「強い日差し」を連体修飾するために「感じさせる」が用いられている。(57) は「ように」節が「感じる」を連用修飾する。(58) は「心臓が皮膚を破る」が「高鳴った」を「と思われるほど」によって連用修飾する(59) は時間を流体に喩えた「時の流れ」が「感じさせる」の目的語となる。(60) の「肌で」は「感じる」場所を示している。このように比喩と共起して出現する知覚動詞の構文は多様であり、全てを直喩と見なすことは難しい。本論文では「ようだ」型直喩(「雪のような肌」「肌は雪のようだ」)のように、喩辞・被喩辞を知覚動詞が接続して、修飾・被修飾、

⁴⁰ 「用例数」は「指標比喩データベース」作成に用いられた用例の非比喩用法を含めた全体の数である。「見える」「思い知る」は分類語彙表番号ごとに収集されており、各々の知覚動詞の母数を示すことができないため、「用例数」「比喩例数」「比喩率」からは除いている。また、「その他」は注 38 に提示した知覚動詞と同じ分類語彙表番号を有する動詞から「見える」「思い知る」を除いたものである。

主題・叙述の関係を結んだ (56) (58) と「ようだ」を含んだ (57) を直喩とする。このような知覚動詞を用いた直喩は (56) のようにヲ格やニ格などの知覚動詞の支配する格成分同士の関係が比喩的な関係を結ぶ「格成分+知覚動詞」の構文、(57) のように「ようだ」の連用形「ように」が知覚動詞を修飾する「ように+知覚動詞」の構文、(58) のように助詞「と」の補文節が知覚動詞を連用修飾する「と+知覚動詞」の構文によって出現する。

このような知覚動詞を用いた直喩を比喩例数から抽出したものが【表 4】の「直喩例数」である。そもそも、知覚動詞が比喩と共起する用例数は「比喩率」が示すように少ないが、その中から直喩はさらに限定され、知覚動詞を用いた直喩の数はきわめて僅少である。しかし、少数ながら直喩の構文を形成する例が存在する。この事実、知覚動詞は直喩の構文を形成する主要な文法形式ではないが、一定の条件を満たすことで直喩を形成することを意味する。

直喩は表現対象を具体化するためにイメージを用いる。2.1 節に見たようにイメージは物理的には存在しないが、心理的には存在するという性質を持つ。イメージは心理内の知覚像であり物理的な事柄としては意味を持たないため、心理的に真であると認める形式が必要となる。4 節、5 節、6 節に見た「ようだ」「みたいだ」「そうだ」といったみとめ方に関わる助動詞は根拠を持った確からしさを付与する点でその条件をクリアする。知覚動詞を用いた直喩は上述したように知覚動詞に前接する要素ごとに「ように+知覚動詞」「と+知覚動詞」「格成分+知覚動詞」の構文で直喩を形成する。これらの構文もまた一定の条件下でそのようなみとめ方の助動詞と類似した働きを持つことで直喩を形成すると予測される。

7.2. 命題外で機能する知覚動詞と直喩

本項は知覚動詞構文の文法的な働きが直喩として運用可能にすることを論じる。「ように+知覚動詞」「と+知覚動詞」は「ように」や「と」が補文節を導き、「格成分+知覚動詞」は知覚動詞が格成分を支配する。知覚動詞は「ように+知覚動詞」「と+知覚動詞」においては命題外で機能し、「格成分+知覚動詞」においては命題内で機能する。そのため、「ように+知覚動詞」「と+知覚動詞」と「格成分+知覚動詞」は分けて論じる。

「と思う」「と見られる」のように知覚動詞の文末用法は事柄に対する心的態度を表すモダリティとして機能する⁴¹。直喩として運用される「ように+知覚動詞」「と+知覚動詞」は「ように」「と」が導く補文節は物理的に存在し得ない事態を表しており、「感じる」や「思う」は命題に対する話者の心的態度を表す。話者の知覚経験に則した推論を表し、命題についての真偽判断を表す。これにより、イメージを発話者の心理において真とする判断を提示することが可能となり直喩としての運用が可能となる。

⁴¹ 知覚動詞が文末においてモダリティとして機能することは志波 (2013) が「ト見ラレル」の形式を対象として論じている。また、渡辺 (2015) が通時的な観点から「とおぼゆ」から「と思ふ」への変遷におけるモダリティとしての働きの獲得を論じている。

7.2.1. 「ように＋知覚動詞」を用いた直喩

「ように＋知覚動詞」は「感じる」「思う」に用例が確認された。「ように」節は物理的に成立しない事象を表している。そのようなイメージを用いて表現対象の様態を具体化する。

- (61) なにしろ声がいい。森進一にそっくりなんです。聞いているうちに、彼の声が肌に染み入るように感じて、鳥肌が立ったくらいです。

(サンプル ID : PM41_00071 実著者不明『週刊新潮』)

- (62) この本に登場する女たちの大半はヒトラーの「炎のような演説」に惚れ込んでしまう。ヒトラーという人物がロックミュージシャンのように思えてくる。

(サンプル ID : PN2a_00014 『朝日新聞』)

(61) はある人物の歌を聴いた主体がその歌声に感銘を受ける文である。歌声の性質を喩辞「肌に染み入る」を用いて表す。液体の浸透と歌声の心理への影響は別種の事象であり、「彼の声が肌に染み入る」は物理的には成立しない。しかし、「液体：浸透⇌心：影響」のアナロジーが話者の心理において成立することで、当該の歌声の主体への影響を液体に喩えて具体的に表す。(62) はヒトラーの演説を聞いた女性聴衆が熱狂することを述べた文である。政治家であるヒトラーは職業的にはロックミュージシャンではありえないため、[ヒトラーという人物がロックミュージシャン] は現実的な事象としては成立しない。しかし、言葉によって聴衆を熱狂させるヒトラーの演説の様子は話者にとってロックミュージシャンがコンサートにおいて聴衆を熱狂させる様子と類似したものとして捉えられる。(63) (64) の「ように」節と知覚動詞は次のような構文の構造を持つ。

- (63) [[彼の声が肌に染み入るように] 感じて] : 「ように」節が知覚動詞を修飾

- (64) [[ヒトラーがロックミュージシャンのように] 思えて] : 「ように」節が知覚動詞を修飾

「ように」節が知覚動詞「感じる」「思う」を修飾する構文となる。「ように」節中は「歌声：染み入る」「ヒトラー：ロックミュージシャン」という物理的に成立しない事象が展開される。そのような事象に対する心的態度を知覚動詞は表す。物理的には成立しないが話者の感覚や思考において生起し得るイメージを提示することで表現対象のあり様が具体化される。このようにして「ように＋知覚動詞」構文は直喩として運用することが可能である。

7.2.2. 「と＋知覚動詞」を用いた直喩

「思う」「思い知る⁴²」「考える」「見る」が「と＋知覚動詞」の構文を取る。「ように＋知覚動詞」と同様に「と」が導く補文節が物理的に成立しない事象である。そのようなイメージを用いて表現対象のあり様を具体化する。

- (65) 「美和ァ、美和ァ、俺の股間が臭いよ、わかるんだよ、俺、こうしていても臭いが立ち上ってくるんだよ、俺を家に帰してくれよ！」と絶叫していた。
あのときわたしは地獄をみた。これがいわゆる生き地獄だと思った。

(サンプル ID : PM25_00084 『月間アスキー』)

- (66) ところが、これまでの半導体生産方式では、ばらつき、雑音が多過ぎて誤動作してしまうため、四端子デバイスの実用化は夢と考えられたが(…)

(サンプル ID : PB45_00024 大見忠弘『復活！日本の半導体産業』)

- (67) 昨年十一月の総選挙の際の公職選挙法違反(買収)で起訴された■■■■前衆院議員＝自民党を離党＝が議員辞職したことに伴う補選。このため、当初追い風とみられた民主党だったが(…)

(サンプル ID : PN4e_00010 『北海道新聞』)

(65) は残業がつづき、家に帰ることができず体から異臭を放つ状況を喩辞「生き地獄」によって表現する。「地獄」は想像上の世界であり、現実の状況としては存在しない。しかし、地獄の持つ<壮絶さ><苦しみ>などの特徴によって当該状況の壮絶さを具体化する。(66) は被喩辞「四端子デバイスの実用化」が不可能であることを喩辞「夢」によって表す。夢は人間の睡眠時に生じる現象であり「四端子デバイスの実現は夢」は物理的には成立しない事象である。「夢」の持つ特徴である<非現実性>が「四端子デバイスの実現」に付加されることで<不可能>の意となる。(67) は補欠選挙の実施と民主党の情勢を述べた文である。自民党の候補は公職選挙法違反を起こしており、民主党に有利と見なされていたが、実際にはそうではなかったという状況である。物理的な事象としては風が吹いておらず、非事実的な事象である。喩辞「追い風」の<主体の行動に利益となる事象>という性質が卓立され、民主党に付加される。(65) (66)

(67) の助詞「と」が導く補文節と知覚動詞は以下の構文の構造を持つ。

(68) [[これが生き地獄だと] 思った] : 「と」節が知覚動詞を修飾

(69) [[実現は夢と] 考えられていた] : 「と」節が知覚動詞を修飾

(70) [[[追い風と] みられた] 民主党] : 「と」節が知覚動詞を修飾

いずれも知覚動詞「思った」「考えられていた」「みられた」を「と」の補文節が修飾する構文である。節中の「オフィスの状況：生き地獄」「四端子デバイスの実用化：夢」「民主党の状況：追い風」は物理的には成立しない関係の事物・事柄同士である。その

⁴² 「思い知る」は次の例のように「ということを」を前接する形で出現するが、「と」に準じて扱った。
○あらためて総馬が剣鬼だということを思い知らされた。

(サンプル ID : PB39_00013 上田秀人『波濤剣』)

ような非事実的な思考の発生を「思った」「考えられていた」「みられた」といった知覚動詞が表す。発話者の思考として提示されたイメージが表現対象のあり様を具体化する。このようにして「と＋知覚動詞」は直喩表現として運用がなされる。

7.2.3. 真と仮定して事態を提示

以上に見た、「ように＋知覚動詞」「と＋知覚動詞」は知覚動詞を被修飾部として補文節が連用修飾する構造を取る。両構文は直喩として運用され、「ようだ」などのみとめ方に関わる助動詞を用いた直喩と同様にイメージを提示し、表現対象のあり様を具体化する。

ここまで繰り返し述べたように、直喩の形成には物理的には成立しない事象を話者の心理上では真とすることが可能な形式を必要とする。「ように＋知覚動詞」「と＋知覚動詞」の知覚動詞は命題の外に位置しており事柄に対する話者の心的態度を表すモダリティとして働き、「ようだ」などと働きが類似する。「ようだ」などと同様に、知覚動詞も命題をほぼ真として提示する。真偽未確認の命題に対して用いれば推量用法を形成し、物理的に存在しない事象の成立を真とすると比喩用法を形成する。「ようだ」と知覚動詞構文「ように＋知覚動詞」「と＋知覚動詞」は事柄の真偽を表す点で共通する。一方で、「ようだ」などに比べると、知覚動詞構文によって提示される判断は、確信の度合いが低い。

- (71) なお、セミヤドリガ科全体としても、寄主に害を与えると報告されているものについても、寄生虫は寄主に害を与えるはずだという先入観から書かれているものもあるように感じられる。これらについては再確認が必要であろう。
(サンプル ID : LBb4_00018 大串龍一『日本の昆虫』)

- (72) ロンドンのウェスト・エンドで体を売って稼いでいるザニーの姿を想像してみた（ドリーはロンドンには一度も行ったことがなかったが、ウェスト・エンドというと売春にはぴったりの土地のように思われた）。
(サンプル ID : LBb9_00085 B・M・ギル(著)/吉野美耶子(訳)『悪い種子が芽生える時』)

(71) は寄生虫の報告書について宿り主に害を与えるはずという先入観から書かれているものがあるとの推量を述べる文である。「寄生虫は寄主に害を与えるはずだという先入観から書かれているものもある」ことは発話主体にとって状況証拠から推量できるが、確信を持たないので「再確認が必要」としている。(72) は「ウェスト・エンド」について「売春にはぴったりの土地」であるとの推量を述べる。発話主体はロンドンに行ったことがなく根拠は薄弱であるが、「売春にぴったり」という性質を持つと推量する。(71) (72) の「ように」節に提示されている命題は真偽未確認である。その真偽未確認の命題を確信は弱い、主体の思考内では可能性の一つとして取り上げられることで推量を表す。また、「と＋知覚動詞」も推量を表す。

(73) こうした社会において仏教が果すべき民間布教は、何をおいても生活苦や病苦にせまられる民衆に対する救済の社会事業であらねばならなかったと思う。

(サンプル ID : LBa2_00007 林陸朗『光明皇后』)

(74) 幕府や諸藩の政治を支えたのは、地方行政の展開において、農民や町人の力を利用しながら、民政を直接実施して遠国奉行や郡代・代官の役割こそ、きわめて重要であったと考えられる。

(サンプル ID : LBa2_00017 村上直『民衆史入門』)

(75) また、昭和神聖会を創立したのと同じころの昭和十(千九百三十五)年十月三十一日、亀岡の明光殿で第一回大本歌祭りが行なわれているが、これなども宮中歌会を模倣したものとみられる。

(サンプル ID : LBa1_00014 松本健一『出口王仁三郎』)

(73') 民衆に対する救済の社会事業であらねばならなかったようだ。

(74') 遠国奉行や郡代・代官の役割こそ、きわめて重要であったようだ。

(75') 宮中歌会を模倣したもののようにだ。

(73) (74) (75) の「と+知覚動詞」は、それぞれ (73') (74') (75') が示すように「ようだ」に置換することができ、事柄に対する心的態度を表すモダリティとして機能している。(73) は仏教の民間布教について述べた文である。「民衆に対する救済の社会事業であらねばならなかった」かどうかは、当時の人々が存命しない以上確認できない。しかし、文献調査などから、「仏教は民衆に対する救済の社会事業である」ことを真とすることで推量となされる。(74) は江戸期の地方行政において「遠国奉行や郡代・代官の役割こそ、きわめて重要であった」との推量を述べる。文献などの調査からそのように判断する蓋然性が高いが、江戸期に生きた人間が現存しない以上、遠国奉行や郡代・代官が本当に重要であったかどうかは確実な判断を下せない。(75) は「大本歌祭り」という祭について述べた文である。大本歌祭りを「宮中歌会を模倣したもの」と推量する。この祭を開催した人物は復古主義的な人物であり、開催する歌祭りが伝統的な宮中歌会を模倣したものであるとの判断は高い蓋然性を持つ。これらは真偽未確認の命題を話者の思考内では真として判断される。以上の (73) (74) (75) は真偽未確認の命題が「と」に前接し、その命題が話者の思考内ではおおむね真であることを「と+知覚動詞」が表す。

以上に分析したように、「ように+知覚動詞」「と+知覚動詞」は真偽未確認の命題に対する推量用法を持つ。この推量用法化は、これらの構文が命題を真として提示するという文法的な働きを持つことを意味する。7.3.1 節と 7.3.2 節に確認した知覚動詞構文の直喩としての運用は、「ように+知覚動詞」「と+知覚動詞」構文が「ようだ」などと同様に命題への真偽判断を提示する機能を持つためである。

ただし、「ように+知覚動詞」「と+知覚動詞」はあくまで自身の思考として提示し、他者にとってそのイメージがどのように捉えられるかは不問となる。直喩は抽象的なものや未知のものを具体的に描出して相手に伝達することを主とする表現であるため、発話者の示す判断が他者と共有される必要がある。「ようだ」型直喩は共有を見込んだ表現を形成することで、使用数が増加するが、発話者の思考では真であるが聞き手にとって真となるかが前提とされない「ように+知覚動詞」「と+知覚動詞」は直喩としての運用が限定的となる。

7.3. 命題内で機能する知覚動詞と直喩

7.3.1. 「格成分+知覚動詞」の直喩

上述した「ように+知覚動詞」「と+知覚動詞」は「ように」や「と」が導く補文節が物理的に成立しない事象を表し、知覚動詞は命題に対する話者の心的態度を表していた。それに対して、「格成分+知覚動詞」は「ように」や「と」の補文節ではなく知覚動詞が支配する格成分同士の関係が物理的に成立しない事象を表す。知覚動詞は節外ではなく、節内で事象を構成する要素として機能している。「格成分+知覚動詞」の直喩は、「感じる」「思う」「見える」に例が確認された。「感じる」は「Aを感じさせる B」、「思う」は「Aを思わせる B」、「見える」は「Aが Bに見える」の構文で出現する。

(76) どことなく “もろさ”を感じさせる恋愛運。

(サンプル ID : PM31_00254 『Hanako』)

(77) 最初は離れてとまっていたのですが、やがて二羽が並び、写真のように 恋人同士を思わせるしぐさに移ったそうです。

(サンプル ID : PN1d_00001 『産経新聞』)

(78) 「子どもを持たない女と周りに見られたくない」。そんな思いがいつも邪魔をした。写真の子どもたちが悪魔に見えた。

(サンプル ID : PN2a_00008 『朝日新聞』)

(76) は被喩辞「恋愛運」の性質を述べる。喩辞「もろさ」は物質が持つ性質であり、「恋愛運がもろさ（を持つ）」というのは物理的には成立しない事態である。「恋愛運」と「もろさ」が「感じる」に支配される成分として関係付けられることにより、当該の恋愛運に＜脆弱性＞を付加する。(77) は被喩辞「(鳥の) しぐさ」を喩辞「恋人同士」によって表現する。鳥同士のやり取りを人間の恋愛関係に喩えて「恋人同士」と表す。「恋人同士」の持つ特徴＜仲睦まじさ＞などが被喩辞「(鳥の) しぐさ」に付加される。(78) は不妊治療を行うも子供を授かることができない女性についての文である。子どもは空想上の生物である悪魔ではあり得ず、「子どもたちが悪魔」は物理的には成立しない。しかし、当該の女性にとって他人の子供の写真は心理的な圧迫感を感じるものである。そこで、「悪魔」の持つ＜恐怖や危害を与えるもの＞などの特徴が被喩辞「子どもたち」に付加されることで、自己の心理を害するものとして被喩辞「子どもたち」が喩辞「悪魔」と判断される。(79) (80) (81) の格成分と知覚動詞は次のような構造を持つ。

(79) [[もろさを感じさせる] 恋愛運] : 知覚動詞が連体修飾節を作る

(80) [[恋人同士を思わせる] しぐさ] : 知覚動詞が連体修飾節を作る

(81) [[[子どもたちが] 悪魔に] 見えた] : 知覚動詞が述部

(79) (80) は知覚動詞が連体修飾節を作り、「恋愛運」「しぐさ」に係る。(81) は「見える」に「写真の子どもたちが悪魔に」に係り、知覚動詞が述部となる。構文的には「雪のような肌」(連体修飾節)、「肌は雪のようだ」(述語) のような「ようだ」を用

いた直喩に近い。知覚動詞が支配する格成分「もろさ：恋愛運」「(鳥の) しぐさ：恋人」「子どもたち：悪魔」は物理的には成立しない事物・事柄の関係であり、それらを知覚動詞が支配することで知覚し得ないものを知覚する表現となる。物理的には存在し得ないが、主体の知覚上には生起したかのように表現することで、発話主体が捉えた当該の表現対象の具体性が示される。このようにして「Aを感じさせる B」「Aを思わせる B」「AがBに見える」は直喩としての運用が可能となる。

7.3.2. 直接経験として事態を提示

「ように＋知覚動詞」「と＋知覚動詞」は知覚動詞が命題外にあり、命題への心的態度を表す。それに対して、「格成分＋知覚動詞」は命題や事象の構成要素として知覚動詞が用いられており、話者の知覚的な経験を表す。非比喩的用法に顕著にみられるように「Aを感じさせる B」「Aを思わせる B」「AがBに見える」構文は主体の知覚的な経験を表す。

- (82) さらに、上質なコーヒーだけに含まれる天然の甘味は、爽やかな苦味の中でこそ生きる。甘味を感じさせるコーヒーは品質、焙煎とも優れた場合に限られる。

(サンプル ID : LBi5_00003 伊藤博『コーヒー』)

- (83) 春場所、東正横綱の千代の富士は初めて念願の十五戦全勝優勝をとげた。通算 V 8。西横綱北の湖は全休で、「ウルフ」独走時代到来を思わせる圧倒的な強さである。

(サンプル ID : LBi7_00038 石井代蔵『千代の富士一代』)

- (84) 茶アザは医学的には、扁平母斑と呼ばれる皮膚の疾患で、表皮基底層のメラニンが増えることで茶色に見える症状で、全身のどの場所にもできることがあります。

(サンプル ID : PB54_00015 山本博意『医師による切らない「赤アザ・赤ら顔(浮きでた青い血管)」の最新治療』)

(82) はコーヒーに味覚「甘さ」を感じ、(83) は千代の富士の全勝優勝を受けて『「ウルフ」独走時代到来」という思考が生じたことを表し、(84) は扁平母斑によって変色した皮膚の色が茶色に見えることを表す。(82) は味覚的経験を表し、(83) は思考作用を表し、(84) は視覚的な経験を表す。

非比喩用法と比喩用法は知覚している対象のレアリティは異なるが、実際に知覚しているものとして表す点は共通する。つまり、「格成分＋知覚動詞」構文は「ように＋知覚動詞」「と＋知覚動詞」が擬似的にモダリティとして働いていたのに対し、知覚的な経験を表す本動詞としての意味を有しており、直接的に経験している事態として提示する。そのような形式を用いた直喩は、自身の知覚体験に則した表現となる。知覚体験の場面において用いられることは使用場面が制限されることを意味し、【表 4】「直喩例数」が示す知覚動詞を用いた直喩の少なさの原因の一つとして考えられる。

以上のように、「Aを感じさせる B」「Aを思わせる B」「AがBに見える」構文は発話者の知覚を表示する。直喩用法においては、その場の経験においてイメージが発話者

の心理内に生起していることを表す。経験していることであるためにそれは疑いようもない（確かである）ものとなる。その場における知覚体験を根拠としたイメージへの確度の付与とすることができる。しかし、知覚体験はあくまで主体の内部の問題であるため、聞き手にとっては確認できないものであり、解釈上の根拠とすることが難しい。このように「格成分+知覚動詞」構文は、「ようだ」のように物理的には成立しないイメージを真として提示する働きを持つが、判断の根拠が主体の知覚経験に限定される。直喩は、聞き手と発話者でイメージが共有される必要があり、このような「格成分+知覚動詞」型直喩の持つ性質は聞き手におけるイメージの理解を保証しないため、使用頻度が極めて低くなる。

8. おわりに

本章は直喩の形成条件と文末部である「ようだ」「みたいだ」「そうだ」と知覚動詞が直喩を形成するために用いられる理由を論じた。

直喩は、発話者・聞き手、場・文脈という外部要素とイメージと構文という内部要素に支えられて成立する。イメージは発話者の心内情報であり、それが聞き手に理解される必要がある。直喩を形成する「A は B のようだ」などの構文は、根拠を持った確からしさを表すことで、発話者の心内でのみ確認されるのではなく聞き手にとっても理解される根拠を持った確かなイメージとして提示する。また、提示されたイメージは、用いられる場・文脈により異なって解釈されるものであり、内容があらかじめ決まっていない。ゆえに、発話者の意図に則して理解されるように情報を共有する必要がある。そのような情報の共有の方略として、後文脈における根拠の提示や喩えの意図の説明などが行われる場合がある。このように外部要素と内部要素から直喩は成り立つ。

内部要素の一つである直喩の文末部には、イメージが確かであることの認定とその認定に根拠があることを表す文法形式が必要となる。それは、直喩がイメージという心理的な知覚像を用いるという性質上、イメージが曖昧なものではなく、発話者にとっては伝達するに足る確証があり、かつ聞き手にとっては理解するに足る根拠が存在することを表示するためである。このような条件を満たす形式として「ようだ」「みたいだ」「そうだ」といったみとめ方に関わる助動詞が存在する。しかし、みとめ方に関わる助動詞であっても、証拠に対する非確証的な態度を伴う「らしい」は直喩を形成することがない。一方で、知覚動詞は助動詞ではないが、特定の構文において「ようだ」などと類似した働きを持つことで、稀に直喩を形成できる。このように、イメージとの関わりから、直喩の文末部に要求される条件が決定し、その条件を満たす形式が直喩の文末部として選択されるのである。

第2章 助動詞による直喩のヴァリエーション

1. はじめに

1.1. 本章の目的

直喩の文末部は1章に見たように「ようだ」「みたいだ」「そうだ」や知覚動詞といった複数の範例的な文法形式から選択される。しかし、根拠を持った確度をイメージに付与するだけならば典型例「ようだ」のみでも事足りるはずである。だが、実態としては複数の文法形式群が用意されている。これは、それぞれの文法形式によって形成される直喩はいずれも同じ表現上の性質や働きを持つのではなく、違いが存在することを意味する。本論文では、そのような他の文法形式から排反的に特定の文法形式が選択されることで、他の構文との差異から獲得する表現上の性質・働きを「表現価値」と呼ぶ。本章では、文末部の違いによる直喩の表現価値の違いを、それぞれの直喩の運用傾向の量的調査とその結果の解釈から論じる。

1.2. 先行研究と問題

直喩が多様な構文のヴァリエーションを有することは、序章 2.2.2 節にて見た中村（1977）や小松原・田丸（2019）による調査によって明らかである。しかし、中村（1977）によって初めて構文の多様性が明らかにされて以後、多様な構文のそれぞれが持つ表現上の価値については論じられることが無かった。近年、小松原・田丸（2019）は、写像関係と構文によって直喩を類型化し、それぞれの類型の特徴について考察している。これは、直喩の構文ごとの表現価値を論じた研究の嚆矢として評価される。しかし、直喩の構文ごとの表現価値の解明は緒についたばかりであり、これからの進展が求められる領域である。本章では、小松原・田丸（2019）が取った構文全体を類型化するという方法を取らず、個別の構文の記述を精緻化する。特に、典型的な構文である「ようだ」型直喩、その類義の助動詞である「みたいだ」「そうだ」を用いた「みたいだ」型直喩、「そうだ」型直喩を対象とする。

1.3. 方法

本章が対象とする直喩において、特に「ようだ」と「みたいだ」は交互に置き換えることが可能である場合が多い。ゆえに、置換テストの可否によるクリアカットな分析を行うことが難しい。

- (1) ゴツゴツとした黒い地面が広がり、ところどころにまっ黒にこげた木の切れはしが落ちている。火口だった場所は、すり鉢のように深くえぐれている。

（サンプル ID : PB1n_00024 広緒恵利子『命を救え！愛と友情のドラマ』）

- (1') 火口だった場所は、すり鉢みたいに深くえぐれている。

(2) サクヤは助手席の窓を全開にして、次々と夜空に上がる光の模様にすっかり夢中だ。子供みたいに窓から首を出して歓声を上げている。

(サンプル ID : PB19_00548 ひちわゆか『ラブ・ミー・テンダー』)

(2') 子供のように窓から首を出して歓声を上げている。

(1) の「ようだ」型直喩は (1') のように「みたいだ」型直喩に変換可能であり、(2) の「みたいだ」型直喩は (2') のように「ようだ」型直喩に変換することができる。このように相互に変換可能であることから極めて類似した表現であることが分かる。このような類似した表現の違いを捉えるために本章では、BCCWJ を用いた量的調査によって傾向の違いを明らかにして、その結果の分析・考察を行う。量的調査を行うことで、テキストジャンルへの出現の偏り、修飾／叙述の構文タイプの偏りといった特徴的な出現傾向を明らかにすることができる。このような出現傾向は、それぞれの構文で表出される直喩が持つ表現価値を反映していると予測される。

2. 「ようだ」型直喩の表現価値

「ようだ」は 1 章 4 節で論じたように外的な根拠に基づいた確からしさをイメージに付与した表現である。このような助動詞を用いて形成される「ようだ」型直喩が表現としてどのような価値を持つかを本節は論じる。表現上の価値は出現傾向に反映されると見て、テキストジャンルの分布と用いられる際の構文タイプの集計を通して明らかにする。

2.1. 「ようだ」直喩の出現分布

出現分布はどのような場面で表現が用いられるかを表すものであり、その表現が持つ機能や性質を反映する。そこで本節は、BCCWJ に収録されているレジスター（言語域）を用いて、「ようだ」型直喩のテキストジャンルごとの出現頻度を確認する。収集された「ようだ」型直喩の全例を、各レジスターを構成する短単位の全数⁴³を母数として割ることにより、直喩の出現の相対頻度を求めた。相対頻度によって比較するのは、BCCWJ の各テキストジャンルを構成する短単位の母数の大小に偏りがあり、収集された絶対数による比較は母数の違いの影響を大きく受けるためである。出現頻度の算出結果が次の【表 1】である。なお、「出現頻度」は 10 万短単位当たりの調整頻度であり、その降順に掲載している。

⁴³「短単位」は BCCWJ 上のテキストを分割する言語単位である。意味を有する最小単位（「国」「語」）を定められた規則に基づいて結合（ないしは非結合）することで認定する。たとえば、「国語研究所」は「国語/研究/所」の 3 短単位から構成される。短単位の数の集計は、国立国語研究所コーパス開発センターが提供している「短単位語数 Excel データ (Version 1.1)」を用いて算出した。

【表 1】：「ようだ」型直喩の出現分布⁴⁴

ジャンル	比喩数	全短単位数	出現頻度	ジャンル	比喩数	全短単位数	出現頻度
韻文	397	233,429	170.1	技術工学	404	4,666,656	8.7
文学	9,423	21,511,261	43.8	Yahoo!ブログ	1,010	12,984,635	7.8
ベストセラー	1,502	4,435,033	33.9	言語	81	1,159,332	7.0
分類なし	671	2,722,904	24.6	社会科学	1,052	15,277,572	6.9
哲学	567	3,477,809	16.3	Yahoo!知恵袋	349	6,136,420	5.7
芸術・美術	673	4,541,047	14.8	広報誌	52	4,620,337	1.1
歴史	854	6,585,047	13.0	国会会議録	33	5,596,623	0.6
教科書	127	1,120,114	11.3	白書	3	5,640,348	0.1
自然科学	555	5,177,871	10.7	法律	0	1,206,077	0
産業	248	2,541,741	9.8	合計／平均	18,158	111,284,967	19.8
総記	157	1,650,711	9.5				

「韻文」が平均値を押し上げているため、中央値によって比較する。中央値は 9.6 である。「出現頻度」の値が中央値を上回るジャンルは「産業」（9.8）、「自然科学」（10.7）、「教科書」（11.3）、「歴史」（13.0）、「芸術・美術」（14.8）、「哲学」（16.3）、「分類なし」（24.6）、「ベストセラー」（33.9）、「文学」（43.8）、「韻文」（170.1）である。「文学」や「韻文」といった文学テキスト、「ベストセラー」のように文学テキストを多量に含むジャンルへの出現頻度が特に高いことが分かる。文学においては人の動きや事物の様相を表すために主に用いられる。

- (3) ところが、デュ・ゲ克蘭が開いた口は、荒縄で縛った麻袋のほうだった。
ほら、さっさと出やがれ。毛虫のような動きで這い出たのは、両手両足を縄で縛られ、猿轡を噛まれた男だった。

(サンプル ID : PB19_00190 佐藤賢一『双頭の鷲』)

- (4) 厨のへつついの脇に鳥糞の入った瓶が置かれている。鳥糞はモチノキの樹皮からとった鼠色の塊で、つきたての餅のようにねばついていた。

(サンプル ID : PB19_00150 諸田玲子『お鳥見女房』)

(3) は麻袋に閉じ込められていた男が這い出てくる様子を「毛虫」と形容する例であり、(4) は鳥糞（とりもち）の粘つきを「つきたての餅」と形容している。このように事柄を描写するために用いられている。一方で「教科書」や「自然科学」といった事実や知識の伝達を重視するテキストへの出現も確認される⁴⁵。

- (5) 電子メールは、インターネット上で手紙のように特定の人とやり取りする情

⁴⁴ BCCWJ には「新聞」「雑誌」のテキストジャンルも収録されているが、これらは、例えば、新聞が一つの紙面において政治・経済、芸能、スポーツ、市民投稿などの多様な性質のテキストが収録されており、一つのジャンルとして比較することが難しいと判断したため、除いている。【表 1】の合計値が序章「用例収集の概要」と一致しないのは、それらのジャンルの例を除いているためである。なお、以下の節におけるテキストジャンル分布の表も同様である。

⁴⁵ 「教科書」における「ようだ」型直喩の出現の大半は国語教科書に掲載された文学作品の用例である。ただし、「外国語」「芸術」「情報」「数学」「社会」「理科」などの教科にも 31 例（10 万短単位当たり出現頻度：2.8）出現する。

報のことよ。

(サンプル ID : OT83_00008 『Create information 新版情報 A』)

- (6) 脂肪酸は炭素が鎖のように連結したものが骨格となった物質で、「飽和脂肪酸」と「不飽和脂肪酸」に分けられます。

(サンプル ID : PB14_00142 小林英二『食の乱れで、いま日本の子供が危ない』)

(5) は電子メールとはどのようなものであるかを、書面で他人に情報を送る点で共通した働きを持つ手紙で説明し、(6) は脂肪酸という通常では視認できない物質の構造を「鎖」の形状によって説明する。電子メールの働きや脂肪酸の構造を読者に想起しやすくするために、イメージを用いている。

「出現頻度」の値が中央値を下回るレジスターは「法律」(0)、「白書」(0.1)、「国会会議録」(0.6)、「広報誌」(1.1)、「Yahoo!知恵袋」(5.7)、「社会科学」(6.9)、「言語」(7.0)、「Yahoo!ブログ」(7.8)、「技術工学」(8.7)、「総記」(9.5)である。「法律」には出現が確認されない。これは、比喻を用いることで生じる法解釈の曖昧さを避けるためである。「国会会議録」のような話し言葉をベースとしたジャンル、「Yahoo!知恵袋」や「Yahoo!ブログ」といった話し言葉に近い打ち言葉によるジャンルへの出現が少ない。口頭表現に近い性質を持つジャンルへの出現の少なさが確認できる。つまり、「ようだ」型直喩は、発話者の感情や判断が現れやすいテキストへの出現が少なく、事柄の叙述に用いられることが多いのである。それは数が極めて僅少なながら「白書」のように通常、レトリックを用いずに統計的な事実を記述するテキストに出現することからも認められる。

- (7) 演習場に向け、昼食後、駐屯地を出発、名寄からの長い道のりを終え、演習場へ到着したのは、夜明け前であった。演習場は、あいにくの昨日からの雨で泥沼のようになり、車両はチェーンを付けなければならない程であった。

(サンプル ID : OW1X_00544 『防衛白書 昭和 54 年版』)

『防衛白書』において雨が降ったあとの演習場のコンディションを「泥沼」と表現する。地面の泥濘を「泥沼」という極めて近い性質を持った事物で説明しており、その状況を分かりやすく説明する。

2.2. 「ようだ」型直喩の構文

以上のように「ようだ」型直喩は事柄の叙述に主に用いられる。そのような運用傾向は【表 2】に見られるような構文タイプにも反映される。【表 2】は「ようだ」型直喩を構文タイプ別に集計したものである。

【表2】：「ようだ」型直喩の構文タイプ

構文	活用形	用例数	活用形の割合(%)	構文の割合(%)
修飾	連用形「ように」	9,833	51.3	89.9
	連体形「ような」	7,402	38.6	
述語	終止形「ようだ」	737	3.9	9.3
	連体+形式辞「ようなものだ」	502	2.6	
	連用+形式用言「ように見える」	442	2.3	
	語幹「よう。」	94	0.5	
中止	連用中止「ようで」	148	0.8	0.8
合計		19,158	100	100

頻度第一位の連用修飾が全体の 51.3%を占め、次点の連体修飾が全体の 38.6%を占める。修飾成分である両者を合わせると 89.9%となり、「ようだ」型直喩は修飾成分としての使用が主であることが分かる。つまり、発話者の判断としてではなく事物・事柄の様相を表すために用いられている。このような修飾成分としての使用への偏りは「ようだ」型直喩の性質に動機付けられる。「ようだ」型直喩は1章4節に見たように、外的な根拠を用いた確からしさをイメージに付与する。外的な情報というのは、他者にとってもオープンアクセスなものであり、それを根拠として支えられるイメージは他者との共有が見込まれるものとなる。

- (8) 更に近づくと、驚いたことに、それはあの獣なのでした。そいつは、馬に乗るように箱にまたがって、まともにぼくのほうを見ながら、にやにや笑っていました。房々としたたてがみが風になびいて、地獄を飾る妖怪のようでした。

(安部公房「バベルの塔の狸」)

- (9) 殖産のためではなく趣味として蚕を飼う女性も増えているらしい。巨大な芋虫のような身体も、蛾となって蚕から出てきた成虫も、蚕好きには白くて優雅、モフモフと高貴に感じられ、この上なく愛おしく思えるのだとか。

(高樹のぶ子「蚕起食桑」)

(8) は空から狸が棺桶にまたがってやって来るという非現実的な場面を描写したものである。棺桶にまたがる狸というのは現実において目にすることは極めて稀であり、どのようにして乗ってやって来るかを想像するかは難しい。しかし、「馬に乗るように」と表現することで、書き手である安部公房が想像した場面が読者にも理解される。(9) は蚕の見た目を「巨大な芋虫」と表現する。「巨大な芋虫」という事物の提示は、同じ虫を喩辞に用いることから突飛なものではなく蚕の見た目に則したものである。

述語句としての使用は、終止形が 3.9%であり、「ようなものだ」などのように形式名詞を連体修飾するものや「ように見える」のように形式的な用言を連用修飾して、実質的に述語句の一部となるパターンがそれぞれ 2.6%と 2.3%であり、語幹用法が 0.5%となる。述語句として用いられている例は計 9.3%であり、修飾成分としての使用に比べて述語句としての使用の少なさが分かる。述語においては発話者の判断が顕在化し、様相としての提示よりも評価として提示される。

- (10) 叔父の額に日が射している。椅子に座って日を受けている叔父の姿は、一枚の絵のようだった。

(サンプル ID : PB19_00001 川上弘美『神様』)

叔父の座っている姿を「一枚の絵」と表現する。座り方のディテールではなく座り方に対する発話者の評価を示している。このような対象への評価を比喩的に表現することは「ようだ」型直喩では好まれない。このように、「ようだ」型直喩は、外的根拠を持った確度のイメージであることにより、対象そのものに属するものとして性質や見た目の様子を提示することが多くなる。

「ようだ」型直喩は、序章【表 1】【表 2】に見た中村（1977）と加藤ほか（2020）の比喩指標要素の出現頻度の調査から直喩の形式の中で最も頻繁に出現することが分かっており、汎用性の高い形式である。それはイメージを外的な根拠によって確度を保証することで、事物・事柄の様相として誰もが認めることができ、かつ理解し得るものとするためである。対象の様相を自他ともに確かであると認め得るものとして提示するという表現価値が、文学作品の描写における事物の叙述から白書や教科書のような事実・事柄の記述に重きを置いたテキストへの出現という汎用性の獲得に繋がる。

3. 「みたいだ」型直喩の表現価値

1 章 5 節に見たように「みたいだ」は話者の観察結果や経験、記憶といった自己の内的な情報を根拠として確からしさを付与する。イメージへと確からしさを付与する点で「ようだ」型直喩と同様である。しかし、外的な情報を根拠としてイメージに確からしさを付与した「ようだ」型直喩と観察結果や経験のような主体の解釈を得た上で確からしさをイメージに付与した「みたいだ」型直喩では、表現価値が異なることが予測される。

3.1. 「みたいだ」直喩の出現分布

本節は「みたいだ」型直喩の出現分布を確認する。従来、「みたいだ」は口語的な助動詞であると見なされ、実際の出現も話し言葉に偏る。「ようだ」型直喩と「みたいだ」型直喩の話し言葉と非話し言葉への出現数を BCCWJ 収録の用例を対象に集計すると次の【表 3】のようになる⁴⁶。「みたいだ」型直喩は全例を対象とし、「ようだ」型直喩は無作為抽出によって選定した 1,000 例を対象とした。

【表 3】：話し言葉か非話し言葉か

文体	「みたいだ」	比率	「ようだ」	比率
話し言葉	2,198	56.9%	186	18.6%
非話し言葉	1,663	43.1%	814	81.4%
合計	3,861	100%	1,000	100%

⁴⁶ 話し言葉であると判断する基準として、鍵括弧内の発話であること、聞き手目当てのモダリティを担う終助詞の出現、敬語・丁寧語などの待遇表現の出現を設けた。

「みたいだ」型直喩は話し言葉への出現が 56.9%であり 43.1%の非話し言葉よりも多いことが分かる。「ようだ」型直喩は、非話し言葉への出現が 81.4%であり、話し言葉よりも大幅に非話し言葉への出現が多いことが分かる。このような傾向から修（2015）は「みたいだ」型直喩と「ようだ」型直喩では前者が口語性の強い形式であり、後者が文体的には中立であると説明している。

このような二分法は「ようだ」型直喩と「みたいだ」型直喩の大きな違いを捉えることはできるが、より詳細な出現分布の違いは捨象される。そこで、より広いテキストジャンルを対象として出現分布を調べた場合は次の【表 4】となる。【表 4】は BCCWJ から収集した「みたいだ」型直喩の出現の相対頻度を【表 1】の「ようだ」型直喩と同様に求めたものである。「出現頻度」は 10 万短単位当たりの調整頻度であり、値の降順に並べている。

【表 4】：「みたいだ」型直喩の出現分布

ジャンル	比喩数	全短単位数	出現頻度	ジャンル	比喩数	全短単位数	出現頻度
韻文	29	233,429	12.4	歴史	100	6,585,047	1.5
分類なし	249	2,722,904	9.1	技術工学	72	4,666,656	1.5
文学	1,664	21,511,261	7.7	哲学	39	3,477,809	1.1
Yahoo!知恵袋	361	6,136,420	5.9	教科書	12	1,120,114	1.1
ベストセラー	219	4,435,033	4.9	社会科学	144	15,277,572	0.9
芸術・美術	155	4,541,047	3.4	国会会議録	29	5,596,623	0.5
Yahoo!ブログ	381	12,984,635	2.9	広報誌	6	4,620,337	0.1
総記	43	1,650,711	2.6	白書	0	5,640,348	0
産業	44	2,541,741	1.7	法律	0	1,206,077	0
言語	20	1,159,332	1.7	合計／平均	3,650	111,284,967	3.0
自然科学	83	5,177,871	1.6				

「ようだ」型直喩と同様に中央値によって比較を行う。中央値は 1.7 である。「出現頻度」の値が中央値を上回るレジスターは「言語」（1.7）、「産業」（1.7）、「総記」（2.6）、「Yahoo!ブログ」（2.9）「芸術・美術」（3.4）、「ベストセラー」（4.9）、「Yahoo!知恵袋」（5.9）、「文学」（7.7）、「分類なし」（9.1）、「韻文」（12.4）である。「韻文」「文学」に特に多く出現する傾向は「ようだ」型直喩と同様であり、文学テキストへの出現が優勢であることが分かる。また、主に事柄の描写に用いられる点でも「ようだ」型直喩と同様である。

(11) まず用意するのはサラダオニオン。こいつは紙みたいに薄くスライスする。

（サンプル ID：PB19_00548 ひちわゆか『ラブ・ミー・テンダー』）

(12) 翔也の機嫌はひどく悪い。私が買ってきたTシャツは、この年になってビンゲーなんか着られるかよ、と中年男みたいな口をきいて手を通さなかった。

（サンプル ID：PB29_00171 富士本由紀『殺人買います』）

⁴⁷ 本論文は文体を「文章に対する類型認識の所産」（時枝 1960）とし、話し言葉と書き言葉の対立やテキストジャンルといった類型的な文章の様相として規定する。

(11) はサラダ用にスライスするタマネギの薄さを「紙」と表現し、(12) は息子の口のきき方を「中年男」と形容する。タマネギの薄さや口調といった事柄を描写するものであり、「ようだ」型直喩と類似する。しかし、(11) は「こいつは」のような二人称による語りかけを用い、(12) は「私」を明示した一人称の文であるように、発話主体・語り手が顕在化するテキストに用いられやすい。また、「ようだ」型直喩において出現頻度が下位であった「Yahoo!ブログ」や「Yahoo!知恵袋」への出現が上位にきている。これらのテキストは、話し言葉をベースとした打ち言葉であり、「みたいだ」型直喩が口頭表現に近いジャンルと親和的である様子が見て取れる。

(13) 橋のところが、物凄い勢いで融雪の水が噴出してて洗車状態でした。駐車場・・・なんじゃこりゃって雪の多さ、除雪した雪が壁みたいになってて、いつもの一番近いところには泊められなかったし。

(サンプル ID : OY03_08405 Yahoo!ブログ)

形状に加え、円滑な移動を阻害するため迷惑であることを共通点として除雪した雪を「壁」と喩えている。なお、話し言葉をベースとしている「国会会議録」への出現頻度は0.5と少ないが、これは国会審議や答弁といった自身の発言への責任を負う場において、聞き手に理解されるかが保証されない比喩表現の使用を避けているためであると思われる。

「出現頻度」の値が中央値を下回るレジスターは、「白書」(0)、「法律」(0)、「広報誌」(0.1)、「国会会議録」(0.5)、「社会科学」(0.9)、「教科書」(1.1)、「哲学」(1.1)、「歴史」(1.5)、「技術工学」(1.5)、「自然科学」(1.6)である。「白書」「法律」のレジスターには「みたいだ」型直喩が出現しない。「法律」へ出現しないのは「ようだ」型直喩と同様であり、そもそもヴァリエーションを問わず法律文には直喩が用いられないのだと推測される⁴⁸。また、「白書」への出現が0であるのは、僅かながらも用例が確認された「ようだ」型直喩との違いを示す。「ようだ」型直喩では上位にあった「教科書」や「自然科学」への出現頻度も低く、読み手への正確な意見の伝達や知識・事実の伝達を主眼とするテキストには出現しにくいことが分かる。

3.2. 話者判断としての「みたいだ」型直喩

「みたいだ」型直喩は以上のように口頭表現や対話的なテキストで用いられることが多い表現である。このような運用傾向は【表 5】に見られるような構文タイプにも反映される。【表 5】は「みたいだ」型直喩の構文タイプ別の集計結果である。

⁴⁸ 以下に論じる「そうだ」型直喩、「まるで」型直喩、「あたかも」型直喩、「さながら」型直喩においても法律への出現は確認されない。

【表 5】：「みたいだ」型直喩の構文タイプ

構文	活用形	用例数	活用形の割合(%)	構文の割合(%)
修飾	連用形「みたい」に	1,313	34.0	67.8
	連体形「みたいな」	1,303	33.8	
述語	終止形「みたいだ」	487	12.6	29.3
	連用形＋形式用言「みたい」に思う	62	1.6	
	連体形＋形式辞「みたいなものだ」	346	9.0	
	語幹「みたい。」	218	5.6	
	文末連体「みたいな。」	18	0.5	
その他	中止「みたいで」	113	2.9	2.9
	？ ⁴⁹	1	0.0	
合計		3,861	100	100

連用修飾が 1,313 例（34.0%）であり、連体修飾が 1,303 例（33.8%）である。「ようだ」型直喩と同様に連用修飾の出現数が最多となるが、連用修飾と連体修飾の出現率に 10%以上の開きがある「ようだ」型直喩と比べると「みたいだ」型直喩はほぼ拮抗している。また、終止形・連用形＋形式用言・連体形＋形式辞・語幹・文末連体という述語句を形成する用法は合わせて 29.3%である。9.3%であった「ようだ」型直喩に比べると、述語としての使用の多さが分かる。このように、連用修飾成分として用いられ、述語句の形成が僅少である「ようだ」型直喩に対して、「みたいだ」型直喩は修飾成分としての使用が好まれながらも、発話者の判断として主題の性質・属性を述べる述語句としての使用も多いことが特徴である。「みたいだ」型直喩は連用修飾としては次のように用いられる。

- (14) 「まあ、とにかくそれが軽度の嫉妬。つまり、やきもちっていうやつね。でも重度のものになると、そんな簡単な話じゃ済まなくなってくる。それは寄生虫みたいに人の心にどっしりと居座ってしまうの。そしてある場合には――あなたのお友達が言ったように――腫瘍のようになって魂を深くむしばんでいく。(…)」

(村上春樹「品川猿」)

同一の発話中に「みたいだ」型直喩と「ようだ」型直喩が用いられている。この発話は嫉妬の感情をうまく理解できていない女性に対して、カウンセラーが嫉妬の性質について述べるものである。「寄生虫みたいに」はカウンセラーのこれまでの経験から得られた知見であり、カウンセラーにとっては確かであるが嫉妬の性質をうまく理解していない女性にとって確かか否かは問われない。「腫瘍のように」は、挿入句として「あなたのお友達が言ったように」とあるように、女性にとっても確かなイメージである。つまり、「みたいだ」型直喩は発話者にとって確かであり、聞き手にとっての確かさを問

⁴⁹ 次の例のように「みたいな」となるところが「みたい」となった例を判別困難として「？」とした。コーパス作成における電子テキスト化作業時のミスか本文の通りであるのか、もしくは「みたいだ」の前身である「みたようだ」例の亜種であるかが確定できない例である。

○油絵やバイオリンや俳句や、まことに小説の主人公みたいようで結構に思うが (…)

(サンプル ID : LBe1_00029 影山昇『内村鑑三と寺田寅彦』)

わないイメージを述べ、「ようだ」型直喩は発話者と聞き手の間に共有が見込まれるイメージを提示する。「ようだ」型直喩は外的情報を根拠として用いるという性質上、当該対象の存在自体がそのような知覚像を誘起するものであり、他者にとっても真に近いものとして共有されることが見込まれる。このように、主体の精神作用の結果として導出される判断を他者と共有され得るか、それを見込まないかの違いが両者に存在する。

また、「みたいだ」型直喩は述語句としての使用が「ようだ」型直喩よりも多い点で特徴的である。【表 2】に見たように、「ようだ」型直喩は修飾成分としての運用が主であり、語幹や終止形などによる述語句としての使用が好まれない。それは述語句による叙述という表現の性質が「ようだ」型直喩と親和性がないためである。「A は B だ」や「A は B のようだ／みたいだ」といった述語句としての比喩は主題「A」の性質や属性、様相に対する主体の評価を喩辞に託して表現する。比喩は主体の心理的なイメージであり、それに対象を従属させることで表現が成立する。

(15) 「ここで泳げるのは、魚だけだよ。あぶないよ」

「平気よ。あたしは、おさかなよ」

(吉行淳之介「青い花」)

(15') 「ここで泳げるのは、魚だけだよ。あぶないよ」

「平気よ。あたしはおさかなのようよ」

(15'') 「ここで泳げるのは、魚だけだよ。あぶないよ」

「平気よ。あたしはおさかなみたいよ」

(15) は危険なため湖で泳ぐことを止められた少女が自身を「おさかな」と比喩的に表す。「ようだ」や「みたいだ」を持たない無標形式「A は B だ」型の比喩である。

「彼は犯人だ」のように「A は B だ」は確信的モダリティのもとに述べられる⁵⁰。(15) に対して (15') (15'') の「ようだ」や「みたいだ」を用いて確からしさを付与すると、確信性が低下する。この文脈では「私は魚と同じく水泳能力が高いため危険ではない」ことを伝達するために比喩を用いているため、「A は B だ」という確信的情報を述べる形式が選択される。このように「A は B だ」型の比喩は A と B の類似性を確信的なものとする態度のもとに対象への評価を提示する。

述語句形式の比喩によって評価を提示する場合、その評価が対象となる人物にとって確定的なものであることが伝達される。他者の評価を確定するという行為は相手の面子を侵害する可能性を有する。ゆえに配慮を欠いた表現やいじめの文脈で用いられやすい。このような性質から比喩文による他者の評価は「ようだ」や「みたいだ」といった確からしさを表示する形式によって確定情報ではなく蓋然性のもとに提示することが求められる。しかし、「ようだ」は【表 2】に見たように述語句としての使用が少ない。「ようだ」型直喩の持つ聞き手との共有を見込むという性質は自身の心的イメージが聞き手と共有されることを見込んで提示することに繋がり、「A は B だ」型比喩表現と同じく、配慮上の問題が発生する可能性を持つためである。一方で、「みたいだ」型直喩は自身

⁵⁰ 多門 (2010) は「A は B だ」形式の比喩表現を「隠喩は、要素『松井』を直接カテゴリ『怪物』に放り込む行為だ」(多門 2010 : p.517) と述べるように、B をカテゴリとして捉え、そのメンバーとして A を捉えるというカテゴリ包含を分析手段とする。しかし、絵の上手な人に対して「君はピカソだ」と評する場合、「ピカソ」は個体的な存在であり、カテゴリではない。カテゴリ包含は分析手段の一般性を欠き、「A は B だ」型比喩表現の性質として本論文では採用しない。

の観察結果などの内的情報を参照する形式である。自己の内的な情報を根拠とするのであれば「あくまで私にとってはそのように見えた」という留保が付くため、発話者にとっては確かであるが聞き手にとっての真偽は問わないという表現価値を形成する。つまり、提示されたイメージがあくまで主体にとって確かであり、聞き手にとっての確からしさは不問であることを含意するため、相手が理解するだろうという押しつけがましさが軽減された表現となり、自己の判断の表出として述語句としての使用に用いられやすいのである。

3.3. 心理的距離の形成

「ようだ」型直喩は外的な情報を根拠とした確からしさを付与したイメージを提示するものであり、その確かなイメージは発話者と聞き手の間に共有されることが期待される。自身のイメージが聞き手にとっても真であると思込で伝達するという態度は、言い換えれば聞き手の心理を発話者側で想定する態度であり、会話の場においては対人的な配慮に抵触する可能性を含む。ゆえに、「ようだ」型直喩は文学作品などの特定の他者を想定しないモノローグの性質を持った場において運用されやすい。

一方で、「みたいだ」型直喩は自己の解釈を述べるものであり、聞き手にとってのイメージの適否を見込まないため、特定の聞き手を想定した場における使用が見込まれる。それは、書き言葉よりもダイアログである話し言葉における待遇表現として運用されやすいことを意味する。それが出現分布に見たような話し言葉への出現数の多さに繋がり、修（2015）などの先行研究において指摘される口語性の強さと結び付く。

主体の解釈を述べ、他者にとっての確からしさを問わないことは、他者がどのように思い、感じているかよりも主体にとって確かであることを優先する態度とも言える。そこで、「みたいだ」型直喩は対話において、自己と他者の間に心理的な距離を形成する例が見られる⁵¹。この心理的な距離は他者の面子への侵害を避けることに繋がる。

- (16) 「本当に可愛いよ。こんなに小さくて細くて」 兄さんは今度は注意深く僕を抱いた。嫌だな。兄さんに僕の心臓の音、聞かれました。落ち着かなくちゃ。なるべく平静にしないと、気づかれちゃう。「そう言えば、さっき何してたの？僕の身体に痴漢みたいに触ってたけど」 兄さんはクスッと笑った。「痴漢みたいだった？」「うん。何してたの？」「真也があまり成長しないから、ふと気になったんだ。どこか悪いんじゃないかって」

(サンプル ID : PB19_00204 水島忍『過保護なお兄さま』)

(16) は兄と弟のやり取りを描いた場面である。兄の触り方に対して弟は「痴漢」への類似性を感じる。実の兄であり、かつ同性であるという点から「痴漢」という性的か

⁵¹ 米倉（2013）もポジティブ・フェイスとの関連から「みたいだ」型直喩の性質を論じ、「相手との距離を増加させる」「直接性の回避」を特徴として挙げる。また、「冗談めかしたユーモア」「内容に対する違和感・心理的距離」「自己疎外化」という心的態度を表すとする。これらは発話者と聞き手の間の距離を形成する配慮表現として分析し、表現価値を論じたものとして評価される。ただし、これらの分析は＜類似＞及び類似が含意する＜差異＞を説明原理としている。しかし、「みたいだ」の意味素性を＜類似＞とすると 1 章 5.1 節に見た婉曲や知覚内容などの「みたいだ」の持つ他の用法を説明することが困難となり、論証の妥当性に疑問が生じる。

つ反社会的な行為に擬えることは憚られる。そのため、あくまで発話主体である弟の解釈であることを明示するために「みたいだ」型直喩を選択している。この例は「みたいだ」型直喩の持つ主体の解釈を述べるという性質が相手への配慮として機能するものである。一方で、相手にとっての確からしさを不問とする態度は、自身の判断に対して言及させないという態度を生むことも可能である。

- (17) 「朝っぱらから人んちの前で、金髪女と野良犬みたいにサカってる、チャラついたバカが訪ねてきたって聞いたけど、嫌な予感が当たったわ」
(野村美月『文学少女と月花を孕く水妖』)

(17) は登場人物同士の喧嘩を描いた場面である。女性好きの登場人物に対する罵倒の発話である。発話者の住居の前で他の女性と接触していたことに対する非難を行う。女性と接触する(＝サカる)様子を「野良犬」と表現する。罵倒という行為は対象への自身の判断に対する口答えを行わせないことが大切である。自身の判断への言及をけん制するために、罵倒対象である男性にとって「野良犬」のイメージが確かかどうかを不問とする態度を「みたいだ」型直喩によって表示する。自分自身にとってのイメージの確からしさを表示する「みたいだ」型直喩の性質が、彼我の距離を明示化し、自身の判断に踏み込ませないようにするのである。また、子供の発話のように、相手の反応を想定しないで自身の判断を中心として提示する態度にも繋がる。

- (18) 先生ってベトナム人みたい。それを聞くと母親はあわてて、あゆみちゃん先生にそんなこと言ったらいけませんよ、と激しく叱った。まるであゆみちゃんが道子に何かひどいことを言ったとでもいうように、母親はそれから道子に頭を下げて謝ったのだった。

(多和田葉子「ペルソナ」)

- (18') ?先生ってベトナム人のよう。それを聞くと母親はあわてて、あゆみちゃん先生にそんなこと言ったらいけませんよ、と激しく叱った。

(18) はドイツ在住の親子の娘である「あゆみちゃん」が日本人の道子の容貌を「ベトナム人」に類似していると発言したものである。これは、そのように表現することで道子が傷つくかもしれないという他者の反応を想定しない子どもの発話となっている。ここで用いられている「みたい。」を「よう。」へと変換したものが(18')である。文法的には適格であるが子どもが自分の私的な感想を述べるというこの文脈では、「ようだ」による表示は道子にそのように判断される外的な根拠があるように受け取られ、子どもの発話という表現の性格が薄れる。

このように自身にとって確かであり他者にとっての確からしさを不問とする「みたいだ」型直喩の性質は、発話者と聞き手の間に心理的な距離を形成する。これにより、聞き手にとっての確からしさを問わずに自身のイメージを伝達することが可能になる。「みたいだ」型直喩は発話者の対象への解釈を確かなイメージによって提示するための方略となる。

4. 「そうだ」型直喩の表現価値

1章6節に見たように「そうだ」は未実現の事態の生起や未確認の属性・状態の存在の確からしさを表す。未実現の事態の生起の確からしさが事態の発生直前を捉えるアスペクトである将然相と関わる。それによって、現実には起こり得ない事象の生起に確からしさを与えることで、そのように錯覚されるほどの甚だしさを有していることを表す直喩となる。本節はそのような「そうだ」型直喩が実際にどのように運用されているかを確認し、その表現上の価値を論じる。

4.1. 「そうだ」型直喩の出現分布

本項は「そうだ」型直喩の出現分布を確認する。「ようだ」型直喩と「みたいだ」型直喩は文学テキストに出現しやすい一方で、事実・事柄の記述・伝達に主眼を置くテキストへの出現の面で区別された。そして、それは両表現形式の直喩の表現価値の違いに動機付けられた。「そうだ」型直喩においても、その表現価値を動機として、他の表現形式の直喩とは異なる出現分布を見せることが予測される。【表6】は「そうだ」型直喩の出現頻度を【表1】の「ようだ」型直喩の出現頻度と同様の方法で算出したものである。なお、用例数が「ようだ」型直喩や「みたいだ」型直喩に比べると少ないため、「出現頻度」の値は100万短単位あたりに調整しており、値の降順に並べている。

【表6】：「そうだ」型直喩の出現分布

ジャンル	比喩数	全短単位数	出現頻度	ジャンル	比喩数	全短単位数	出現頻度
文学	145	21,511,261	6.7	分類なし	1	2,722,904	0.4
Yahoo!知恵袋	26	6,136,420	4.2	哲学	1	3,477,809	0.3
ベストセラー	15	4,435,033	3.4	技術工学	1	4,666,656	0.2
総記	5	1,650,711	3.0	韻文	0	233,429	0
Yahoo!ブログ	26	12,984,635	2.0	教科書	0	1,120,114	0
歴史	8	6,585,047	1.2	広報誌	0	4,620,337	0
自然科学	5	5,177,871	1.0	国会会議録	0	5,596,623	0
社会科学	14	15,277,572	0.9	白書	0	5,640,348	0
言語	1	1,159,332	0.9	法律	0	1,206,077	0
産業	1	2,541,741	0.4	合計／平均	251	111,284,967	1.3
芸術・美術	2	4,541,047	0.4				

中央値は0.4である。「出現頻度」の値が中央値を上回るテキストは、「分類なし」(0.4)、「芸術・美術」(0.4)、「産業」(0.4)、「言語」(0.9)、「社会科学」(0.9)、「自然科学」(1.0)、「歴史」(1.2)、「Yahoo!ブログ」(2.0)、「総記」(3.0)、「ベストセラー」(3.4)、「Yahoo!知恵袋」(4.2)、「文学」(6.7)である。出現頻度の第一位が文学であることは「ようだ」型直喩、「みたいだ」型直喩と同様である。事柄の描写に用いられる点で「ようだ」型直喩や「みたいだ」型直喩と同様であるが、甚だしさを表すために用いられる点で異なる。

(19) いや、違う。ナルたちのほうが、縮んでいるのだ。どんどんどんどん縮んで

いく。猫に襲われそんな大きさから、針を剣にして蜘蛛と戦えそんな小ささになって、それでも止まらずに、さらにどんどん縮んでいくのだった。

(サンプル ID : LB19_00049 友野詳『奈落にときめく冒険者』)

(20) 全員がそこで襦袍を着て、舌が焼けそうに熱いうどん汁を食べる。

(サンプル ID : LBj9_00021 笹沢左保『女人切腹』)

(19) は「猫に襲われそんな」という体が小さいことから仮想される事象を提示することで、縮んだ自分たちの体の様相を表現する。(20) は「焼ける」という熱いことから生じる結果状態を用いることでうどんの汁の熱さが甚だしいことを表す。このようにして様態や程度の表現として散文作品に用いられる一方で、「韻文」への出現頻度が 0 であり、「ようだ」型直喩や「みたいだ」型直喩と異なる「そうだ」型直喩の特徴的な傾向である。このことから、小説などの散文形式の文学への出現数が多いことは共通するが、詩・短歌・俳句などの韻文形式の文学への出現数の少なさによって「そうだ」型直喩が区別される。

また、「Yahoo!知恵袋」や「Yahoo!ブログ」のようなインターネット空間における打ち言葉への出現頻度が高い。この点は「みたいだ」型直喩と同様であるが、事物の様相の解釈を伝えるために用いられた「みたいだ」型直喩と異なり、対象から喚起された感情の表出などに用いられる点異なる。

(21) かっこよくて仕方ないの！！もうね、かっこいいの！らびさまがああああ
ああああああああああああああ！！！！！！（だから叫ぶなだってね、
髪下ろしであの前が空いてるし服で何か怪しい黒フードかぶってるんだ
よ！？もうかっこよくてしかたねえんだよおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおお！！！！（うぜえ死ね黒魔術でも使えそうならいか
っこよくて似合ってるの！

(サンプル ID : OY14_12410 Yahoo!ブログ)

(22) 昨日は3年ぶりに乗馬に行きました♪私が以前行ったときに乗った馬とまっ
たく同じお馬さんに乗ることができました♪ああ～(♡▽`♡) 超～～～か
わいい～～(♡▽`♡) もうかわいすぎて死にそうだw

(サンプル ID : OY14_04509 Yahoo!ブログ)

かっこよさに対する心の昂ぶりを述べる(21)や可愛さに対する心の昂ぶりを述べる(22)のように書き手の感情の昂ぶりを伝える文章を形成する要素として、「あ」「お」の重ねや感嘆符、顔文字とともに用いられている。かっこよさや可愛さの程度が甚だしいことに加え、それに対する発話者の感情が表出されている。

一方で、「出現頻度」の値が中央値を下回るテキストは「法律」(0)、「白書」(0)、「国会会議録」(0)、「広報誌」(0)、「教科書」(0)、「韻文」(0)、「技術工学」(0.2)、「哲学」(0.3)である。「法律」「白書」「国会会議録」「広報誌」「教科書」「韻文」への出現が確認されない。「技術工学」や「哲学」への出現も極めて僅少である。「そうだ」型直喩は程度表現に相当する働きを持ち、実際の運用においては(12)(13)のような感情の表出を伴うものであることが多いため、用いられる場面が限定的となる。そのため、【表 6】のように全く用いられないテキストジャンルが多く存在する一方で打ち言

葉への出現頻度が高くなるという偏りを生む。

4.2. 「そうだ」型直喩の構文

「そうだ」型直喩は事柄の様相を表すために用いる例もありつつ、主には(20)のように状態や属性の程度を表すために用いる。特に(21)(22)に見たように、客体的なあり様として属性の程度の甚だしさを表示するのではなく、発話主体の感情を伴った程度を提示することが特徴的である。このような出現傾向を持つ「そうだ」型直喩は次の【表7】のような構文タイプによって運用される。

【表7】：「そうだ」型直喩の構文タイプ

構文	活用形	用例数	活用形の割合(%)	構文の割合(%)
修飾	連体形(そうな)	106	40.3	56.7
	連用形(そうに)	43	16.4	
述語	連体形+形式辞(そうなものだ)	6	2.3	42.2
	連用形+形式用言(そうになる)	11	4.2	
	終止(そうだ)	89	33.8	
	語幹(そう。)	5	1.9	
中止	中止(そうで)	3	1.1	1.1
合計		263	100	100

連体修飾の割合が最も高く、次に終止形述語の割合が高い。連用修飾が主である「ようだ」型直喩や「みたいだ」型直喩とは異なる傾向にある。

- (23) 少し離れたところに細長く別のカーペットが敷かれ、ここが食堂。焚火も用意された。カプサを温めなおすのかと思ったが、あとで、お茶のためだとわかった。巨大鍋のなかのカプサは、まだ火傷しそうに熱かった。

(サンプル ID : LBa3_00028 樋口容視子『住んでみたサウジアラビア』)

(23) はカプサの熱さが甚だしいことを「火傷しそうに」によって「熱かった」を連用修飾することで表す。一般に程度表現は、属性形容詞や状態動詞といった相対的な尺度を持った属性を表す用言を修飾するため、このように連用修飾成分として用いられるものである。しかし、「そうだ」型直喩において、(23)のような連用修飾は16.4%であり、連体修飾と終止形述語よりも低い頻度である。連体修飾、述語句としての使用が多いことは「そうだ」型直喩の特徴である。

- (24) たおれこむようにして西島がうつぶせになったとき、ゴーッと津波の音がおしよせてきて、第三波の爆撃が始まった。こまくがさけそうな音と、爆発、爆風。

(サンプル ID : LBdn_00003 かつおきんや『緑の島はるかに』)

- (25) 渦刺は用意された白衣を着、一刻(二時間)ほど海に入った。海水はまだまだ冷えており身体は凍りつきそうである。

(サンプル ID : LBq9_00081 黒岩重吾『女龍王神功皇后』)

(24)は「こまぐがさけそうな」と「音」を連体修飾することで爆撃音の大きさを表す。鼓膜が破裂するという身体変化を引き起こしかねないことを提示することで、当該の音が尋常でないことを表現する。連用修飾の場合、被修飾部の用言を修飾し、そのディテールを表すが、ここでは細かい音の出方や属性ではなく音の様相そのものとして表すために連体修飾型の表現が選択されている。(25)は、海水の冷たさを「凍り付きそうである」と述語句によって表している。冷たさの甚だしさを身体の凍結という仮想的な事象によって表現する。自身の体験として寒さ・冷たさを表現するために今・この発話者の判断を表す述語句型の表現を選択している。(23)(24)(25)では「火傷する」「鼓膜が裂ける」「凍り付く」のように実際に起こらない心身変化を確かとすることで、そのように錯覚されるほどの甚だしさを対象が持っていることを表す。

このような主体の身体的経験や心理的経験の実感に基づいた甚だしさ表すことが「そうだ」型直喩の表現価値である。また、通常、程度表現は主に程度副詞によってなされるものであり、属性形容詞や状態動詞などを被修飾部とし、連体修飾や述語としての使用は限定的である。(23)のような連用修飾用法はそのような程度表現一般と同様であるが、一方で、(24)のように連体修飾型の表現によって様態を表すなかで甚だしさをも伝え、(25)のように述語句型の表現によって自身の今・この判断として甚だしさを伝えることは程度副詞には見られない運用法であり、「そうだ」型直喩の特徴である。

5. おわりに

本章は文末部の選択によって生じる直喩のヴァリエーションである「ようだ」型直喩、「みたいだ」型直喩、「そうだ」型直喩の表現価値をテキストジャンルの分布や構文タイプの集計といった量的調査とその結果の解釈によって論じた。「ようだ」型直喩は、外的根拠によるイメージへの確度の付与という性質によって、聞き手の理解を見込んだ事物・事柄の客観的様相として提示するという表現価値を持つ。そのため、発話者の判断が潜在化する修飾節によって運用され、文学テキストの描写に主に用いられながら、教科書や白書のような事実・事柄の記述を行うテキストにも出現する。「みたいだ」型直喩は、内的な根拠によるイメージの確度の付与という性質によって、発話主体が対象をどのように見たか、解釈したかをイメージに仮託して提示するという表現価値を持つ。そのため、話し言葉への出現が多くなる。また、発話者の判断が顕在化する述語句としての使用が「ようだ」型直喩よりも多く、聞き手との心理的距離をコントロールする働きを持つ。「そうだ」型直喩は、発生し得ない事態の確からしさを表すことで、そのように錯覚されてしまうほど、対象が甚だしい性質を持つことを表す。発話者の身体的経験や心理的経験の実感に基づいた甚だしさ表すという表現価値を持つ。そのため、ブログにおいて顕著に見られるように、対象から喚起された感情を伴う程度を表すために用いられることが多い。また、細かい動作の様相ではなく、対象のあり様全体を表すために連体修飾として用いられ、また発話者の判断としてその場の体験や実感に基づいた甚だしさを伝える述語句として用いることが多い。このように直喩のヴァリエーションは表現の意図や目的に応じて使い分けられているのである。

第3章 直喩と副詞

1. はじめに

1.1. 本章の目的

本章は、直喩を形成する文法形式のうち、文頭部である副詞の働きと副詞の付加によって生じるヴァリエーションが持つ表現価値を論じる。前章まで見たように直喩の文末部はイメージに確からしさを与えることで、物理的には成立しない事象であるイメージを発話者の心理上では成立することを表し、直喩の成立を文法的に支える。そして、その根拠の違いや確からしさの違いから「ようだ」型直喩や「みたいだ」型直喩、「そうだ」型直喩といったヴァリエーションが生じ、表現の目的や意図に応じて使い分けられる。このような文末部は直喩の成立において必須成分である。一方で、本章で論じる副詞は直喩の成立に必須ではなく、オプションである。直喩において副詞は、イメージへの確からしさの付与のような直喩の成立自体を支えるものではなく、叙述態度をコントロールし、表現の意図や目的に応じた表現のヴァリエーションを作ることを目적으로して選択される。

1.2. 先行研究と問題

比喩と副詞の関係は水谷（1995）、小池（2003）、中川（2013）、工藤（2016）、小松原（2017）などで論じられてきた。水谷（1995）は「オール読物」「文藝春秋」を対象とした計量調査を行うことで、「まるで」が全て「ようだ」と共起するわけではなく、「まるで」が用いられた文全体の三割ほどにとどまることを明らかにし、「表現主体の陳述の態度表明そのものへの修飾ではない」（水谷 1995 : p.109）として事柄内部で働く副詞とする。また、小池（2003）は実例調査による「まるで」の比況副詞⁵²としての成立を跡付けている。明治期から昭和期の通俗小説を対象として、「まるで」の用法及び「まるで」と共起するモダリティ形式の通時的変遷を調査したものである。「まるで」は会話文への使用から地の文への使用への移行が見られ、ゼロ形式や名詞述語との共起が減少する。それに伴い、「ようだ」との共起が増加する。また、明治期には「あたかも」「さながら」との使い分けが見られることを指摘する。水谷（1995）と小池（2003）は実例調査に基づいた出現傾向から、主に「まるで」の性質を論じた研究として評価される。

また、「まるで」の比喩における働きとして、工藤（2016）は「まるで」が比喩に用いられる二つの事物・事柄の「似通いの程度」を限定するとしている。ほかに、小松原（2017）は「AはBのようだ」構文の持つ比喩か推量かの解釈の曖昧性が「まるで」の付加によって解消されることを述べ、「AはBのようだ」を「弱い直喩」とし、「まるでAはBのようだ」を「強い直喩」とした。工藤（2016）における「似通いの程度の限定」は「まるで」が「まるで違う」のように程度副詞であることから導かれる働きであり、小松原（2017）における「強い直喩」も「まるで」が類似の完全性を表すことに

⁵² 本論文は比喩と比況を区別するが、先行研究に言及する場合は「比況副詞」と呼ぶ場合がある。

動機付けられるとしている。しかし、比喩に前置される副詞は「まるで」以外に「ちょうど」「まさに」「あたかも」「さながら」などのように程度以外の副詞も多々用いられる。そのため、類似性に対する程度限定は「まるで」の持つ働きであり、比況・比喩副詞一般に適用できるわけではないという疑義が生じる。そこで、中川（2013）は、比況副詞を「比況判断の叙法副詞」として捉え、発話者の叙法態度の反映として比況副詞を捉え直した。中川（2013）は、比況副詞が意味的には発話者が叙述内容を比況と判断する見積もりの強化を行い、構文的には比喩を文脈に導入する予告や誘導の機能を持つと論じた。副詞が比喩との関わりにおいて持つ意味・構文的機能を論じたものとして評価される。しかし、比況副詞が比喩を予告・強調する機能を持っているとするだけでは、なぜ「まるで」「まさに」「ちょうど」「あたかも」「さながら」のような複数の形式が存在するかを説明することはできない。予告を主とする形式と強調を主とする形式の二形式が存在すれば事足りるはずである。中川（2013）の問題は、「まるで」や「まさに」といった副詞の選択による比喩の表現価値の違いを捉えておらず、「予告」や「強調」の具体的な内容が分らない点にある。「まるで」などの副詞が比喩において果たす機能のラベリングではあっても、比喩において副詞の果たす具体的な働きと副詞の前置によって生まれる直喩のヴァリエーションの表現価値は明らかでない。

2. 対象の定義

2.1. 比況と比喩の区別

本節ではまず、議論の前提として対象となる副詞を規定する。「まるで」や「あたかも」「さながら」などの比喩を導く副詞は従来「比況副詞」として論じられてきた。しかし、比喩と比況が同一概念であるのか、区別されるべきかは論じられていない。それは、比況副詞が導く命題や事象の性質が捉えられておらず、「比況」または「比喩」の概念が明確に定まっていなかったためである。比況と比喩は、現前の事象に対してそれとは異なる事象を対比させることで、事柄を具体化するという点では同じである。

- (1) 春太は、竜一の愚かな若気の至りによって肉体に吸い付いている紫色の雲と赤い眼光の竜が、形成外科の手術で取り除かれるのを、あたかも自分のことのように願った。

（サンプル ID : LBd9_00180 宮本輝「夢み通りの人々」）

- (2) 記号をロール（役割）といいかえてみればいい。あたかもタマネギのように、どこまで皮をむいてもロールであるような存在への強迫。

（サンプル ID : LBi3_00049 宮台真司『制服少女たちの選択』）

(1) (2) とともに副詞「あたかも」によって導かれた連用修飾節「ように」例である。(1) は竜一の刺青を取り除く外科手術の成功を春太が願う様子を「自分のことのように」と形容する。(2) は人格や価値について、本当の自分という核がなく、社会的に持つ役割（ロール）の束であり、ある役割を剥ぐと別の役割が現れるということを「タマネギのように」と形容している。いずれも、手術は自分のことではなく、存在もタマネギではなく、偽の事象を用いて被修飾部の事柄の様相を形容した連用修飾成分を「あたかも」

によって導いている。ここで (1) と (2) の修飾句の指示物の性質に着目すると、(1) における修飾句「自分のこと」における「自分」は、誰が自分であるかは文脈に依存している一方で、(2) における修飾句「タマネギ」は聞き手と発話者で共有する知識やイメージを用いている。本論文は、このような修飾に用いる事物・事柄の指示の性質に着目して (1) のような表現を比況とし、(2) のような表現を比喻として両者を区別する。比喻は、イメージによって対象を具象化するものである。名詞や動詞が喚起する事物のイメージを用いる表現であり、指示物が文脈に依存する表現とは区別される。

2.2. 対象となる副詞

以上のように比況と比喻を区別した上で、直喩に前置される副詞を集計した。【表 1】は BCCWJ から収集した「ようだ」を用いた直喩に前接する副詞の内訳（全 4,104 例）である。用例数の降順に並べている⁵³。

【表 1】：比喻に前置される副詞

副詞	用例数	副詞	用例数	副詞	用例数	副詞	用例数
まるで	3,071	どうやら	6	なかば	2	ひょっとすると	1
あたかも	262	ほんとうに	6	なんでも	2	ほんと	1
ちょうど	260	すなわち	5	なんと	2	ほんまに	1
まさに	146	なんとなく	5	ほんとに	2	まるきり	1
さながら	82	どうも	4	まさか	2	やはり	1
いわば	42	なんか	4	もはや	2		
何か	31	まことに	4	いかんせん	1		
ほとんど	30	まさしく	4	さだめし	1		
たとえば	27	もちろん	4	たしかに	1		
なんだか	26	いかにも	3	たとえるなら	1		
まったく	16	ちょっと	3	たとえば	1		
たとえ	8	どこか	3	なにしろ	1		
なにやら	7	むしろ	3	なるほど	1		
いわゆる	6	おそらく	2	なんていうか	1		
それこそ	6	さしずめ	2	ひょっとしたら	1		

全 4,104 例中、「まるで」が 3,071 例であり、7 割以上を占める。第二位が「あたかも」の 262 例、第三位が「ちょうど」の 260 例、第四位が「まさに」の 146 例、第五位が「さながら」の 82 例である。第六位「いわば」以降は「さながら」の半分ほどの用例数となる。つまり、用例数の面からは、典型例を「まるで」として、「あたかも」「ちょうど」「まさに」「さながら」という中心的な形式があり、「いわば」以下の周辺的形式が存在することになる。本章は、出現頻度一位の「まるで」と第二位の「あたかも」、「あたかも」と類義の表現を作る「さながら」を対象とする。「まさに」や「ちょうど」を用いた表現の分析は今後の課題とする。

⁵³ なお、以下の議論において文末形式は「ようだ」に限定する。これは典型例を対象として副詞と直喩の関係を見るためである。なお、1 章 5.2 節に見たように「ようだ」型直喩と「みたいだ」型直喩で前置される副詞に違いがある。このような文末形式のヴァリエーションごとの副詞の違いは今後の課題である。

3. 比喩における副詞の働き

以上のような副詞について、比喩における働きは中川（2013）がこれらの副詞を叙法態度の反映として捉え、「比況判断の見積もりの強化」と「比喩の予告・導入」という機能を指定した。本節では、中川（2013）における二分に依拠しつつ、それらが発話者にとっては後続の比喩に対する評価的態度の顕在化として働き、聞き手にとっては後に展開される情報がそれまでの情報と異質でありながらも有意味であることの明示として働くという発話者と聞き手それぞれにとっての働きとして捉える。そして、発話者における態度と聞き手の解釈への働きかけを行うことで、文における直喩の情報としての質を副詞がコントロールすることを論じる。

3.1. 比喩に対する評価の顕在化

中川（2013）における「比況判断の見積もり強化」は「まるで」が類似の完全性を表すように後続の比喩表現への評価的な態度を示す機能である。副詞が付加された直喩によって提示された表現は、対象が実際的にどのような様相・性質・属性であるかを示すよりも、発話者にとってどのように判断されたかを示す。ただし「強化」は、用例が高頻度で出現する典型例「まるで」をモデルとした程度副詞の働きを捉えたものである。

「あたかも」「さながら」は程度副詞からの転成ではなく、「強化」とすることは妥当ではないため、「比喩に対する評価の顕在化」とする。

- (3) 家を離れるほど涼しくなってきました。山のふもとの家にでんきがつくと、まるでほたるのようでした。

（サンプル ID : PB1n_00061 山中和子『昭和二十一年八月の絵日記』）

- (3') 家を離れるほど涼しくなってきました。山のふもとの家にでんきがつくと、[φ] ほたるのようでした。

- (4) わが国では、古くから死者の穢れ、死穢という考えがありました。それに不用意に触れると、あたかも疫病のように伝染して、下手をすると命を落としかねないとされます。

（サンプル ID : PB51_00104 宮元啓一『仏教の謎を解く』）

- (4') わが国では、古くから死者の穢れ、死穢という考えがありました。それに不用意に触れると、[φ] 疫病のように伝染して、下手をすると命を落としかねないとされます。

- (5) 各班は弾薬箱を受領して、連隊砲の後から、邪魔な木の枝や足元の石や凸凹を避けて、さながら芋虫のようにについて行く。

（サンプル ID : PB39_00038 別所誼旺『昭和物語』）

- (5') 各班は弾薬箱を受領して、連隊砲の後から、邪魔な木の枝や足元の石や凸凹を避けて、[φ] 芋虫のようにについて行く。

- (3) から「まるで」を脱落させた (3')、(4) から「あたかも」を脱落させた (4')、(5) から「さながら」を脱落させた (5') において副詞が脱落することで事柄的な意

味に変化は生じない。つまり、山の麓の家々に灯りが付いた様子に対する「ほたる」、死者の穢れが伝染することに対する「疫病」、匍匐している様子に対する「芋虫」と表現することで表されるあり様は変わらない。しかし、(3)と(3')、(4)と(4')、(5)と(5')は異なる価値を持った表現として解される。それは比喩表現に対する発話者の評価の有無であり、どのような評価のもとに提示されているかが問題となる。

3.2. 異質な情報であることの明示

聞き手から副詞の働きを見ると、「まるで」や「あたかも」は後続する文脈がそれまでの文脈と異質な情報であることを示すマーカーとして捉えられる。このような予告の機能は次のような言いさしとして出現することから見て取れる。

- (6) たぶんあの人が自分のほうからあんたのそこへやって来て、あんたの胸に顔を埋めながら、涙を流して自白をすると思ってるんでしょう！ええ、あんたはなんておめでたいんでしょう！なんて！皆があんたをだましている、まるで……まるで……それに、あんたはあの男なんぞを信用して、よくまあ恥づかしくないことだ。あの男がいつもあんたに一杯くわしてるのが、いったい目に入らないの？

(ドストエフスキー 米川正夫訳『白痴』)

- (7) 「(…) あの文字の威力たるや大したもの、あたかも…」彼はちょっと考え、多少大袈裟にいうことにした、「あの四文字たるや、われわれ全員に電気にでも触れたような衝撃を与えるのです」「まったく、そのとおり」みな証言した。

(サンプルID : LBG9_00142 残雪(著)/近藤直子(訳)『黄泥街』)

(6) は善良な性質を持ち、騙されていることに気づいていない主人公ムイシュキン公爵に対する登場人物の批評的な発話である。周りの人間が公爵を騙している様子を喩えようとして「まるで……まるで……」と言いつけている。適当な喩辞が見つからないためか「それに」以下は公爵が自身を騙している男を信用しているのが恥づかしいと話題を変更している。比喩による対象の性質規定は行われていないが、それを行おうとしていることが「まるで」の言いさしから読み取ることができる。(7) は「あたかも…」と言いつけた後に言葉の与えた衝撃を「われわれ全員に電気にでも触れたような」と表現する。「あたかも」がこれから比喩を用いて説明することを予告していることが分かる例である。文頭に使用することによって、これから発話者が行った対象の判断についての話題を展開することを表示する。特に、「まるで」「あたかも」「さながら」で予告される直喩は喩辞が長い傾向にあり、そこで展開されている情報が比喩であることを前もって明示することで単に異質な情報なのではなく、比喩として前文脈にある対象の性質や状態、属性などを具体化する情報として解釈することを読み手に要求する。

- (8) そう呟いた男の表情に、子供じみた落胆の色が浮いた。それは、まるで優秀な成績表を持って勇んで家に戻ったら、家の中には母の姿がなく、ガランとしていたというような少年の面影を彷彿とさせた。

(サンプル ID : LBe9_00169 高橋三千綱『オンザティ』)

- (9) おそらく過去の語りの文脈全体は消えてしまっても、その発想のパターンは人間の記憶のなかに残っていて、そのある部分が「あたかもかつては人びとの生活のあらゆる場面で使われていた神社が、現在では子供の七五三の祝や婚礼の儀式だけに使われているのと同じように」いまもなお使いつづけられているのである。

(サンプル ID : LB11_00044 沢田允茂『哲学の風景』)

(8) は少年の面影を表すために 10 文節を超える喩辞を用い、それを「まるで」によって導いている。(9) は人間の発想のパターンを神社における儀式によって喩え、やはり 10 文節を超える長い喩辞を「あたかも」によって導いている。成績表を親に見せる子どもや神社における儀式は、(8) と (9) のテキストでそれまで展開されていた情報とは異質な情報である。しかし、その異質な情報はテキストを理解する上で重要な情報となる。このように「まるで」や「あたかも」の後では前文脈で展開されていた情報とは異質な情報が提示されるが、無関係なことや無意味な情報なのではない。これらの副詞は、後続の情報がそれまでの話題をより具体的に理解するために有意義な情報であると明示する機能を持つ。

以上のように副詞は比喩に対する発話者の評価的態度を顕在化するとともに、後続の情報がそれまで展開されていた情報と異質でありながらも有意義であることを示すという聞き手の解釈への働きかけを行う。つまり、後続の比喩が発話者・聞き手にとってどのような質の情報であるかをコントロールしているのである。そこで必要となるのは、情報の質がコントロールされることで生じる個別の形式ごとの表現価値の違いや運用の違いの具体相の解明である。以下、4 節では「まるで」を用いた直喩、5 節では「あたかも」を用いた直喩、6 節では「さながら」を用いた直喩について、それぞれの副詞の意味を踏まえた上で、表現価値を実際の運用傾向から論じる。

4. 「まるで」と直喩

本節は比喩を導く副詞のうち、「まるで」を論じる。「まるで」は本章【表 1】に見たように比喩を導く副詞の中で最も出現頻度が高く、典型的な形式と見なされる。先行研究では「似通いの程度の限定」(工藤 2016) や「強い直喩」の構文の形成(小松原 2017)のように完全性を表す程度副詞として類似性の度合いに言及することで比喩としての解釈を誘起するものであることが明らかとなっている。言い換えれば、聞き手の比喩解釈への働きかけにおける意味論のプロセスは明らかとなっている。一方で、発話者側はどのような叙述態度で提示しているか、それをどのように運用しているかが問題となる。本節では、「まるで」の意味を踏まえた上で、「まるで」型直喩における発話者の叙述態度とその運用を見る。

4.1. 「まるで」の意味

「まるで」は用言が表す物理的な状態や性質の程度性が完全であることを表す程度副詞として働く場合と状態や性質についての発話者の判断を表す文を導くモダリティ副詞

として用いる場合がある。前者は物理的な情報に関わり、後者は発話者の心理的な情報に関わる。比喩はイメージという発話者の心理的な情報を提示するものであり、後者と関わる。

程度副詞としての「まるで」は次の(10)(11)(12)(13)(14)のように「怯えてない」「ちがってきた」「みすばらしい」「対照的」「そっくり」といった用言が表す物理的な性質の程度性を高める。これらは変化や発話者の想定、比較対象を内包した状態表現となっている。変化前や発話者の想定、比較対象を最小値とすることで「まるで」が取り立てている変化後の状態を最大値として程度性の大きさを表現する。程度に言及する「まるで」はこのように最小値を基準として、その基準を大きく超えた状態を取り立てることで程度の大きさを表す。

- (10) 「その時私がいちばんびっくりしたのは、自分がまるで怯えてないってことだったわ。どうしてだかはわからないけれど、少しも怖くなかったのよ。

(サンプル ID : LBa9_00017 村上春樹『中国行きのスロウ・ボート』)

- (11) 大井市場の担当主幹は、このころには瀬田競氏に変わっていた。大井埋立地の野鳥への風向きも、四月当時とはまるでちがってきたことは、すでに十月の会で感づいてはいたが(…)

(サンプル ID : LBa5_00008 加藤幸子『野鳥の公園奮闘記』)

- (12) 案内された私の部屋は四人部屋だった。しかも、がっかりしたことに、ベッドは鉄製のまるでみすばらしいものだったし、その他の備品は引出しのついた質素な洋服ダンスだけで、机もない。

(サンプル ID : LBa7_00017 岡村喬生『ヒゲのオタマジャクシ世界を泳ぐ』)

- (13) マチルドとは、まるで対照的に痩せ気味なこの若い娼婦は、ちょっと考える目をして(…)

(サンプル ID : LBa9_00052 荒巻義雄『エッシャー宇宙の殺人』)

- (14) ジン・カンパニー出版社の初等教育用の「歴史」では、古代史について、次のような、まるで国語の教科書そっくりな記述ではじまっている。

(サンプル ID : LBb3_00009 佐藤高明『教科書検定の現場から』)

(10) は怯えることが想定される文脈で予想に反して怯えが全く生じていないことを表す。(11) は担当者が変わることによって埋立地の野鳥への対応がすっかり変わったことを表す。(12) は「がっかりしたことに」とあり、発話者としては一定の質を持ったベッドが設置してあることを期待していたが、案内された部屋に設置してあるベッドがひどくみすばらしく、落胆している。その期待に反した状態であるみすばらしさが最大値となることを表す。(13) は「若い娼婦」の体形が「マチルド」と比較すると対極的に痩せていることを表す。(14) は歴史教科書の冒頭が歴史的記述ではなく、情緒的に書かれていることを「国語の教科書そっくり」と表す。当該の記述と国語教科書の文学作品の記述との類似性が高いことを表す。このように「まるで」は予想された怯え、前任の担当者、ベッドへの予想、他者、歴史教科書といった基準値を超えた状態を取り立てている。

4.2. 「まるで」と比喩

「まるで」はこのように変化前や想定されていた状況や想定、比較対象を最小値として、変化後・実際の状況を最大値とすることで「まるで」が修飾する用言の表す物理的な性質・状態の程度が極大であることを表す。(10) から (14) のように物理的な状態に作用すれば程度副詞として機能し、発話者の心理に作用すれば (15) から (18) のように状況に対する発話者の評価を表す文を導く。導入される文はいずれも対象の性質や状態、様態を具体化する表現である。命題が真偽未確認であれば非比喩的に様態を描写する表現となり、偽であるならば比喩表現となる。

- (15) 少年は元気よく立ちあがると、窓のカーテンをひいた。小屋の中は、よけいまっくらになった。いろりのかすかな火あかりに見えたカーテンは、つぎはぎだらけの黒い布だった。(おかしなことをするな。先にあかりをつけてから、カーテンをひけばいいのに、これじゃあ、まるで灯火管制だ。) と、山村さんは思った。

(サンプル ID : LBan_00009 『長崎源之助全集』)

- (16) それにしても、ひどい暑さです。砂はかわききって、ジリジリと音をたて、サボテンも枯れているのです。「こんな暑いさばくが、ほかにあるだろうか。まるで、かまどの中にいるようだ。」

(サンプル ID : LBan_00017 米山博好『ぼくのベットは白いヨット』)

- (17) 牧子が障子を開けたとき、男は急いで何かをボストンバッグの中へ、しまい込んでいた。まるで、見られては困るもののように…。

(サンプル ID : LBb9_00092 赤川次郎『三毛猫ホームズのクリスマス』)

- (18) 彼は、ヴァイオリン科の学生で、スポーツマン。いつもボールとたわむれていて、本職のヴァイオリンはレッスンの前に申しわけ程度に練習するといった男だったが、世話好きで、私の方が十歳も年上なのに、まるで弟の面倒を見る兄といった調子であった。

(サンプル ID : LBa7_00017 岡村喬生『ヒゲのオタマジャクシ世界を泳ぐ』)

(15) は黒いカーテンによって真っ暗になった室内の様子について「灯火管制だ」と表現する。[これは灯火管制だ]は物理的には偽の命題である。しかし、当該文脈における部屋の様子に対する発話者の実感としては真である。「まるで」は状態の最大値を取り、(16) においては「灯火管制」と「真っ暗な部屋」との類似が想定される基準値ではなく完全に近いことを表す。つまり、真っ暗な部屋を表すために灯火管制のイメージが、発話者の心理において、確からしさが極めて高いことを表す。(16) は主体の感じる砂漠の暑さについて「かまどの中にいるようだ」と表現する。[かまどの中にいる]は物理的な事態としては偽であるが、暑さに対する発話者の実感として心理的には真の情報である。「まるで」は砂漠の暑さに対する実感とかまどの中の暑さの類似が発話者にとって非常に高く、暑さの表現に最適であることを表す。(15) は「A は B だ」の措定文によって表出される隠喩であり、(16) は比喩指標である「ようだ」があり直喩である。隠喩・直喩に限らず比喩を導いていることが分かる。

このような比喩文の他に (17) のような非比喩文、(18) のような「ようだ」に限ら

ないモダリティ形式を有した文を導く。(17)は「男」がボストンバッグへと物を仕舞った様子を「見られては困るもののように」と表現する。見られては困るかどうかは当該の文脈の時点では不確定である。しかし、発話者にとっては当該の仕舞う様が見られては困るものを仕舞う様に似ている。未確認ではあるが、最も類似するイメージを用いてあり様を表現する。(18)は世話好きな「彼」と発話者の関係について「弟の面倒を見る兄」と表現する。発話者と「彼」との関係に類似した事態が「弟の面倒を見る兄」である。

4.2. 「まるで」の導く直喩

「まるで」はこのように対象の性質についての発話者の判断を表す文を導き、確からしさが極めて高いことを表す。本項は、そのような意味を持った「まるで」を用いた直喩の表現価値を、運用傾向とその結果の解釈を行うことで論じる。

4.2.1. 「まるで」型直喩の出現分布

本節は、「まるで」型直喩のテキストジャンルにおける出現分布を確認する。【表 2】は BCCWJ から収集した「まるで」型直喩のテキストジャンルごとの出現頻度を 2 章【表 1】の「ようだ」型直喩と同様の方法により算出したものである。なお、【表 2】に掲載している値は、100 万短単位あたりの出現頻度として調整しており、その降順で並べている。

【表 2】: 「まるで」型直喩の出現分布

ジャンル	比喩数	全短単位	出現頻度	ジャンル	比喩数	全短単位数	出現頻度
文学	1,458	21,511,261	67.7	技術工学	66	4,666,656	14.1
分類なし	129	2,722,904	47.4	言語	16	1,159,332	13.8
韻文	10	233,429	42.8	社会科学	204	15,277,572	13.4
ベストセラー	175	4,435,033	39.5	教科書	12	1,120,114	10.7
芸術・美術	160	4,541,047	35.2	Yahoo!知恵袋	32	6,136,420	5.2
歴史	192	6,585,047	29.2	広報誌	7	4,620,337	1.5
総記	40	1,650,711	24.2	国会会議録	2	5,596,623	0.4
哲学	64	3,477,809	18.4	白書	1	5,640,348	0.2
産業	42	2,541,741	16.5	法律	0	1,206,077	0
Yahoo!ブログ	212	12,984,635	16.3	合計／平均	2,897	111,284,967	20.6
自然科学	75	5,177,871	14.5				

中央値は 15.4 である。中央値を上回る値のレジスターは「Yahoo!ブログ」(16.3)、「産業」(16.5)、「哲学」(18.4)、「総記」(24.2)、「歴史」(29.2)、「芸術・美術」(35.2)、「ベストセラー」(39.5)、「韻文」(42.8)、「分類なし」(47.4)、「文学」(67.7) となる。文学作品を多く含む「ベストセラー」、「韻文」、「文学」が上位を占める。中央値を下回る値のレジスターは「法律」(0)、「白書」(0.2)、「国会会議録」(0.4)、「広報誌」(1.5)、「Yahoo!知恵袋」(5.2)、「教科書」(10.7)、「社会科学」(13.4)、「言語」(13.8)、「技術工学」(14.1)、「自然科学」(14.5) である。事実や発話者の主張を聞き手に正確に伝達する必要があるテキストへの出現が僅少である。特に、統計的な事実を記載する「白書」

への出現は僅少であり、解釈の揺れの少ないことが望ましい「法律」においての使用例は確認されない。

以上の出現傾向をまとめると、「まるで」型直喩は文学テキストのように情景や人物の描写を行うテキストに出現しやすい。これは2章に見たような「ようだ」型直喩の出現傾向と共通する。約2万例の「ようだ」型直喩と約3千例の「まるで」型直喩とで、出現する絶対数に大きな違いは見られるが、ジャンルの分布としては大きな差が見られない。「ようだ」型直喩と「まるで」型直喩は用いられる場が似通っていることが窺える。

4.2.2. 最適なイメージとしての提示

以上のように「まるで」型直喩は「ようだ」型直喩と似通った場で用いられている。しかし、比喩においてイメージを表す要素である喩辞を見ると「まるで」型直喩と「ようだ」型直喩で異なることが分かる。これは、両者が異なる表現価値を持ち、異なった目的で用いられていることを意味する。「まるで」型直喩と「ようだ」型直喩の喩辞の長さを確認する。喩辞の長さは文節数とする。その集計結果が【表3】である。

【表3】:「まるで」型直喩と「ようだ」型直喩の文節数

「まるで」型直喩						「ようだ」型直喩					
文節数	用例数	割合 (%)	文節数	用例数	割合 (%)	文節数	用例数	割合 (%)	文節数	用例数	割合 (%)
1	999	32.53	12	2	0.07	1	12,427	64.87	12	2	0.01
2	882	28.72	13	2	0.07	2	4,127	21.54	13	3	0.02
3	588	19.15	14	2	0.07	3	1,495	7.8	14	2	0.01
4	303	9.87	15	1	0.03	4	581	3.03	15	0	0
5	148	4.82	16	0	0	5	270	1.41	16	1	0.01
6	68	2.21	17	1	0.03	6	121	0.63	17	0	0
7	33	1.07	18	0	0	7	69	0.36	18	0	0
8	18	0.59	19	0	0	8	26	0.14	19	0	0
9	9	0.29	20	1	0.03	9	14	0.07	20	0	0
10	11	0.36	21	1	0.03	10	13	0.07	21	1	0.01
11	2	0.07	合計	3,071	100	11	6	0.03	合計	19,158	100

「ようだ」型直喩の傾向を確認すると、1文節の喩辞が64.87%と大半を占め、2文節の喩辞が21.54%である。1文節と2文節で85%を超える。10文節を越えるような長い喩辞も出現するが、合計で0.16%と僅少である。つまり、「ようだ」型直喩は1文節、2文節といった短い喩辞を主に用いる傾向にあることが分かる。

「まるで」型直喩は1文節が最多である点では「ようだ」型直喩と共通する。一方で、「まるで」型直喩では、1文節の喩辞と2文節の喩辞の合計が61.25%となり、短い喩辞の割合が約6割となり、8割を超える「ようだ」型直喩と異なる傾向にある。つまり、「まるで」型直喩は「ようだ」型直喩に比べると、3文節以上の詳細に特徴付けられた喩辞を使用しやすいことが分かる。

- (19) ぼくは思わずほんと重い吐息をついて、その風景にすっかり魅せられてしまっているのに気づきました。悩ましい戦慄が背筋をつらぬき、ぼくはスペインに行ったことがないのだからこの景色を見たはずはないと考えるのに、ど

うしても見たことのある光景だと思われてならないのです。その画面はまるで記憶の底に開かれた窓のようでした。

(安部公房「S・カルマ氏の犯罪」)

名前を失い、困惑した主人公の「ぼく」が病院の待合室で偶然手に取った雑誌に掲載されていたスペインの荒野の画面について「記憶の底に開かれた窓」と表現する。実際に行ったことはないが、それでも懐かしさを覚える風景に対する感情を表現する。当該の文脈における発話者が感じている感情を表現するイメージとして「記憶の底に開かれた窓」が提示される。読者の中に名前を失うという特殊な経験を持つものは想定されず、その具体的な経験と感情は読み手に共有を期待できるものではない。ゆえに、「窓」だけでなく「記憶の底に開かれた」という連体節を加えることで喩辞を具体化してイメージを詳細に造形する。

「まるで」によって導かれた直喩は発話者にとって極めて高い確からしさを有する。しかし、発話者にとって極めて確からしくとも聞き手にとってもそうであるとは限らず、両者の差を埋める必要がある。そのために詳細に形作られたイメージを提示する。両者の間に共有される情報が少ないため、その差を埋めるための情報を喩辞によって補填するのである。

4.2.3. 「まるで」型直喩の構文

以上のように「まるで」型直喩は「ようだ」型直喩と共通した場で用いられながらも、詳細に特徴付けたイメージを用いる傾向にある。それは発話者にとって極めて高い確からしさを持つイメージを聞き手にも共有するためである。このように発話者にとっての高い確からしさを有した「まるで」型直喩は次の【表 4】のような構文タイプで運用されている。

【表 4】：「まるで」型直喩の構文タイプ

構文	活用形	用例数	割合(%)	構文の割合(%)
修飾	連用形（ように）	1,396	45.4	71.4
	連体形（ような）	799	26.0	
述語	連用形＋形式用言（ようにする）	134	4.4	27.1
	連体形＋形式辞（ようなもの）	83	2.7	
	終止（ようだ）	549	17.9	
	語幹（よう。）	65	2.1	
中止	中止（ように）	45	1.5	1.5
合計		3,071	100	100

連用修飾が 45.4%を占めて第一位となり、連体修飾が 26%であり第二位となる。両者を合わせて修飾用法が 71.4%となり、述語としての使用よりも多い。この点は 2 章【表 2】に見た「ようだ」型直喩の構文タイプと同様である。発話者の判断が潜在化する修飾節では発話者にとって最適なイメージによって行為などの様相を表す表現として提示される。

- (20) くるりと、まるでモデルのように美しくターンして、先輩は俺を置いて歩き出す。

(新海誠『小説 君の名は。』)

(20) はアルバイト先の先輩とのデートの帰り道場面である。憧れの先輩の動作に対して「モデルのように美しくターンして」と表現する。この文脈で言及される「先輩」は職業的にはモデルではない。「先輩」に惚れている発話者にとってその美しさを表現する確かなイメージが美しい人物の典型的「モデル」となる。このような修飾用法が主である一方で、述語としての使用も全体で 27.1% であり、「ようだ」型直喩が 9.3% であったことに比べると発話者の判断として提示されることが多い。

- (21) 鏡花の描く物語は、まるで花で作ったお酒のようよ！ 可憐な野菊、神秘の月見草、あでやかな山梔子、凜然たる忍冬、咲き誇る金木犀。

(野村美月『文学少女と月花を孕く水妖』)

(21) は泉鏡花作品について語る文学好きのヒロインの言葉である。発話者のヒロインにとって泉鏡花の作品の持つ魅力や美しさを表すための確かなイメージとして「花で作ったお酒」が提示される。このヒロインは本を食することができるという特殊な能力を持つという設定であり、特異な実感の表明である。この判断は発話者独自の根拠に基づくもので、当該の人物にとって高い確からしさを持つが、それが聞き手にとっても確かであるかは分からない。

以上のように「まるで」型直喩はイメージを発話者にとっては高い確からしさを有したものであるとして提示するが、聞き手との共有が期待できるかは不明として提示される。ゆえに、4.2.2 節に見たように喩辞を長くし、相手とイメージが共有できるようにする。発話者にとって極めて高い確からしさを持つということは、言い換えれば発話者にとっては表現に最適なイメージであると捉えているのだと言える。つまり、「まるで」型直喩は、発話者にとって表現に最適だと判断したイメージを提示する表現価値を持つ。

5. 「あたかも」と直喩

本節は「あたかも」によって導かれる直喩を見る。「あたかも」や次節に論じる「さながら」は比喩を導く副詞の典型的な形式として挙げられることが多い。しかし、「まるで」のような程度副詞から転成した副詞と異なり、程度副詞由来ではないため、確からしさの高さの明示の働きは適用できない。これらの副詞の直喩における働きは殆ど明らかとなっていないのが現状である。「あたかも」や「さながら」がどのような叙述態度のもとに比喩を提示するか、そして、これらの副詞を用いた直喩がどのような表現価値を持ち、運用されているかを解明する必要がある。

5.1. 「あたかも」の意味と比喩

「あたかも」は後続する節・文が対象の概念的性質を具体的に言い換えたものであることを表す。それによって、(22) のような比喩用法、(23) のような比況用法、(24)

のような時点用法を獲得する。

- (22) なんといっても両国のつながりは数千年来のものですし、かつてライシャワー大使が言われていたじゃないですか。日本と中国の關係にアメリカはどうしてもかなわない。それはあたかもヨーロッパとギリシアの關係に似ていると…。

(サンプル ID : LBa3_00023 樋口修吉『国別・外人接待法』)

- (23) ジュネーブで開催されるWHOの国際會議を逆手にとった。離日の数カ月前から折にふれ、あたかもそこで重大発表をするかのような言動を部長は故意にとった。眼をジュネーブの部長に釘付けにさせておく作戦である。

(サンプル ID : LBa9_00090 山崎光夫『ジェンナーの遺言』)

- (24) わたくしはすっかり同情して、恰もそのころ故郷へ帰ろうと思っていた時なので、彼をわたくしの家へ来て書くように誘うと、彼は非常に喜んでわたくしと同道した。

(サンプル ID : LBh9_00246 森敦『森敦全集 第5巻』)

(22) は日本と中国の關係をヨーロッパとギリシアの關係に比している。「日本：中国⇨ヨーロッパ：ギリシア」という類比關係によって關係の深さを説明している。類比關係を用いた比喩用法である。國家間の關係性という概念的な性質をヨーロッパとギリシアという具体的な国（地域）と国の關係性によって言い換えている⁵⁴。(23) は、部長の言動について述べたものである。国際會議で重大発表をするように見せかけている様子であることを「あたかも」によって導いている。部長の言動を「重大発表をする」と具体的に言い換えることで比況用法となる。(24) は、同情したその時点において「故郷へ帰ろう」という思考を保有していたことを示すものであり、「ちょうど」などと近い。その時点における発話者の思考内容を具体化している。このような時点用法は「*明日、あたかも帰ろうと思う」のような未来時を取ることはできない。これは、生起した思考の具体化を「あたかも」の後続文が提示しており、起きていないことへの具体的な言い換えはできないことを意味する。以上の例から、(22) は日本と中国の關係に存在する「深さ」を類似した國家の關係によって説明し、(23) は部長の言動が具体的にどのようなものであるかを「重大発表をする」と言い換え、(24) はその時点における思

⁵⁴ 歴史的には「ひとし」や「ことならず」「似ている」などの同一性や類似性を明示する用言との共起が認められ、対象と同様の性質のものによって言い換えていることを明示する構文で用いていることが多い。

○露の蝶ではなけれどもきのふの淵はけふの瀬とかはり易きは宛も具合のよいからくりのひとしき人心ぞかし (サンプル ID : 52-洒落 1776_01006 『無論里問答』)

○又日本のいろはは四十七文字西洋の横文字は二十六文字されば日本や西洋の字を知るは一月もかかれれば出来るわけにてこの得失を考へればむづかしき文字の為に余計な光陰を費やすは真に無益なことでござるもと文字といふ物は前にも御話申通り世の中の理を知る為の道具なれば恰も大工や左官の鑿鉋泥鍔杯と同様な物でござる (サンプル ID : 60C 口語 1874_07103 小川為治『開化問答』)

「宛も・恰も」に後続する節において、上例は「ひとし」、下例は「同様」が用いられている。上例は人の心とかからくりが「かはり易き」という点で「等しい」ことを表し、下例は文字と大工道具が道具であるという点で「同様」であることを表す。このように「人心：からくり」、「文字：大工道具」という異なる二物が「変わりやすい」「道具」である点で同じものであることを述べる文に「あたかも」は用いられていた。Aと異なるBについて、それらが何らかの点で関わりがあることを「あたかも」は明示していたと推察される。

考を具体化して表示する。つまり、対象となる事物・事柄の概念的性質や非言語的情報を具体的に言い換える節・文を「あたかも」は導いている。

5.2. 「あたかも」の導く直喩

以上のように「あたかも」は後続の文が対象の概念的性質や非言語的情報を具体的に言い換えるものであるとして提示する。本項は、そのような意味を有する「あたかも」を用いた直喩の表現価値を運用傾向の確認とその結果の解釈によって論じる。

5.2.1. 「あたかも」型直喩の出現分布

本項は、「あたかも」型直喩のテキストジャンルにおける出現分布を確認する。【表 5】は BCCWJ から収集した「あたかも」型直喩のテキストジャンルごとの出現頻度を 2 章【表 1】の「ようだ」型直喩と同様の方法により算出したものである。なお、【表 5】に掲載している値は、100 万短単位あたりの出現頻度として調整しており、その降順に並べている。

【表 5】：「あたかも」型直喩の出現分布

ジャンル	比喩数	全短単位	出現頻度	ジャンル	比喩数	全短単位数	出現頻度
哲学	18	3,477,809	5.2	産業	3	2,541,741	1.2
芸術・美術	22	4,541,047	4.8	分類なし	1	2,722,904	0.4
文学	92	21,511,261	4.3	Yahoo!ブログ	5	12,984,635	0.4
技術工学	19	4,666,656	4.1	広報誌	2	4,620,337	0.4
自然科学	16	5,177,871	3.1	Yahoo!知恵袋	1	6,136,420	0.2
社会科学	46	15,277,572	3.0	白書	1	5,640,348	0.2
教科書	3	1,120,114	2.7	韻文	0	233,429	0
総記	3	1,650,711	1.8	国会会議録	0	5,596,623	0
言語	2	1,159,332	1.7	法律	0	1,206,077	0
ベストセラー	7	4,435,033	1.6	合計／平均	250	111,284,967	1.8
歴史	9	6,585,047	1.4				

中央値は 1.5 である。中央値を下回る値のジャンルは「法律」(0)、「国会会議録」(0)、「韻文」(0)、「白書」(0.2)、「Yahoo!知恵袋」(0.2)、「広報誌」(0.4)、「Yahoo!ブログ」(0.4)、「分類なし」(0.4)、産業 (1.2)、「歴史」(1.4) である。「白書」「法律」「国会会議録」への出現頻度が少ないのは「ようだ」型直喩や「まるで」型直喩と共通するが、「韻文」への出現が確認されない点で特徴的である。中央値を上回る値のテキストジャンルは、「ベストセラー」(1.6)、「言語」(1.7)、「総記」(1.8)、「教科書」(2.7)、「社会科学」(3.0)、「自然科学」(3.1)、「技術工学」(4.1)、「文学」(4.3)、「芸術・美術」(4.8)、「哲学」(5.2) である。「文学」に出現しやすい傾向は「ようだ」型直喩と同様であるが、出現頻度は第三位である。「韻文」に出現しないことと合わせて「ようだ」型直喩や「みたいだ」型直喩、「まるで」型直喩に比べる文学的なテキストへの出現が少なく、知識や意見の伝達を主としたテキストに出現しやすい。特に出現頻度の第一位が「哲学」となっており、抽象的な概念や論理を説明するテキストへの出現の多いこと

が特徴的である。また、第二位に「芸術・美術」が来るように、形・色・音という非言語的情報によって構成される芸術作品を説明するテキストへの出現も多い。哲学テキストや芸術・美術に関わるテキストといった概念や美術作品を、それを知らない読者に説明するテキストへと出現しやすい傾向にあることが分かる。

- (25) ここで鮮やかにとらえられているように、形而上学は、あたかも光の当たらないうちは姿をあらわさなかった眼前の存在を、くっきり照らし出す光のようなものとしての意味を持っているのである。

(サンプル ID : LBh1_00003 『中村雄二郎著作集』)

- (26) おそらく過去の語りの文脈全体は消えてしまっても、その発想のパターンは人間の記憶のなかに残っていて、そのある部分があたかもかつては人びとの生活のあらゆる場面で使われていた神社が、現在では子供の七五三の祝や婚礼の儀式だけに使われているのと同じように—いまもなお使いつづけられているのである。

(サンプル ID : LB11_00044 沢田允茂『哲学の風景』)

- (27) もしレトリックがほんとうに死滅したのなら、レトリック論の可能性は物好きな少数者のために残されたものにすぎなくなります。彼らは、あたかもミイラを掘り起こす者のようではないでしょうか。

(サンプル ID : LBm1_00008 菅野盾樹『ロゴス その死と再生』)

- (28) ドイツの新古典主義者ヨーハン・ハインリヒ・フォン・ダンネッカーの「豹に乗るアリアドネ」には、注意深く当てられた照明によって白い表面にばら色がかかった肌色が与えられており、グランド・ツアーでフランクフルトを訪れた人々の称賛を浴びた。照明は、見易いように回転していた彫刻を、あたかも血の通った人体のように見せたという。

(サンプル ID : LBd7_00027 ドナルド・レノルズ(著)/高階秀爾・高階絵里加(訳)『ケンブリッジ西洋美術の流れ』)

- (29) 同誌に掲載された写真作品のなかで注目されるのは、大田黒元雄の「大根河岸ヴァリエーション」(千九百二十一年十二月号)である。京橋付近の大根河岸を舞台にして、川の流れ、河岸の倉、舟、橋上の人物などを、あたかも変奏曲(ヴァリエーション)を聴くように再構成したこの作品は、おそらく日本最初の本格的な組写真の試みだった。

(サンプル ID : LBd7_00029 飯沢耕太郎『都市の視線』)

(25) (26) (27) は、哲学ジャンルに用いられた用例である。「形而上学」「発想が再生されること」「レトリック論を掘り返す者」がどのようなものであるかを「暗所を照らす光」「神社が儀式だけに使われていること」「ミイラを掘り起こす人」として比喩的に意味付けている。(28) (29) は、芸術・美術ジャンルに用いられた用例である。話題となっている芸術作品である「照明によって照らされた彫刻」や「写真の組作品」を「血の通った人体」「変奏曲を聴く」と表現し、それがどのようなものであるかを表している。哲学上の概念や芸術作品といった非言語的な情報をイメージによって具体的に言い換えることで読者に理解しやすい形で提示しており、説明のために用いていると言

える。このように「あたかも」型直喩は、非言語的情報をイメージによって具体化することで説明するという表現価値を持ち、知識や意見を伝達することを主とするテキストで運用される。

5.2.2. 説明のための直喩

以上のように、「あたかも」型直喩は対象の概念的な性質や非言語的情報をイメージによって具体化して分かりやすくする。イメージという具体的な形象を用いるという直喩の性質を対象の説明に利用している。そのため、説明を読み手・聞き手が理解できるように文節数を連ねてイメージのディテールを指定する長い喩辞が用いられやすくなる。「あたかも」型直喩に用いられる喩辞の文節数を集計し、長さを調べると【表 6】のようになる。

【表 6】：「あたかも」型直喩の喩辞の文節数

文節数	用例数	割合(%)	文節数	用例数	割合(%)
1	61	23.3	11	3	1.1
2	60	22.9	12	1	0.4
3	62	23.7	13	0	0
4	26	9.9	14	0	0
5	20	7.6	15	0	0
6	11	4.2	16	1	0.4
7	5	1.9	17	0	0
8	7	2.7	18	1	0.4
9	4	1.5	合計	262	100
10	0	0			

1 文節の喩辞が 23.3%、2 文節の喩辞が 22.9%となり、両者の合計が 46.2%となっている。本章【表 3】に見たように、「ようだ」型直喩は 1・2 文節の喩辞の合計が 86.41%であり、10 文節以上の喩辞が 0.16%であった。それに比べると、「あたかも」型直喩は 1・2 文節喩辞の割合が 46.2%、10 文節以上の長い喩辞が合計で 2.3%、かつ最大で 18 文節の喩辞が出現しており、長い喩辞を用いやすい傾向にあることが分かる。

- (30) 地生ランについては、彼らを探す上で正しい花時を選ぶだけではなく、正しい年を選ぶことが必要なのであるが、いつその時がやって来るかは、何も予告するものがない。あたかも、十年続けて毎年、シップの一種が咲いていたところを歩いてみたところが、今やそれが地下に潜ってしまったため、1 つも見つけられない、というようなものだ。

(サンプル ID : LBn4_00019 F・キングドン・ウォード(著)塚谷 裕一(訳)『ブランド・ハンターの回想』)

(30) は地生ランを探す難しさを述べた文である。開花する年を見定めたうえで、開花シーズンに探すことが必要であることを述べ、それを「シップ」を探す困難さの経験に擬えて表現する。「シップ」は洋ランのパフィオペディルムの俗称であり、探し集めることが難しい。そのような園芸家に共有される情報を用いて、当該の地生ランを見つける困難さを表現する。「シップ」という事物ではなく、「シップ」を探す経験を喩えに

用いるため、その経験の具体的な中身を喩辞内で説明しており、文節数が長くなっている。このように説明に用いるためのイメージのディテールを指定するため、「あたかも」型直喩の喩辞は長くなる傾向にあるのである。

5.2.3. 「あたかも」型直喩の構文

「あたかも」型直喩は以上のように、概念的性質や非言語的な情報を説明するために用いられ、聞き手が説明として理解するように喩辞を長くする傾向にあることが分かった。このような「あたかも」型直喩が実際に運用される際の構文タイプは次の【表 7】となる。

【表 7】：「あたかも」型直喩の構文タイプ

構文	活用形	用例数	割合(%)	構文の割合(%)
修飾	連用形（ように）	155	59.1	77.0
	連体形（ような）	47	17.9	
述語	連用形＋形式用言（ようにする）	23	8.8	22.2
	連体形＋形式辞（ようなもの）	11	4.2	
	終止（ようだ）	19	7.3	
	語幹（よう。）	5	1.9	
中止	中止（ようで）	2	0.8	0.8
合計		262	100	100

「あたかも」型直喩は修飾用法 77.0%、述語用法 22.2%である。修飾成分としての使用が主であるが、一方で「ようだ」型直喩に比べると述語としての使用が多い。これは、本章【表 4】に見た「まるで」型直喩と同様の傾向を示している。

修飾節として用いた場合は、対象の行為の様相などのディテールを具体的なイメージで言い換え、読者が理解しやすい形で提示する。

- (31) 夫は家庭を顧みることなく、その時間とエネルギーの大半を企業活動に投入し、夫が仕事に全力投球できるよう、妻は家庭のことに全責任をもつ。企業はその従業員をあたかも将棋の駒のように、もっとも効率的に働かせる。

（サンプル ID : PB23_00763 袖井孝子『日本の住まい変わる家族』）

(31) は企業が社員をどのように働かせているかを「将棋の駒」と表現する。将棋は無駄な一手を極力指さないようにするものであり、駒は指し手の意図に従属する。そのような「無駄なく使役される」という駒の性質を用いて、企業の社員の働かせ方を具体化する。修飾節であり発話者の判断は潜在化しており、効率的に使役されるものとして多くの人に共有される将棋の駒のイメージを用いることで、聞き手への説明として理解されることを見込んだ表現となる。述語句として使用した場合は、ディテールよりも対象の全体的な様相に対する発話者の判断をイメージによって具体的に提示する。

- (32) わざとむずかしい顔を拵えた俊造が、おどけた調子で答えた。あたかも、小さな子をあやす親のようだった。

（サンプル ID : PB59_00008 山本一力『損料屋喜八郎始末控え』）

(32) は、「俊道」の言動の様子について「小さな子をあやす親」と評したものである。俊道の言動のディテールではなく全体的な様相を発話者がどのように見ているかを、子をあやす親の表情や声の調子といったイメージを提示することで表現する。

6. 「さながら」と直喩

本節は「さながら」によって導かれる直喩を論じる。「さながら」は「あたかも」と同様に比喩を導く副詞の典型と見なされながらも、比喩における働きや「さながら」型直喩の表現価値は分析されずにいる。本節では前節と同様に、まず「さながら」の意味と比喩の関係を確認する。そして、「さながら」を用いた直喩がどのような表現価値を持ち、どのように運用されているかを見る。

6.1. 「さながら」の意味と比喩

「さながら」は、「さながら A は B (のよう) だ」のようなモダリティ副詞、「A は B さながらだ」のような助動詞、「さながらに A」のような様態副詞として用いられる。これらの構文において、「さながら」は A と B の連続性を表す。連続性とは A と B の間に断絶がないことを言う。

- (33) 然るに本隨筆が、少壯期における漢學學習の足跡をさながらに示す漢籍の抄録や、荻生徂徠をはじめとする儒者の言説の抜書きを数多く含んでいることは、ほとんどが和文、もしくはわが國で書かれた記録體の變體漢文系統の資料に基づいて執筆された『玉勝間』には、決して見ることのできない一特色である。

(サンプル ID : LBe1_00022 大野晋・大久保正編集校訂『本居宣長全集第 13 巻』)

(33) は「さながらに」の形式で、漢籍の抄録が本居宣長の漢学の学習の明確な痕跡であることを示している。漢籍の抄録という事物の存在から宣長が漢学を学んでいたということが裏付けられることを示すものであり、「さながらに」によって事物と事実の間にある連続性があることを示す。(34) (35) (36) は「A さながら」の形式で用いられ、助動詞相当として働く例である。

- (34) 碑文（「安寿恋しや、ほうやれほ」）は、森鷗外の二女、小堀杏奴の揮ごうによるものである。碑のかたわらには、安寿の母のうらみの涙が、日に三度毒となって流れるという中の川のせせらぎが、昔さながらにさらさら流れている。

(サンプル ID : LBf3_00083 浜口一夫『語り継ぐふるさとの民話』)

- (35) 「死んでたまるか、こんなにくさに…」呪詛さながらなつぶやきが、間断なく口からこぼれ落ちる。

(サンプル ID : LBo9_00075 杉本苑子『風の群像』)

- (36) 減量中のとんかつ屋さん、東京ディズニーランドさながらのワクワク感があ

助動詞として用いた「A は B さながら」は対象 A と何らかの点で連続性を持つ事物・事柄として B を提示する。(34) は森鴎外ゆかりの地に流れている川に対して、「山椒大夫」において娘安寿を失った母の涙が流れていた過去と変ることがなく現在も水が流れているという過去と現在との連続性を感じている。それを「昔さながら」と表現している。(35) は恨みなどの感情が込められた呟きについて「呪詛さながら」と表現する。当該の呟きに恨みつらみが込められており、その点で「呪詛」と連続性を持つ。(36) は減量中にとんかつ屋に食べに行くワクワク感を東京ディズニーランドへ行くワクワク感によって喩える。とんかつ屋と東京ディズニーランドは施設としての見た目や目的などはまったく異なる場であるが、ワクワク感という点において連続性を持つ。このように「さながら」を助動詞として用いた場合、どの点で連続性を持つかを被修飾部に明示する表現も多い。

- (37) 警官が三名、ケージの前に立ちはだかつていた。手にした拳銃の撃鉄がガチガチと音を立てて引き起こされる。おれは発射されたロケットさながらの勢いで飛び出した。

(サンプル ID : LBa9_00100 平井和正『ウルフガイ魔界天使』)

- (38) 出遭い頭に射殺される危険を避けるとなれば、追われる狐さながら狡猾を絞って逃げまわるしかないのである。

(サンプル ID : LBa9_00100 平井和正『ウルフガイ魔界天使』)

(37) は警官から逃げる人物を「発射されたロケットさながら」と喩える。ここでロケットは形状や宇宙空間への上昇などの特徴ではなく、勢いの強さを表すために用いられている。つまり、「勢い」という点において当該人物とロケットは連続性を持つものであり、喩えの根拠となる「勢い」が連体節の被修飾部として明示されている。(38) も同じテキストからの例であり、闇雲に逃げるのではなくルートを考えながら逃げている様子を「追われる狐さながら」と喩える。この表現もまた狐の見た目や鳴き声などではなく、狡猾であるという社会・文化的に形成されたイメージを用いている。「狡猾」という点で当該人物と狐は連続的であり、そのような喩えの根拠に相当する「狡猾を絞って」が明示されている。

モダリティ副詞として用いた「さながら A は B (のよう) だ」は、後続する情報と発話者の実感に連続性があるという心的態度を表す。

- (39) 「南朝鮮での革命を利用し統一を勝ちとる」(全国工業部門熱誠者大会演説、七十五年三月五日)そして同年四月十八日訪中して北京での「南半部武力解放辞さず」の強硬演説である。これらの発言が、七. 四南北共同声明でいったんは南北対話に応じたあとのものであり、さらにさながらこれらの発言を裏付けるように、南進用の地下トンネルが、第一号七十四年十一月二十五日、第二号七十五年三月十九日、第三号七十八年十月二十七日と、韓国・国連軍の手で発見された事実は、改めて韓国側の注目をひくところだった。

(サンプル ID : LBa3_00038 林建彦『北朝鮮と南朝鮮』)

- (40) (…)フェアバンクの論文指導は、まるで学生たちの博士論文がみずからの業績であるかのように、偏執狂的でさえあった。次々に学生たちに草稿を提出させ、筆を入れて返却し、書きなおさせるという、複数同時進行の流れ作業的なやり方は、さながらフェアバンク博士論文製造工場だった。

(サンプル ID : LBp2_00034 平野健一郎『20 世紀の歴史家たち』)

- (41) 見晴らし台まで歩くのに、かなりの時間を要した。昼間ならばどうということはない距離だが、先を見通せぬ夜の庭は、さながら迷宮のように深い奥行きをかいまみせる。

(サンプル ID : LBd9_00185 荒俣宏『海霸王』)

- (42) 大砲の音が止むのを待っていたように広小路いっぱいにはひろがった官兵が、小銃をかまえ、槍刀を閃めかして、どっと攻めてきた。硝煙が地を這い、雨脚に霞むかなたから一せいに進んでくるさまは、さながら、長雨に湧いた地虫の集団のようでもあった。

(サンプル ID : LBf9_00150 早乙女貢『幕末愚連隊』)

(39) は、北朝鮮の発言と地下トンネルの発見の関係について述べたものである。韓国への侵攻を示唆する北朝鮮側の発言を裏付けるものとして「南進用の地下トンネル」の発見が位置付けられる。つまり、地下トンネルの発見がそのまま発言の裏付けに繋がると捉えていることを表す。対象 A と異なる事態 B が切れ目なく繋がると認めることで比況用法を獲得する。比喩用法は (40) (41) (42) である。(40) はフェアバンクの論文指導を評した隠喩文を後続したものである。「複数同時進行の流れ作業的なやり方は」と題目を提示し、「フェアバンク博士論文製造工場だった」と叙述する。工場のイメージを提示することで、発話者の実感として当該の研究室の論文指導が人と人とのやり取りではなく、機械的であることを表している。(41) は夜に見通しが利かない庭を「迷宮」と表現する直喩を後続する。「目的地に着くことが困難である」点で「夜の庭」と「迷宮」が連続性を持つ。(42) は官兵が突撃してくる様を「長雨に湧いた地虫の集団」と表す直喩を後続する。虫が蟻集するイメージは集団性や蔑みの感情を喚起する。そして、それは官兵の集団性と彼らへの蔑みと連続性を持つ。このようにして、庭を歩いた経験や見ている情景への実感を表すために「さながら」型直喩が用いられていることが分かる

以上の分析から、「さながら」は二つの事物・事柄・状況に連続性が存在することを表す形式であり、比喩に前置される場合、発話者の実感とイメージに連続性があることを表す。従来、極めて似通った形式として取り扱われてきた「あたかも」と「さながら」は、対象をイメージによって具体的に言い換えることで聞き手への説明に用いる「あたかも」型直喩と連続性を持つイメージによって発話者の実感を表現する「さながら」型直喩として区別できる。

6.2. 「さながら」の導く直喩

以上のように「さながら」は連続性を表す文法形式であり、「さながら」型直喩は発話者の実感とイメージに連続性があることを示す。本項はそのような性質を持った「さながら」を用いた直喩の表現価値について、運用傾向の確認とその結果の解釈によって

論じる。

6.2.1. 「さながら」型直喩の出現分布

本項は、「さながら」型直喩のテキストジャンルにおける出現分布を確認する。【表 8】は BCCWJ から収集した「さながら」型直喩のテキストジャンルごとの出現頻度を 2 章【表 1】の「ようだ」型直喩と同様の方法により算出したものである。なお、【表 8】に掲載している値は、100 万短単位あたりの出現頻度として調整しており、その降順に並べている。

【表 8】：「さながら」型直喩の出現分布

ジャンル	比喩数	全短単位	出現頻度	ジャンル	比喩数	全短単位数	出現頻度
芸術・美術	11	4,541,047	2.4	技術工学	0	4,666,656	0
総記	3	1,650,711	1.8	分類なし	0	2,722,904	0
文学	34	21,511,261	1.6	韻文	0	233,429	0
歴史	8	6,585,047	1.2	教科書	0	1,120,114	0
産業	3	2,541,741	1.2	Yahoo!知恵袋	0	6,136,420	0
言語	1	1,159,332	0.9	広報誌	0	4,620,337	0
自然科学	4	5,177,871	0.8	国会会議録	0	5,596,623	0
哲学	2	3,477,809	0.6	白書	0	5,640,348	0
ベストセラー	2	4,435,033	0.5	法律	0	1,206,077	0
Yahoo!ブログ	6	12,984,635	0.5	合計／平均	80	111,284,967	0.6
社会科学	6	15,277,572	0.4				

中央値は 0.5 である。中央値を下回る値のテキストジャンルは「法律」(0)、「白書」(0)、「国会会議録」(0)、「広報誌」(0)、「Yahoo!知恵袋」(0)、「教科書」(0)、「韻文」(0)、「分類なし」(0)、「技術工学」(0)、「社会科学」(0.4) である。挙げている 20 のテキストジャンルのうち、半数に近い 9 つのジャンルで出現が確認されない。用例の母数が少ないこともあるが、出現するテキストと出現しないテキストがはっきりと分かれていることが分かる。「韻文」に出現しないのは、詩自体が詩人の実感に基づいた物事の捉え方や切り取り方を提示するものであり、わざわざ自身の実感とイメージの連続性を明示的に示す必要がないのだと思われる。また、「白書」「法律」「教科書」「広報誌」「国会会議録」への出現頻度が少ないことは他の表現形式の直喩と同様である。

中央値を上回るテキストは、「ベストセラー」(0.5)、「Yahoo!ブログ」(0.5)、「哲学」(0.6)、「自然科学」(0.8)、「言語」(0.9)、「産業」(1.2)、「歴史」(1.2)、「文学」(1.6)、「総記」(1.8)、「芸術・美術」(2.4) である。「あたかも」型直喩と同様に文学テキストへの出現頻度が第一位とならず、かつ韻文にも用いられない。「さながら」型直喩は、文学よりも「芸術・美術」に含まれるエッセイのようなテキストに出現しやすい。「あたかも」型直喩が論説的なテキストに出現しやすいことと合わせて、これらの直喩表現は文学以外のテキストに出現しやすいという傾向が認められる。一般に直喩表現は文学作品におけるレトリックとして見なされているが、それは「ようだ」型直喩や「まるで」型直喩のような典型例における傾向であり、表現形式によっては文学テキスト以外にも好んで用いられることが分かる。出現頻度第一位の「芸術・美術」ジャンルにおいては、芸術作品そのものを直喩の対象とする例が少なく、(43) (44) のようなエッセイへの出

現が多い。出現頻度第二位の「総記」への出現も(45)のようなビジネス書においてである。

- (43) 何よりも蓮華温泉というベースがあり、温泉につかったのスキー三昧はさながらスキーツアラーの天国のようだ。

(サンプル ID : LBp7_00044 菊池哲男『スキーツアー』)

- (44) 余談になるが、私は平成元年四月九日、枝垂桜が満開の平安神宮において復活済み。それは、の、枕詞に見るような建物の色彩にマッチし、さながら奈良時代に戻ったようなひとときであった。

(サンプル ID : PB57_00047 原笙子『やっぱり「不良」でした』)

- (45) 道中は、ひたすら趣味はなんだ、普段はなにをして過ごしているといった内容を聞いておりにそのさまは、さながら街頭アンケートのようであった。

(サンプル ID : PB50_00052 三木崇行『孫子に学ぶプロジェクト管理』)

(43) は「蓮華温泉」を「スキーツアラーの天国」とし、(44) は「平安神宮でのひととき」を「奈良時代に戻った」と表現している。このように自身の体験をイメージによって言い換える表現が多く見られる。(45) の総記ジャンルにおける例は、ビジネス書中に用いられたものであり、書き手が見聞きした対人接触場面を「街頭アンケート」と表している。

このように「さながら」型直喩は、書き手自身にとって当該対象がどのように見えるか、感じられるかを表すために用いられている。「あたかも」型直喩が対象イメージによって説明するために用いられているのに対し、「さながら」型直喩は書き手の実感をイメージによって表すという違いがある。ゆえに、「あたかも」型直喩は論説的なテキストに出現しやすくなり、「さながら」型直喩はエッセイ的なテキストに出現しやすくなる。

6.2.2. 実感を表す直喩

「さながら」型直喩は、書き手の経験において感じたこと、思ったことを書き連ねるエッセイ的なテキストへの出現が多い。読み手への説明よりも書き手がどのように捉えたかを具体物によって示す傾向にあると言える。このような傾向は用いるイメージにも反映される。「あたかも」型直喩は説明のために用いるという性質上、長い喩辞が出現しやすい傾向にあったが、「さながら」は次の【表 9】のようになる。喩辞の長さは文節数である。

【表 9】：「さながら」型直喩の喩辞の文節数

文節数	用例数	割合(%)
1	27	33.0
2	24	29.3
3	14	17.1
4	6	7.3
5	6	7.3
6	2	2.4
7	1	1.2
8	1	1.2
9	1	1.2
合計	82	100

1 文節の喩辞が 33.0%であり、2 文節の喩辞が 29.3%である。両者の合計が 62.3%となる。最大値は 9 文節であり、かつ 6 文節からは割合が大きく下がる。「まるで」型直喩や「あたかも」型直喩に比べると長大な喩辞の出現は確認されない。このような喩辞の文節数の傾向は、1・2 文節の短い喩辞を主としつつ、3～5 文節の中程度の長さの喩辞が少なからず出現するとまとめられる。「あたかも」型直喩のように聞き手の理解が重要となる説明として長い喩辞を用いるのではなく、書き手に取ってどのように捉えられたかを示すために端的な短い喩辞や状況説明を施した中程度の長さの喩辞を用いるのだと解される。

- (46) 式部にとって宣孝は、さながら、紫の上や玉鬘における源氏のように、父とも兄とも夫とも、その三つを兼ねたような巨きな存在だったかもしれない。

(サンプル ID : PB59_00424 『田辺聖子全集』)

(46) は紫式部にとって夫の藤原宣孝がどのような存在であったかを述べる。この用例は「紫の上や玉鬘における源氏のように」と「父とも兄とも夫とも、その三つを兼ねたような」という二つの直喩が重ねられている。後者の「父・兄・夫」の比喩は「宣孝は巨きな存在である」ことを表し、前者の「紫の上、玉鬘にとっての源氏」の比喩はその関係性を『源氏物語』の作中人物の関係を引き合いに出すことで、具体化する。「源氏のように巨きな存在」では、当該比喩表現の意図した具体的な関係性を想起することが難しいため、「父・兄・夫」という関係に加え、それを体現する具体的な人物を指定する。つまり、書き手である田辺聖子が紫式部と宣孝の関係をどのように捉えていたかを具体化している。そのために関係性の点で連続性があり、かつ紫式部の作品であり当該テキストの読者にとってなじみ深いであろう『源氏物語』の人物を用いている。

6.2.3. 「さながら」型直喩の構文

以上のように、「さながら」型直喩は書き手の実感による物事の捉え方をそれと何らかの点で連続性のあるイメージによって具体化する表現である。このような「さながら」型直喩は次の【表 10】のような構文タイプによって運用される。

【表 10】：「さながら」型直喩の構文タイプ

構文	活用形	用例数	割合(%)	構文の割合(%)
修飾	連用形（ように）	31	37.7	54.8
	連体形（ような）	14	17.1	
述語	終止（ようだ）	22	26.8	40.3
	ように＋形式用言（ようにする）	5	6.1	
	ような＋形式辞（ようなもの）	3	3.7	
	語幹（よう。）	3	3.7	
中止	中止（ように）	4	4.9	4.9
合計		82	100	100

連用修飾用法が 37.7%、連体修飾用法が 17.1%であり、修飾用法の合計が 54.8%となる。それに対して、述語用法の合計は 40.3%である。修飾用法と述語用法の割合は、修飾用法が多少優勢でありつつも拮抗的であると評価される。修飾用法の割合が多い他の表現形式の直喩とは異質の傾向にある。連用修飾用法としては次のように用いられる。

- (47) ときどき、懷疑論と理性とは、さながらカプチーノコーヒーにおけるコーヒートとミルクのように一緒に混じり合っていることさえある。

(サンプル ID : PB51_00048 ルチャーノ・デ・クレシェンツォ
(著)/Piazza,Giovanni・谷口伊兵衛(訳)『物語近代哲学史』)

懷疑論と理性が混じり合うことをコーヒーとミルクの混ざり合いによって表す。懷疑論と理性という抽象的概念の関係性について、それらが混ざり合うという著者の見解を「混ざり合う」という点で連続性のあるイメージによって具体化している。

また、終止形の割合が 26.8%と連体修飾の 17.1%を上回っており、他の表現形式の直喩に比べると述語としての使用の多いことが特徴的である。発話者の実感に基づくという性質上、自身の判断として提示する述語句としての運用と親和性がある。

- (48) レーニン廟の中は撮影禁止、物々しい雰囲気で行を作る人々の顔まで神妙な面持ちである。ロシア革命の人レーニンは、さながらロウ人形のようにであった。

(サンプル ID : PB37_00117 南久美子『Never too late』)

(48) は、防腐処理を施して廟に安置されているレーニンの遺体の見た目を「ロウ人形」と評している。レーニンの遺体は、防腐処理を施したことで艶が保持されつつも、血は流れていないため赤みがさしていない。そのような様子に対して発話者が抱いた実感を、人の見た目をしつつも人間味が感じられない点で連続的な「ロウ人形」によって表現する。このように、発話者がレーニンの遺体に対面した実感に基づいた評価を表現する。以上のように、「さながら」型直喩は発話者の実感としてどのように物事を捉えたかを連続性のあるイメージによって具体化する。つまり、発話者の実感をイメージするという表現価値を持つ。

7. おわりに

本章は直喩の文頭部である副詞の働きを論じ、さらに個別の副詞が付加されることで生じる直喩のヴァリエーションである「まるで」型直喩、「あたかも」型直喩、「さながら」型直喩の表現価値を運用傾向とその解釈から論じた。

「まるで」は状態の完全性を表す程度副詞であり、直喩においては対象へのイメージの適用に極めて高い確からしさがあることを表す。このような直喩は、文学テキストに主に用いられ、発話者が最適としたイメージを提示するために用いられる。「あたかも」は対象の概念的性質や非言語的情報を具体的に言い換える文であることを表す。直喩においては、対象を具体的なイメージによって言い換える表現となる。そして、そのような性質を持った直喩は、「哲学」や「芸術・美術」のような概念・論理や非言語的情報を扱うテキストに主に用いられ、対象を聞き手に説明するために用いられる。「さながら」は二つの事物・事柄の間に連続性を認めることを表す。直喩においては、書き手の実感や実感に基づいた捉え方とイメージが連続性を持つことを表す。書き手の実感や捉え方を連続的なイメージによって表すという性質によって、エッセイなどの書き手の体験とその感想を綴るテキストに用いられやすい。

以上のように直喩における副詞は、後続の比喩文に対する発話者の態度を明示し、どのような情報の質であるかをコントロールする。そして、情報の質に応じて、それぞれの直喩表現は運用される場面や形式が異なる。このように表現の意図や目的に応じて、叙述態度の異なる直喩表現が使い分けられているのである。

第4章 構文成分としての直喩

1. はじめに

ここまで見たように直喩は助動詞によってイメージへと確からしさを付加し、副詞によって表現の目的に応じた叙述態度を作る。そして、確からしさのあり方や叙述態度によって表現のヴァリエーションを持ち、それぞれ意図や目的によって使い分けられる。しかし、ヴァリエーションを持ちつつも、それらは「直喩」としてまとまりを持つ。つまり、直喩として共通して有する働きの存在が予測される。本章は、直喩の典型例である「ようだ」型直喩をモデルとして、直喩が構文の中で持つ働きを論じることで、直喩の働きのプロトタイプを明らかにする。

直喩は文の成分として、主に様態・属性、量といった事物・事柄のあり様に関わる表現から程度や評価といった対象への主体の心理的な関わりを表す表現として働く。このような範疇を表すというのは、副詞や形容詞、接辞が形成する連体節・副詞節などと同様である。これらの類似の成分との比較によって、直喩以外の文の成分にはない独自の働きが明らかになる。

2. 直喩と副詞・形容詞

これまで直喩の働きは、「記述的直喩」と「強意的直喩」という二分のもとに捉えられてきた。

- (1) 綿菓子のようにふわふわした雲
- (2) 機械のように動く手
- (3) 山のように多い書類
- (4) 火のように熱いスープ
- (5) 夢のように素晴らしい時間

(1) から (5) はいずれも「A のように B・C」の構文を取り、直喩「A のように」が B を連用修飾した修飾句「A のように B」が被修飾名詞 C を規定する構造を持つ。「記述的直喩」は (1) (2) のように形状や行為の様相などの物事の外的様相に関わる表現であり、「その対象の性質、形状、様態を特別の誇張をとまわずにたとえる」(山梨 1988 : p.181) とされる。「強意的直喩」は (3) (4) (5) のように量や程度、評価といった概念的な特性に関わる表現であり、「問題の対象の性質、形状、様態の度合いを修辭的に特別に強める」(ibid : p.182) とされる。しかし、(1) ~ (5) はそれぞれ直喩が付与している意味の範疇が異なっている。(1) は雲の形状を表し、(2) は手の動かし方の様相を表す。(3) は事物の量を表し、(4) は熱さの程度が甚だしいことを表し、(5) は「時間」に対する肯定的な評価を表す。記述的／強意的という二分はこのような細かい違いを捨象してしまう。そこで、まず、直喩の構文・意味の特徴を整理する必要がある。

2.1. 形式

本章が対象とする直喩の典型「ようだ」型直喩は、「ようだ」の持つ活用形に応じて、「XのようにY」「XのようなY」という修飾形式としての運用、もしくは「XはYのようだ」という述語句としての運用がなされる。喩える事物・事柄を表す喩辞、喩えられる事物・事柄を表す被喩辞、喩えの根拠となる属性⁵⁵を「ようだ」が形成する構文によって表出することで形成される。喩辞と被喩辞、「ようだ」は必須要素であり、根拠は任意の要素である。これらの要素の選択によって次のような表現形式を持つ。

連用修飾成分

- ①：BはAのようにX（肌は雪のように白い）
- ②：AのようにX・B（雪のように白い肌）
- ③：BはAのようで（肌は雪のようで）

連体修飾成分

- ①：AのようなX・B（雪のような白い肌）
- ②：AのようなB（雪のような肌）

述語句

- ①：BはAのようだ（肌は雪のようだ）
- ②：BはX・Aのようだ（肌は白い雪のようだ）
- ③：BはAのようなものだ（肌は雪のようなものだ）
- ④：BはAのように見える（肌は雪のように見える）
- ⑤：BはAのよう（肌は雪のよう）

2章【表2】に見たように「ようだ」型直喩は修飾成分、特に連用修飾成分として用いられることが多い。修飾成分として好んで用いられ、述語句としての使用が少ないという点で、副詞や形容詞などと近似することが分かる。

- (6) 雪のような肌
- (7) 白い肌
- (8) 氷のように冷たい
- (9) とても冷たい

(6) は直喩が被修飾部「肌」に対して美しさや白さを付加する。(7) は被修飾部「肌」に対して形容詞「白い」が色合いを規定する。両者ともに被修飾部「肌」のあり様を規定する成分として働く。(8) は直喩が被修飾部「冷たい」の表す状態の程度を限定する。(9) も同じく副詞「とても」が冷たさの状態の程度を限定する。両者ともに状態の程度を限定する成分として働く。被修飾部に対するあり様や状態程度の限定を行う点で(5)(6)の直喩と(8)(9)の副詞・形容詞は共通する。

⁵⁵ 当該の要素は安井（2007）において「比較の第三項」と呼ばれるように、喩辞と被喩辞を結び付ける意図を解釈するための根拠として働く。

2.2. 意味

直喩の構文上の働きは、このような類似した成分との比較から導き出すことができる
と予測される。副詞や形容詞の意味の類型を用いることができる。副詞は命題外で機能
し、文に対する心的態度を表明するモダリティ副詞と命題内で作用して後続する用言に
対して結果状態や様態、量、程度、評価、頻度、時間を付加する命題内の副詞に分かれ
る⁵⁶。形容詞は物の性質を表す属性形容詞、物事に対する発話者の価値判断を表す評価
形容詞、発話者の心理状態や体性感覚を表す感情形容詞、感覚形容詞に分かれる。これ
らの語彙項目は、事柄的意味を表すものから発話者の心理的情報を表すものまで分かれ
る。直喩はこのような副詞・形容詞の意味分類に対応する。次の【表 1】はそのような
副詞・形容詞に相当する直喩を一覧したものである。

【表 1】：副詞・形容詞と直喩

用例 番号	意味	用例	相当する直喩例
10	様態副詞	ゆっくり歩く	亀のように歩く
11	結果副詞	服がどろどろに汚れた	服がペンキを撒き散らしたように汚れた
12	量副詞	たくさん食べた	山のように食べた
13	程度副詞	とても冷たい	氷のように冷たい
14	モダリティ副詞	きっと成功する	イチローがヒットを打つように、成功する
15	頻度副詞	しばしば訪れる	寄せては繰り返す波のように店を訪れる
16	時間副詞	明日旅立つ	×
17	属性形容詞	赤い夕焼け	血のような夕焼け
18	評価形容詞	痛ましい事件	悪夢のような事件
19	感情形容詞	悲しい心	母を失った子のような僕の心
20	感覚形容詞	お腹が痛い	お腹が錐で穴を開けられたようだ

(16) のような時間副詞に相当する直喩例は存在しないか極めて稀であると推測され
る。(10) では「ゆっくり」が歩く速度の遅さという様態を限定するのと同様に「亀の
ように」は歩行速度を表す。(11) では「どろどろに」は汚れた結果状態を示しており、
「ペンキを撒き散らしたように」も汚れた結果状態を表示する。(12) は食べ終えた食
事の物理的量の多さを「たくさん」が表示し、「山のように」も同様に物理量の多さを
表示する。(13) は「とても」が冷たさの程度を限定することと同様に「氷」も冷たさ
の程度を限定する。(14) は「きっと」が成功することの確実性を高く見積もっている
という発話者の心的態度を表すが、「イチローがヒットを打つように」も確実性の見積
もりを伝える点で同様である。(15) は訪れる様態がどうかを表示すると同時に、
その頻度が表示され、頻度副詞「しばしば」に近い機能を持つ。(17) は「赤い」が夕
焼けの色彩を表示するのと同様に、「血のような」も色彩を表示する。(18) は事件に対
する発話者の価値評価を「痛ましい」によって表示するが、「悪夢のような」も同様に
価値評価を提示する。(19) は「悲しい」が心理的状态を表すのと同様に「母を失った
子のような」も心理的な状態を表す。(20) は感覚形容詞「痛い」が腹部の感覚状態を
表すのと同様に、「錐で穴を開けられたようだ」が腹部に痛覚が生じていることを表す。
このように、副詞や形容詞が被修飾部に付加する意味は、直喩によっても付加すること
が可能である。

⁵⁶ 仁田 (2002) を参照。

このように構文における直喩の働きと副詞・形容詞の意味分類は概ね一致する。これらは様態、結果、量、頻度、属性、感情、感覚のような事物のあり様に関わる範疇から程度、モダリティ、評価のような対象への発話者の心理的な関わりを表す範疇に分かれる。つまり、事柄的意味から心的態度までをイメージによって表すことができる。直喩は主には様態や属性を表す成分として用いられるが、程度やモダリティとしても用いることもある。そのような幅広い運用の範疇に共通するのはイメージの使用である。イメージを用いることでどのように様態・属性を表すのかを論じる。そして、より抽象的な範疇である心理的な情報をどのように表現するかを程度表現をモデルとして4節で論じる。

3. 様態・属性と直喩

本節では事物・事柄の様態や属性を表すために用いた直喩を論じる。事物・事柄のあり様を表す点では、様態副詞・属性形容詞などと類似する。【表 1】に見たように直喩は副詞や形容詞と類似した成分である。これらと区別されるのはイメージの有無である。そして、このイメージは1章に見たように「ようだ」などの文末部によって根拠のある確からしさを付与されたものである。そのような確度と根拠を表示することで発話者だけでなく、聞き手にも理解されるものとなる。つまり、発話者の心理内の知覚像であるイメージが聞き手の心内にも喚起され、お互いに共有されたイメージとするのである。このようなイメージの共有が直喩の働きのプロトタイプであり、それを様態・属性や程度へと適用する。本節では、以下、共有的なイメージを用いた様態・属性の表現を見る。

3.1. 複合的な情報の伝達

修飾が主であり、被修飾部のあり様を具体化することは属性形容詞や様態副詞との近似を意味する。それらの非比喩的な修飾成分と直喩の違いは、形容詞・副詞が対象の特に目立つ属性・性質を卓立して焦点化することに対し、直喩はイメージを喩辞に用いるという性質上、喩辞に用いられた事物・事柄が有する形象性や評価・知識といった複合的な情報が用いられ、単一の属性ではなく複合的な情報が伝達される点にある。

- (21) にゃー、と鳴き声がする。足下に白い猫がいた。野良猫だ。ミィとかタマとか、みんなが適当に呼んでいる。

(サンプル ID : LBp9_00081 あすか正太『恋する国家権力』)

- (22) 初めの内、僕らの車はアグノーの町へ向かう県道をまっすぐ走っていた。

(サンプル ID : LBI9_00107 二階堂黎人『人狼城の恐怖』)

- (23) 綺麗に真っ直ぐ走っていたし、タイムもジリジリと前進！7秒間近です！

(サンプル ID : OY15_23296 Yahoo!ブログ)

(21) の「白い」、(22) (23) の「まっすぐ」のように形容詞や副詞は、事態・事物の中から特に目立つ属性・性質である<白さ>や<直線性>を卓立して、対象のあり様を規定する。しかし、特定の属性・性質を卓立するという性質上、対象の持つその他の属性・性質は伝わらない。ゆえに、それ以上の情報を付加する場合は、(23) の「綺麗

に」のように修飾成分を加える。これによって、＜直線性＞だけでなく＜乱れの無さ＞まで表現される。このように形容詞・副詞は単一の属性を付加する。しかし、単一の属性を文の中で累加していくことには限界がある。一方で、様態型直喩は副詞や形容詞のような単一の属性の卓立では表現することのできない、事象の複雑なあり様をイメージによって近似的に表現する。

- (24) レントゲン室には赤いランプがついていました。「胸を開いてこの板を抱くようにして、息をすって……。」カチッとスイッチの音がし、ランプが消えて真暗になりました。変圧器がこおろぎのように鳴きはじめました。

(安部公房「S・カルマ氏の犯罪」)

- (25) キジも雷には激しい動揺を見せる。わたしたちの村の付近にはキジがたくさんいるので、夜半、空気の振動に雷雨の気配をまっ先に感じとって鋭く鳴く声を聞くこともある。

(サンプル ID : LBi6_00022 チャップマン・ピンチャー(著)/中村風子(訳)『犬のデイドより人間の皆様へ』)

当該の文脈における「変圧器」の音を表したものが「こおろぎ」である。(25) のような形容詞による表現では同じように「鳴く」を修飾していても、(24) におけるこおろぎが鳴く音色と比べると「鋭く」では情報量が少なく、当該文脈における変圧器の音を十全に表現することはできない。

このように、直喩は発話者と聞き手で共有されるイメージを用いることで、被修飾部へと複合的な属性を付加する。複合的な属性を付加できるという性質を利用して事物の説明のために用いられることがあり、2 章【表 1】に見たように「教科書」や「広報誌」のような通常、レトリックを使用しないテキストにも用いられることがある。

- (26) その上に紙をあてて、南アメリカ大陸とアフリカ大陸の形を写しとる。2つの大陸を、切りぬいてから、両大陸がジグソーパズルのようになるべくうまく合うようにくっつけてみよう。また、両大陸の山脈の位置をかきこんでみよう。

(サンプル ID : OT23_00021 『新編理科総合B』)

- (27) 骨粗しょう症とは、骨が軽石のようにすき間だらけになり、もろく折れやすくなる病気です。骨の老化現象ですが、予防や治療が可能です。

(サンプル ID : OP04_00002 『広報おとふけ 2008 年 06 号』)

(26) はジグソーパズルのピースが隙間なく合わさるという性質を利用することで、アメリカ大陸とアフリカ大陸が丁度合わさる形であることを想起しやすくしている。それによって、知識として習得しやすい説明文を形作っている。(27) は骨粗鬆症に罹った骨の形状を軽石によって表現する。身体内にある骨は通常、その形状を視認することはできない。ゆえに、軽石の見た目を利用することで具体的に骨の状態を想起させる。そうすることで、骨粗鬆症に罹った骨の状態を読み手が理解しやすいようにし、この病気への危機意識を喚起する。

3.2. 複合的情報のメカニズム

「ようだ」型直喩は、連用修飾と連体修飾で主に用いられるが、両者は喩辞の係り先が異なる。例えば、「雪のように白い肌」のような連用修飾構造「AのようにB・C」では「雪のように」が根拠となる属性「B（白い）」に係り、「AのようにB」が「C（肌）」を修飾する構造となる。一方で、「雪のような白い肌」のような連体修飾構造「AのようなB・C」であれば属性表現「B（白い）」と並列的に被喩辞「C（肌）」に係るか、属性表現＋被喩辞を一つの単位とした「BC」に係る。

- (28) [[Aのように[B]] C]
[[燃えるように[赤い]] 雲]
(29) [Aのような[B [C]]]
[刷毛で引いたような[細い[雲]]]
(30) [Aのような[BC]]
[血も凍るような[恐ろしい話]]

「AのようにB・C」は[[Aのように[B]] C]の修飾構造を持ち、「Aのように」は「B」を修飾する。それによってBの属性が具体化された「AのようにB」の句が形成され、それが「C」を修飾することで詳細な属性・状態を付与する。このような修飾関係を用いて被喩辞「C」が具体的にいかなるあり様であるかを表現するのが「AのようにB・C」における様態用法の仕組みである。「AのようなB・C」形式は「AのようにB・C」と喩辞と根拠の係り受けが異なる⁵⁷。「AのようなB・C」は修飾句「Aのような」は「B」に係らず、「B」と並列して「C」を修飾する。もしくは、「B」を包摂した名詞句「BC」に係る。連用修飾構造では「B」の属性・状態のディテールを表すが、連体修飾構造では体言「C」との関わりから事物そのものの様相を表現するために用いられる。以下、(28)のような連用修飾として用いた直喩と(29)(30)のように連体修飾として用いた直喩を個別に見る。

3.2.1. 連用修飾構造

「AのようにB」という連用修飾構造において、「Aのように」は「B」が表す属性のディテールを表す。それによって具体化された属性表現「AのようにB」が形成される。それを(31)のように被修飾名詞への修飾として用いるか、(32)のように題目への叙述として用いることで、表現対象の様態を具体的に表す。

- (31) もっと詳しく部屋の様子をたしかめようと体を動かしかけると、雪のように積もったほこりがぱっと舞上り、ひどくむせこんでしまいました。
(安部公房「S・カルマ氏の犯罪」)
(32) 溶岩は、粘りが少ないため、噴火すると噴水のようにふきあがる。

⁵⁷このような係り受けの違いを反映して「AのようなB」の直喩は題目への叙述に使用できない。

*肌は雪のような白い

「雪のような白い肌」は一見「雪のように白い肌」と同等の直喩表現と見えるが、「肌」の様相として「雪」を用いる前者と「白い」のディテールとして「雪」を用いる後方で区別される。

(31) は、層をなして積もった埃を表現する。喩辞「雪」が積もり具合を具体化する。「積もる」によって雪は<降雪>や<白さ><冷たさ>ではなく積もった状態にあることが取り立てられる。「雪のように」が「積もった」を連用修飾することで形成される句「雪のように積もった」が被修飾名詞「ほこり」を修飾することでほこりの具体的なあり様を表現する。(32) は、三原山の火山の性質を述べたものである。粘性が低く、噴火時に高く噴き上がることを流体が高く噴き上がる点で共通性を持つ噴水のイメージを用いることで表現する。「噴水のように」が「ふきあがる」を連用修飾して形成される句「噴水のようにふきあがる」を題目である「溶岩は」に対する叙述として用いている。

このように連用修飾構造の直喩では、被修飾部の「B」が表す属性や状態のディテールを喩辞によって指定する。それによって、ディテールが加えられた属性・状態を表す句「AのようにB」が形成され、その句によって体言を修飾・叙述することで表現対象の具体的な様相を表す。

3.2.2. 連体修飾構造

連体修飾構造の直喩は、「雪のような白い肌」のように喩辞と被喩辞の間に属性表現が挿入される「AのようなB・C」タイプと「雪のような肌」のように体言に直接係る「AのようなB」タイプがある。

「AのようなB・C」タイプでは、喩辞「A」が「B」と並列して「C」に対する修飾を行うか「B」を包摂した名詞句「BC」に係るかで分かれる。

- (33) 空には刷毛で引いたような細い雲が幾筋か流れ、見渡す限りのまったくの青に満ちていた。

(村上春樹『1973年のピンボール』)

- (34) そのロウソク芯が急にのび、大きな炎になり、部屋をたちまち赤く照らした。これはロウソクの光ではない。血のような赤い炎がわなないていた。「うちゃ。…マユミや」扉がしゃべっている感じがした。妹の真弓は三年前に死んでいる。

(サンプル ID : PB19_00149 吉永達彦『古川』)

(33) は、空に浮んでいる雲の形状を説明するために「刷毛で引いたような」と「細い」を並列的に用いた連体修飾構造である。「雲」がどのような形状にあるかを「細い」によって表す。そして、<細さ>とは別に「刷毛で引いた」という行為を喩辞に用いる。刷毛を引くことで生じる線の属性<直線><ムラがある>という複数の属性が、<細さ>に加えて「雲」に与えられる。(34) は名詞句「赤い炎」を「血のような」が連体修飾する。「血のような」と「赤い」は、属性<赤さ>を表す点で重複的であり、並列的にそれぞれが「炎」に対して属性を与えているのではない。死者の声が聞こえるという不穏な雰囲気のもと、「赤い炎」と色の共通を利用して「血」という不吉なイメージを提示することで恐怖感を煽る表現となる。

「A のような」が直接体言に係る「A のような B」タイプは構文中に他の属性表現がない。「A のような B」タイプでは、A のイメージの解釈を何らかの属性に限定するのではなく、B が A に直接、複合的な属性を体言に付与する。

- (35) 締め切った書斎に私が籠っていたときなど、その大理石のような手を私の肩に置きながら、低く美しい声の楽音をひびかすまでは、いつ入ってきたとも気づくことはなかった。

(エドガー・アラン・ポー、阿部知二訳「リジイア」)

- (36) 「大学でスペイン語を教えています。」と彼は言った。「砂漠に水を撒くような仕事です。」

(村上春樹『1973 年のピンボール』)

(35) は、ヒロインである「リジイア」の白く美しい手を表現する。その手を表現するために喩辞「大理石」が用いられている。「大理石」は<白さ><美しさ><硬さ><艶やかさ>などの属性を有する。その中から<白さ><美しさ>が取り立てられて、当該の「手」に与えられることでその様相を表現する。(36) は、大学でスペイン語を教えることがどのような性質であるかを喩辞「砂漠に水を撒く」によって表現する。

「砂漠に水を撒く」という行為は、<広大な空間>にあり、<植物を発芽させる>ために行うが、水はすぐさま砂に浸透していくか蒸発するので行為は<無駄に終わる>という性質を持つ。大学でスペイン語を教えるという仕事は<多数の人に対し、スペイン語の習得を目的として行うが、身に付かず無駄に終わる>という性質を持つ。<広大な空間>と<多数の人>が量的な点で対応し、<植物を発芽させる>と<スペイン語を使えるようにする>は行為の目的の点で対応し、<無駄に終わる>と<身に付かない>は目的が達せられない点で対応する。「砂漠に水を撒く」ことの性質と徒労感を被喩辞「仕事」に付与することにより当該の発話者にとってのスペイン語教育の捉え方が表現される。

3.3. 目の前性の喚起

直喩は以上に見たように、複合的な情報を伝達する。イメージを投影することで対象を目の前に見るように表現する働きを持つ。本論文では、このような性質を目の前性⁵⁸の喚起と呼称する。

- (37) だからぼくはいまあの決定的な夏、あの《愛》ということばに唯一の輝かしい過去を見出さずにはいられない。ひとかかえもある蛔虫のような、輝かしい過去を。

(倉橋由美子「醜魔たち」)

- (37') だからぼくはいまあの決定的な夏、あの《愛》ということばに唯一の輝かしい過去を見出さずにはいられない。[φ] 輝かしい過去を。

⁵⁸ 「目の前性」は松本 (1996) によって「さまざまなすがたで、ココに、イマ、アクトチュアルにあらわれているデキゴトと、それをハナシテが目撃していることを表現して伝えているとき、そこにいいあらわされている意味的な内容をメノマエ性といっておく」と規定される。本論文は「目の前性」と表記を改め、規定は松本 (1996) に準じる。

- (38) 細く高い鼻が少し寂しいけれども、その下に小さくつぼんだ唇はまことに美しい蛭の輪のように伸び縮みがなめらかで、黙っている時も動いているかのような感じだから、もし皺があつたり色が悪かつたりすると、不潔に見えるはずだが、そうではなく濡れ光っていた。

(川端康成『雪国』)

- (38′) 細く高い鼻が少し寂しいけれども、その下に小さくつぼんだ唇はまことに〔φ〕 伸び縮みがなめらかで、黙っている時も動いているかのような感じだから、もし皺があつたり色が悪かつたりすると、不潔に見えるはずだが、そうではなく濡れ光っていた。

(37) は倉橋由美子の小説の一部、(38) は川端康成の小説の一部である。直喩が名詞句「輝かしい過去」、形容動詞「なめらかだ」を修飾している。(37) は「ひとかかえもある蛔虫」というイメージを用いて「輝かしい過去」を表現し、(38) はヒロインの唇の艶やかさを「蛭の輪」によって表現する。これらは輝かしさや美しさに逆行するグロテスクなイメージを用いる撞着語法的な表現となっている。つまり、アクチュアルなイメージを用いることで、対象の持つ際立った性質を目の前に見るように感じる表現としている。直喩が脱落すると、(37′) は過去の持つ強烈な陰惨さが脱落し、(38′) は駒子の唇が島村に喚起する美しさや情欲の強さが脱落する。

このように直喩はイメージを用いることで対象を目の前に見ているように表現する。そのような働きを利用して、文学テキストにおいて場面の臨場感を作るために用いることがある。

- (39) 眼下には大きな公園のような緑が、たつぷりと広がっている。空は色むらのまったくない、鮮やかなセルリアンブルー。その青と緑の境目に、まるでとっておきの折り紙を丁寧に並べたみたいに、大小のビル群がずらりと並んでいる。その一つひとつには微細で精巧な窓が編み目のように刻印されていて、ある窓は青を映し、ある窓は緑に染まり、ある窓は朝日をきらきらと反射している。遠くに小さく見える赤い尖塔や、どこかクジラを思わせるような丸みを持った銀色のビル、一枚の黒曜石から切り取ったみたいな黒く輝くビル、そういういくつかの建物はきっと有名で、私にも見覚えがある。遠くにオモチャのような自動車が、列をなして整然と流れている。

(新海誠『小説 君の名は。』)

- (39′) 眼下には大きな〔φ〕 緑が、たつぷりと広がっている。空は色むらのまったくない、鮮やかなセルリアンブルー。その青と緑の境目に、〔φ〕 大小のビル群がずらりと並んでいる。その一つひとつには微細で精巧な窓が〔φ〕 刻印されていて、ある窓は青を映し、ある窓は緑に染まり、ある窓は朝日をきらきらと反射している。遠くに小さく見える赤い尖塔や、〔φ〕 丸みを持った銀色のビル、〔φ〕 黒く輝くビル、そういういくつかの建物はきっと有名で、私にも見覚えがある。遠くに〔φ〕 自動車が、列をなして整然と流れている。

(39) の小説はヒロイン「三葉」と主人公「瀧」の精神と肉体との入れ替わりを用いた作品である。三葉は地方在住であり、瀧は新宿近郊に住む。引用場面は、瀧の肉体に入った三葉の語りであり、彼女が初めて瀧の住む新宿近郊を眺めたものである。ここにおいて直喩は、名詞句「緑」「丸みを持った銀色のビル」「黒く輝くビル」「自動車」、動詞句「並んでいる」「刻印されていて」を修飾する。はじめて目にした新宿の光景への驚きを多様なイメージの提示によって表現している。(39) から直喩を脱落させたものが(39')である。情景描写であることに変わりはないが、整然と並ぶビル群を「とおきの折り紙を丁寧に並べた」と評し、眼下を走る自動車を「オモチャ」と評するような登場人物が眼前の事物に抱くイメージが脱落する。そのイメージの提示に支えられていた三葉の驚きや高揚感も伝達されなくなる。(39) と(39')の関係から、発話者が目の前の情景に感じ取っている高揚感を直喩がその目の前性によって形作っており、場面の臨場感を喚起するために運用されていることが分かる。

4. 程度表現としての直喩

以上のように直喩は、発話者と聞き手で共有されるイメージを用いることで、複合的な属性の付加や目の前性の喚起を行い、事物・事柄の様態・属性を表現する。このような様態表現が直喩の主な用法である。一方で、直喩は2節に見たように事柄的な側面だけでなく程度や評価といった心理的な情報にも関与する。このような事柄的な側面から離れた場合でも、直喩はイメージの共有を活かして運用される。直喩はこれまで事柄的な側面に注目されて論じられてきており、評価や程度のような例は慣用的とされ、積極的に研究されてこなかった。そこで、本節は直喩を用いた程度表現の分析を通して、その表現上の働きを明らかにする。直喩を用いた程度表現とは次の(40)のような例である。

(40) 氷のように冷たい肌。

(40') φ冷たい肌。

(41) とても冷たい肌。

「冷たい」と明示している以上、「氷」は重複的であり、脱落しても肌の属性の表現としては大きな変化が見られない。「氷のように」は(41)の程度副詞「とても」と同様に程度の限定を行っていると解される。このような直喩はこれまで強意的直喩(大山 1956、池上ほか編 1983、山梨 1988)として捉えられ、次のように表現上の働きが記述されている⁵⁹。

問題の対象の性質、形状、様態の度合いを修辭的に特別に強める。

(山梨 1988 : p.182)

自分が伝えようとしている事物そのものは自分も相手も知っているが、その性質を強く相手に伝えたいためにストレートに表現しないで、そのものと程度において共通性を持っている他のものを持ち出して強調する。

(池上嘉彦ほか編 1983 : p.830)

⁵⁹ 本論文では、「強意的直喩」を術語として採用せず、程度性との関わりを重視して程度型直喩と呼ぶ。

「修辭的に特別に強める」「強く相手に伝えたい」とあり、読み手への伝達において強調の働きを持つ表現として捉えられている。しかし、程度副詞もまた甚だしさに限定して表す点では「強調」とも言えるものである。「強調」という概念は(40)と(41)の表現を弁別するに足るものではない。直喩であるからこそその表現上の働きについては、『日本語大辞典』の「直喩」の項で次のように記述されている。

この場合（引用者注：「亀のようにゆっくり」の例）、「たとえるもの」には、たいてい度を越したものが選ばれる。大げさにたとえるのである。そこに生じる「たとえるもの」と「たとえられるもの」との落差が、受け手に印象的な形象をもたらすわけである。（坂野信彦執筆、p.1387）

「受け手に印象的な形象」とあるようにイメージを用いて相手に印象付けするという働きを指摘する。しかし、なぜ(40)は氷の形象を用いて相手に印象付けようとし、(41)は程度副詞を用いて程度を限定するのかは分明でない。程度を限定するための語彙項目として程度副詞があるなかで、あえて直喩を用いる理由を論じる必要がある。

4.1. 程度型直喩とは

本項は程度型直喩の意味・構文的特徴を概観し、本項が対象とする表現を規定する。また、程度型直喩と程度副詞のテキストジャンルの分布を確認し、用いられる場の違いから両者の表現上の働きが異なることを確認する。なお、以後の論では必要に応じて程度副詞との比較を行うが、比較対象とするのは「とても」とする。これは「とても」が甚だしさを表す程度副詞として高い頻度で出現するため、典型例と判断したためである。

4.1.1. 意味的側面

本論文では程度型直喩を、状態性の用言に係り、その用言が表す状態・属性・関係の度合いを限定して表す直喩と定義する。

(42) 氷のように冷たい肌。

(43) 喧嘩が化物のように強い人。

(44) ビックリするように近い距離。

(42) は肌の状態である冷たさを甚だしさという限定した程度のもとに表す。(43) はある人物の喧嘩における強さという属性が並外れていることを表す。(44) は距離という二物の関係において、近さの度合いが甚だしいことを表す。状態や属性、関係性といった事物・事柄の持つ抽象的な性質について、それが甚だしいものであるとして限定して表す。なお、関係の度合いを表す実例は本論文の調査の範囲内では確認されなかった。

4.1.2. 構文的側面

程度型直喩は「AのようにB」という連用修飾構造の構文を主に取る。

(45) 肌は雪のように冷たい。

(46) 雪のように冷たい肌。

喩辞「雪のように」が「冷たい」へと連用修飾を行う。それによって程度を限定した冷たさを表す句「雪のように冷たい」が形成される。これを題目に対する叙述として用いると(45)となり、被修飾名詞に対する規定として用いると(46)となる。一方で、連体修飾においても程度の限定は行われる。

(47) 氷のような肌。

(47′) φ肌。

(48) 氷のような冷たい肌。

(48′) φ冷たい肌。

(48′′) [氷のような [冷たい肌]]

(49) 氷のように冷たい肌。

(49′) [氷のように [冷たい]] 肌

(47)は「肌」を「氷のような」によって連体修飾し、肌が冷たいことと同時にその甚だしさを表す。一方で、「氷のような」が脱落した(47′)では甚だしさだけでなく、冷たさも脱落し、肌の属性の表現として大きく変化する。「氷のような」は状態の表示とともに程度も表示していることが分かる。このような例は様態・属性を表す表現として扱い、本節の分析対象から除く。一方で、(48)も肌の冷たさとその甚だしさを表すが「氷のような」を脱落させた(48′)は、肌が冷たいという状態の存在は保持される。その点で(49)のような連用修飾構造と同じである。しかし、「AのようなB・C」と「AのようにB・C」は(48′)と(49′)のように係り受けが異なる。(48)の「氷のような」は名詞句「冷たい肌」に係り、「冷たい肌」の様相を規定する成分として働いており、直接的に形容詞には係らない。一方で、(49)の「氷のように」は「冷たい」に係り、そのスケールを表すために働く。このような係り受けの違いから(48)のような例も本節の分析対象から除く。このことから、本節は被修飾部が属性形容詞や状態動詞であり、専ら程度の限定として働く表現を程度型直喩として分析対象とする。

4.1.3. 分布

以上に規定した特徴に該当する表現をBCCWJによって収集した「ようだ」型直喩から選別した。その結果、19,158例の「ようだ」型直喩のうち、程度を限定するために用いていると解釈できる表現166例を得た。この程度型直喩166例のテキストジャンルごとの分布と程度副詞「とても」の分布を示したものが【表2】である。

【表 2】：程度型直喩と「とても」のジャンル別用例数

程度型直喩				「とても」			
ジャンル	用例数	ジャンル	用例数	ジャンル	用例数	ジャンル	用例数
文学	107	Yahoo!知恵袋	2	Yahoo!ブログ	1,493	広報誌	99
ベストセラー	11	産業	2	Yahoo!知恵袋	1,096	産業	64
歴史	9	韻文	1	文学	1,050	言語	54
Yahoo!ブログ	5	教科書	1	社会科学	345	総記	49
社会科学	5	白書	0	芸術美術	229	分類なし	38
分類なし	5	法律	0	ベストセラー	223	新聞	27
雑誌	4	広報誌	0	雑誌	215	国会会議録	23
哲学	4	国会会議録	0	歴史	196	教科書	16
芸術美術	4	新聞	0	自然科学	162	韻文	10
技術工学	3	総記	0	技術工学	160	白書	0
言語	3	自然科学	0	哲学	121	法律	0

程度型直喩は「文学」が 107 例で他のジャンルよりも顕著に多い。他のジャンルは「ベストセラー」の 11 例を除けば、用例数は 10 以下となる。つまり、程度型直喩は主に文学テキスト、特に小説などの散文作品の中で用いられる。主に次の (64) のように事物・事柄の描写に用いられる。

- (50) 頭が割れるように痛い。海藤兼作が踊り場の手すりにもたれ、頭を抱えた。
階段を全力で駆け上がって来たせいか、立ってられないほど目が回った。
(サンプル ID : LBc9_00040 逢坂剛『さまよえる脳髄』)

頭痛の甚だしさを「頭が割れるように」と表現している。一方で、程度副詞「とても」は「Yahoo!ブログ」の用例数が 1,493 と最も多く、次に「Yahoo!知恵袋」の 1,096 例が続く。文学は 1,050 例で第三位となる。つまり、「Yahoo!ブログ」や「Yahoo!知恵袋」といったインターネット上の打ち言葉として用いられやすいことを意味する。特に、ブログ記事は書き手の個人的な体験とそれに対する感想や評価を書き連ねるものであり、後述する【表 3】や (18) の例のように体験から得た喜びの甚だしさなどの心理的な情報へと「とても」を用いる。ブログ記事は日記のような性格を持ち、読み手への情報伝達や感情の共有を求めるといっても書き手の体験を整理し、不特定の読み手に発信する (山崎 2009)。このような個人的な体験や感情の発信を主とし、読み手にそれを正確に理解されることを求めないという性質のジャンルに「とても」は出現している。

4.2. 直喩と程度

程度とは「開放スケールにおける位置」(蔡 2017) と定義される。開放スケールとは始点・終点を持たない相対的な尺度であり、大きさや冷たさのような属性が有する概念的な特性である⁶⁰。開放スケール上の位置を表し、どのような程度を持って存在しているかを限定して表示する表現が程度表現となる。一般に開放スケール上の位置を表す語彙項目として程度副詞があり、「ことが然的には形容詞 (状態言) の程度を限定しつつ、

⁶⁰ 絶対的な基準点によって計測される尺度を「閉鎖スケール」と呼ぶ。閉鎖スケールは例えば、出発地点 (始点) から歩行距離を計測することで歩行量が得られるように、量と関わりを持つ。

陳述的には肯定の平叙の文に用いられる」(工藤 2016 : p.119) という特徴が指摘されている。【表 3】に見るように程度型直喩もまた「とても」のような程度副詞と同様に相対的な尺度で測られる状態や属性を被修飾部取る。

【表 3】：程度型直喩と程度副詞の被修飾部（上位 10 例）

程度型直喩	用例数	「とても」 ⁶¹	用例数
冷たい	44	嬉しい	431
固い	26	美味しい	379
熱い	24	いい	308
美しい	11	楽しい	274
暑い	6	可愛い	182
赤い	4	難しい	160
大きい	4	面白い	157
巨大だ	3	よい	150
寒い	3	優しい	127
冷え切る	3	つらい	121

程度型直喩は、相対的なスケールを持つ属性の中でも、「冷たい」「固い」「熱い」「暑い」「寒い」「冷え切る」のような皮膚感覚による情報や「美しい」「赤い」「大きい」「巨大だ」のような視覚による情報といった外界の事物との接触によって発話主体が知覚する状態・属性を被修飾部取ることが多い。

- (51) それでもオウメさんは、顔を両手でおさえてじっと坐っていた。泣き声を出すまいと一生懸命に力こぶを入れ、そのために石のように堅くなっているのに違いなかった。

(サンプル ID : PB49_00548 井伏鱒二「釣りの楽しみ」)

- (52) 召集を受けた郡県の水軍が、いまだに浙江と曹娥江から進入をつづけていた。血のように赤い夕焼けを映す鏡湖に、それらの船影がまだら模様を描き、湖面は朱儁がいまだかつて見たことがないほど毒々しい色彩になっている。

(サンプル ID : PB39_00502 宇佐美明浩『中国遊侠伝』)

- (53) 右手首の感覚がほとんどなくなり、崔民生は意識を失いかけた。不思議なことに、全身からふき出した汗が氷のように冷たかった。

(サンプル ID : LBk9_00072 梁石日『族譜の果て』)

(51) は力こぶの硬さの甚だしさを「石」と表し、(52) は夕焼けの赤さの濃さを「血」と表す。「硬さ」は相対的であり、どれほどの硬度でもって「硬い」と認定するかには個人差がある。(52) のような色彩形容詞であれば色相のある点を取ることで典型を示すことはできるが、どの色合いを越えたものがより濃い赤であると認定することは難しく、相対的である。(53) は汗の冷たさの甚だしさを「氷」と表す。当該の人物が感じている汗の冷たさという身体感覚に関わる経験が述べられた文に直喩「氷のように」が用いられている。

⁶¹ 「とても」の被修飾部は「NINJAL-LWP for BCCWJ」における検索結果を参照した。「とても+形容詞」における「コロケーション」の頻度上位 10 例を掲載した。

一方で、程度副詞「とても」は「嬉しい」「楽しい」「辛い」のような感情形容詞、「いい」「難しい」「面白い」「よい」のような評価形容詞といった発話者の心理に関わる用言を被修飾部に取りやすい。

- (54) 午前7時四十分頃から午前8時頃までが、中高生の通学時間のピークだ。よく挨拶をする小中高生が多いので、とても嬉しい。

(サンプルID : OY03_11823 Yahoo!ブログ)

小中高生から挨拶を受けることについて「嬉しい」という感情を表明した文であり、嬉しさの感情の度合いの甚だしさを「とても」によって表している。このことから、感情や評価といった心理的な状態の度合いを修飾することの多い「とても」に対して、程度型直喩は身体感覚に関わる性質・属性の程度を限定することが被修飾部の特徴となる。

4.3. 共有イメージの利用

以上に見たように、相対的な尺度を有した状態・属性を被修飾部にする点で程度型直喩と程度副詞は同様であるが、発話者の身体感覚に関わる状態・属性を被修飾部にする点で異なっている。では、このような身体感覚の程度をどのようなイメージによって表しているのだろうか。直喩においてイメージの表示は喩辞が担う。そこで、程度型直喩に用いられた喩辞を集計した。その結果が【表4】である。

【表4】：程度型直喩の喩辞（用例数2以上）

喩辞の品詞	喩辞
名詞	氷(41) 石(22) 鬼(9) 絵(9) 火(6) 山(6) 岩(5) 血(4) 夢(3) 糸(2) 地獄(2) 鉄(2) 化け物(2) 天使(2)
動詞（句）	燃える(18) 凍る(4) 凍える(3) 凍てつく(2) 凍り付く(2) 身を切る(2) 焼け付く(2) 焼(灼)ける(2)

喩辞はその品詞から「氷」「石」のような名詞と「燃える」「身を切る」のような動詞（句）に分かれる。以下、名詞を喩辞とするタイプと動詞（句）を喩辞とするタイプごとに見る。

4.3.1. 名詞を用いた喩辞

冷たさの程度を表すために氷を喩辞に用いるように、「AのようにB」において名詞Aが想起する事物・事柄を用いて被修飾部Bが表す状態・属性を限定するパターンである。この場合、Aは状態・属性Bの典型的な事物・事柄となる。

- (55) 僕はフリッパー・ボタンからもぎ取るように放し、背の壁にもたれかかり、氷のように冷えた缶ビールを飲みながらスコア・ボードに表示されたままの105220という六個の数字を長い間じっと眺めていた。

(村上春樹『1973年のピンボール』)

(55) は、非常に冷されたビールを表現したものである。「ビール」が氷点下の温度にあることをいうのではなく、冷たさの程度が高いことを示す。「氷」は<溶ける><透明>などの属性を持つ。その中でも<氷点を下回ることにより水から変化する>という性質が取り立てられて「冷たさ」に係る。喩辞「氷」と「冷えた」を「ように」が繋ぎ、「氷のように冷えた」と一つにまとめることにより形成された<氷点を下回ると感じられるほど冷たい>という甚だしさを持った属性が「ビール」へと与えられる。冷たさの典型例として多くの人々に共有される事物として氷が提示される。氷に触れた経験にその冷たさのイメージが依拠するように、名詞喩辞が用いるイメージは実際の事物と接した経験に依拠することが多い。

(56) 「なんか…恰好悪いね、オレ」やがて津田は腕をほどいた。きつく抱かれていた冴子の頬が火のように熱い。

(サンプル ID : LBg9_00120 高橋克彦『広重殺人事件』)

(56) は火照った頬の熱さを喩辞「火」によって表す。火という身近な事物とそれに接することで獲得する熱さのイメージによって頬の熱さの甚だしさを表す。一方で、実際には接することも経験することもできない空想上の事物であっても、社会・文化的に形成されたイメージがあれば喩辞に用いることもできる。

(57) 灯樹とは、高さ数十メートルにも達する組み木に無数の提灯をぶらさげ、まるごとすっぽりと薄絹で覆った、化け物のように巨大な灯籠のことだ。

(サンプル ID : PB19_00103 藤巻一保『陰陽魔界伝』)

(58) 彼の場合はエアコンだけにとまらず、ヒーターまでもはずしてしまった。その結果、夏は地獄のように暑く、冬は凍死寸前の寒さを体験できるステキな居住空間となってしまったそうだ…。

(サンプル ID : PM55_00022 『OPTION 2』2005年3月号)

(57) は灯籠の巨大さを「化け物」によって表す。「化け物」は日常世界に存在しないが、「化け物大根」のような造語からは奇怪さや大きさの点で常識を外れた姿であるなどの文化的に形成されたイメージを有することが推察される。「化け物」を提示することで当該の灯籠の大きさが常識外れのものであることを表す。(58) の喩辞「地獄」も、「焦熱地獄」のような言葉が存在するように社会・文化的に過酷な熱さによって苦しみを与える場所というイメージが存在する。過度な熱さというイメージを用いて暑さの甚だしさを表す。このような喩辞は、「化け物」は「巨大」と共起し、「地獄」は暑さや苦しさを表す語と共起するなど、そのイメージとの関係から共起する語に偏りがある。一方で、次の「鬼」のように共起する語が多様であり、イメージが希薄化していると見られる例もある。

(59) 京都の建仁寺に、若い雛僧を修行させる群玉林という禅塾がありました。ここに十五、六歳の釈宗演さんが入っていた。その塾頭さんが鬼のように厳しく若い修行者を鍛えた。

(サンプル ID : PB31_00086 松原泰道『洗心』)

(60) 東武は鬼のように混んでました。帰りにTSUTAYAでアホなほどDVDとCD借りたので、今から引きこもります。

(サンプルID: OY04_06154 Yahoo!ブログ)

(61) (…)特に買いたいというものもないしやる気ナッシングで慎重に見ていたらまたトレード数は激減(――;)余力が鬼のように余ってるo*`Д`*o

(サンプルID: OY14_41198 Yahoo!ブログ)

「鬼」はもともと(59)のように厳しさの甚だしさを表すことが主であったが、現在では(60)(61)に見られるように厳しさに限定されない多様な状態・属性の程度を限定することができる。これは名詞「鬼」のイメージのうち「力の強大さ」のような甚だしさに関わる性質が取り立てられることで厳しさだけでなく、幅広い状態や属性に適用可能になったのだと推測される。ゆえに、次の(62)のように直喩ではない形式への変換が可能である⁶²。

(62) 来週からまた鬼忙しいから少し飲みに行きたいなー (Twitter: 2021/8/12)

以上のように、名詞を喩辞とした程度型直喩は、石のように誰もが接した経験のある事物・事柄や「地獄」「鬼」といった社会・文化的に形成されたイメージを有する事物・事柄を用いており、受け手が想起しやすいイメージを用いていることが分かる。

4.3.2. 動詞(句)を用いた喩辞

熱さの甚だしさを「燃えるように」と表現したり、寒さの甚だしさを「身を切るように」と表したりするように動詞や動詞句を用いて程度を限定するパターンである。このような動詞(句)の喩辞は極端な事象を提示する。しかし、それは突飛なものではない。動詞(句)が表す動きや変化は時間的な推移を持つため、因果関係を形成し得る。たとえば、「燃える」は温度上昇によって引き起こされる事象であり、熱さとの因果関係を有する。このような「AのようにB」におけるAとBの因果関係を用いて、極端ではありながらも想像の容易な事象によって程度の甚だしさを表現する⁶³

(63) その年は冬が来るのが早かった。旧暦十月初旬になると、朝晩は身体が凍りつくように冷え込んだ。

(サンプルID: LBe9_00172 黒岩重吾『聖徳太子 日と影の王子』)

⁶² 類例として「神」がある。BCCWJでは該当する例は確認できなかったが、TwitterなどのSNSには散見される。「鬼」に比べて新規的な表現であると言える。

○ワシの作ったゴーヤきんぴらが神のように旨い (Twitter: 2021/8/12)

○やきたての塩バターロール神旨 (Twitter: 2020/6/12)

⁶³ 一般に、因果関係をはじめとした隣接性を基板とした比喩表現は換喩と呼ばれる。しかし、多門(2006)に指摘されるように、直喩においても隣接性に基づく表現がある。ここで論じる動詞句を喩辞に用いた程度型直喩もそのような表現の一種となる。

(63) は冬の冷氣による体温の低下の甚だしさを喩辞「凍りつく」によって表す。「凍りつく」というのは低温によって生じる状態の変化である。ここで変化する主体として「身体が」と明示することで、体が凍り付くという実際には発生し得ない極端な状況を読み手に仮想させる。身体が凍るという極端な状況を想像することで当該の甚だしい気温の低さを理解しやすいものとする。動詞（句）を喩辞に用いるパターンでは（63）のような温度感覚に関わる甚だしさを表すことが多いが、（64）のように痛みなどの身体感覚の甚だしさを表すこともある。

(64) 頭が割れるように痛い。海藤兼作が踊り場の手すりにもたれ、頭を抱えた。
階段を全力で駆け上がって来たせいか、立ってられないほど目が回った。
(サンプル ID : LBc9_00040 逢坂剛『さまよえる脳髄』)

(64) は頭痛の甚だしさを「頭が割れるように」と表現する。頭が割られるという現実にはほぼ起き得ない事象を提示し、その極度の痛みを仮想させることで当該の頭痛が度を越えたものであることを表す⁶⁴。

このように動詞（句）を喩辞に用いた程度型直喩は、現実には発生し得ない極端な事象を提示することで、受け手に身体的な感覚を仮想させながら程度を伝える表現であることが分かる。そして、その事象は突飛なものではなく、被修飾部の状態・属性と因果関係を持っていることで理解を容易にしている。

以上、4.3.1 節と 4.3.2 節で見たことから、程度型直喩における喩辞は、突飛な事物や事象を用いず、共通性や因果関係を持ち、想起しやすいイメージを用いていることが特徴となる。

4.4. 程度の実感的理解

ここまで論じたことを踏まえると程度型直喩は、主に小説などの文学テキストに用いられ、身体感覚に関わる状態や属性の程度を限定し、誰もが接した経験のある事物・事柄、社会・文化的に共有されたイメージを持つ事物・事柄、因果関係を持った極端な事象を喩辞に用いることが特徴となる。

特に喩辞は身近なもの、共有されたもの、因果関係を持った事象など誰もが理解の容易なイメージを用いている。このようなイメージを用いるのは、相対的な尺度の認定が人によって異なるため、書き手の意図と受け手の理解の一致を図るためである。

(65) どうでもいいけどともかくつけておかななくてはと、焼き肉屋におけるゼミの教授とスンシンとの会話のなかで頻繁に出ていた敦史の名前を持ちだし、かれとはとても仲がいいといった。（中略）とてもとはどれくらいとてもなんやといった。

(サンプル ID : LBt9_00038 玄月『異物』)

⁶⁴ なお、(16) は「冷たい→凍り付く」と B を条件として A が導かれるが、(17) は「頭が割れる→痛い」と A を条件として B が導かれる。このように動詞（句）を喩辞に用いた「A ように B」における因果関係は「A→B」「B→A」の両者が存在する。

「とても仲がいい」と関係性の良好さを伝えるが、その具体的な仲の良さは「とても」では伝わらない。ゆえに、「とてもとはどれくらい」という問い返しが必要となる。このように程度副詞による程度の限定は発話者にとっての位置付けを表すものであり、受け手がその程度の具体相を理解するものではない。表2に見たように、読み手への意識が薄く、書き手の感想を連ねるブログなどでは「とても」が好まれる。しかし、程度型直喩は小説のような文学テキストに用いられ、かつ人の身体感覚に関わる属性や状態の程度を限定する。文学テキストは、読み手には事前に共有されていない世界や人物の営みを不特定の読み手が理解できるように書く必要がある。ゆえに、書き手がどのように書きたいだけでなく、書き手が書こうとする人物の身体感覚を読み手が理解できるようにする必要がある。そこで、誰もが想像できるイメージを用いて送り手の意図と受け手の解釈のズレを小さくする。

- (66) 突然、天が裂けたような雷鳴が轟き、目もくらみそうな電光が閃き、八方から私の軀を射ぬくように乱射された。豪雨が滝のように激しい音をたてて降りつけ、私は全身ずぶ濡れになっていた。

(サンプル ID : PB59_00355 瀬戸内寂聴『釈迦』)

滝の落ちる轟音を提示することで当該の雨音の激しさの尋常でない様子を描出する。以上のように程度型直喩は程度という相対的な概念的特性を誰もが理解するイメージによって表すことで発話者の意図と聞き手の解釈を一致させるための方略と位置付けられる。このような性質を利用して、身体感覚を伴わない比喩的に用いられた「冷たい」「熱い」などを修飾することもある。

- (67) 捕り物のさいには、奉行所に常備された刃引き、すなわち刃先をつぶした刀を使用する決まりになっていた。青みをおびて、氷のように冷たい光を放つ刀身をじっと見つめながら、幻十郎は心の裡で亡き父へ手を合わせていた。

(サンプル ID : PB19_00096 黒崎裕一郎『冥府の刺客』)

刀身が放つ光の冷やかさを「氷のように」と表している。光に対して冷たさを肌で知覚することはなく、幻十郎の印象である。印象という心理的な情報へと擬似的に身体感覚を付与するために氷のイメージが喚起する冷たさを用いる。このように程度型直喩は、誰もが理解し得るイメージを提示することで状態や属性といった事物・事柄の抽象的な側面を具体的に伝達する。つまり、程度という不可視の範疇を目の前に見るように表現することを可能とする働きを持つのである。

5. おわりに

本章は、直喩が文の成分としてどのように働いているかを論じた。直喩は、修飾成分としての使用が主である点で形容詞や副詞と似通った文の成分である。これらの類似した成分とは発話者と聞き手で共有されるイメージを用いる点で区別される。

直喩を属性や様態のような事物のあり様を表すために用いる場合は、事物が持つ複合的な属性の伝達や事物を目の前に見ているように表示する目の前性の喚起を行う。また、

程度表現として用いる場合は、誰もが理解し得るイメージを用いることで相対的に決まる状態や属性の程度を聞き手にも実感的に理解できるようにする。このようにイメージを発話者と聞き手で共有するという働きをプロトタイプとして、それを様態や属性の表現に用いることで複合的な属性の伝達や目の前性の喚起を行い、程度の表現に用いることで聞き手の実感的理解に繋げる。

結論

1. 直喩のレトリックとしての位置付け

本章はこれまで議論したことから結論を述べる。これまでの比喩研究は、序章に見たように語彙論的な手法で進められ、喩辞や構文の多様性を明らかにしている。しかし、どのように直喩が成立し、その形成において「ようだ」などの文法形式がどのように寄与するかというメカニズムは明らかでなかった。このような文法形式はイメージを聞き手に伝えるために必要なものであった。イメージは、物理的には存在しない事象であるため、それを前もって共有していない聞き手に伝達するためには、イメージが確かであること、理解するに足る根拠が存在することを表示する必要がある。助動詞などの文末部は根拠を有した確からしさを表すことで、イメージに確度と根拠を与える。このような文法的な支えによって直喩は形成される。そして、それぞれの文末部は根拠の違い、確からしさの違いによって異なる表現価値を持つ直喩を形成する。直喩に前置される副詞もまたこのようなヴァリエーションの形成に関わる。副詞は直喩の成立に必須の文法形式ではなく、任意の要素である。これらの副詞は事柄に対する心的態度を表すモダリティとして働いている。発話者の態度と聞き手の解釈をコントロールすることで、表現価値の異なる直喩を形成する。これらの文末部と文頭部の選択によって生まれる直喩のヴァリエーションは表現の意図や目的に応じて使い分けられている。このような形式的なヴァリエーションを持ちつつも、直喩には発話者と聞き手で共有されるイメージを提示するという中核的な働きがある。そのようなイメージを事物・事柄の様態・属性を表すために用いることで、複合的な情報の伝達や目の前性の喚起を行う。また、程度という抽象的かつ相対的な範疇に対して用いることで、発話者の程度の認定を聞き手が実感的に理解できるようにする。

イメージという極めて具象的でありながらも個人の心理に属し、物理的には視認できない知覚像を文末部が確度と根拠によって支えることで発話者と聞き手の双方で共有し、そのイメージを文末部・文頭部の選択によって情報としての質をコントロールすることで、多様な場面や文脈に適応した形で表現することを可能とするレトリックが直喩なのである。

1.1. みとめ方とイメージを用いたレトリック

このように文法に着目して直喩を捉えることで、他のレトリックとの比較による位置付けが可能となる。1章に見たように直喩はみとめ方や真偽判断に関わる文法形式によって形成される。みとめ方や真偽判断に関わる文法形式によって形成される比喩表現には直喩の他に肯定の「だ」を用いた隠喩と否定の「でない」を用いた反直喩がある。

隠喩・直喩・反直喩は、「A は B だ」「A は B のようだ」「A は B でない」という「真：確か：偽」というグラデーションを持つ。従来、これらの比喩表現は A と B の類似性に注目して分析が進められてきた。しかし、類似は喩える事物 A と喩えられる事物 B との関係性という命題の要素の性質を捉えた概念であり、文法形式が表すみと

め方・真偽判断と比喻の関係は明らかでない。これらの比喻法はイメージを発話者の心理においてどのように位置付けるかを文法形式が表すことにより分化している。そして、レトリックとして異なる働きを見せるのである。

隠喩は肯定の「だ」「である」によって形成されるものである。「A は B だ」は隠喩以外の用法である (1) (2) に見るように事柄を確信的な態度のもとに提示する。十分な根拠のもとでは (1) のように確定した情報の提示となるが、根拠が十分でなければ (2) のように決めつけとなる。

- (1) 「やめとけよ、フレデリック！」トランプをテーブルにほうり出し、怒ったような口調でユリアン・フォンタナが言った。「君はポーランド人だ。ロシア皇帝に演奏を聞かせる必要などこれっぽっちもないんだぜ！」予想通りの展開だった。彼らにとって、皇帝の前で演奏することは裏切行為に等しいのだ。

(サンプル ID : PB19_00411 藤嶋美路『小説ショパン』)

- (2) そうまですれば、誰でも「はい魔女です」と自白するでしょう、かりに自白しないと「これほど拷問しても自白しないのは人間にできることではない、だから魔女だ」ということになって、もうのがれるすべはないのです。

(サンプル ID : LBg9_00162 安野光雅『空想書房』)

(1) はショパンに対してロシア皇帝のためにピアノを演奏する必要はないと諫めている場面である。ショパンがポーランド人であることは周知の事実であり、「君はポーランド人だ」は事実として確定している情報を述べている。一方で、(2) は異端審問における魔女裁判について述べたものである。審判者の心理においては対象人物は魔女であるが、裁かれる人物や第三者にとっては事実ではない。「魔女だ」という判断は事実ではなく発話者の心理内における確信を伝える決めつけの言表となる。比喻は、イメージを用いるという性質上、現実世界に事実として存在する事象を提示しない。よって、

(1) のような事実として確定した情報を提示するよりも、常に発話者にとっての確信を表すため (2) に近い性質を持つ。隠喩はその形成する文法形式である「だ」「である」の持つ意味によって、自身の心理内のイメージに対する確信を根拠の有無に関わらず提示するため、独りよがりに近い⁶⁵。根拠のある確からしさを表す構文によってイメージを提示する直喩と違い、隠喩は自身の心理的な確信のもとにイメージを提示する。「だ」「である」によって発話者の心の中でイメージを確定的なものとすることで、対象の評価を行う述語句や連体修飾句として対象をイメージと一体化させて指示機能を持たせる。

- (3) ところで九号館にはウォーター・クーラーと電話と給湯設備があり、二階には二千枚のレコード・コレクションとアルテック A5 を備えた小奇麗な音楽室まであった。それは (例えば競輪所の便所のような匂いのする八号館に比

⁶⁵ 隠喩は杉本 (2005) によってひとりよがり性が指摘されているが、このような「A は B だ」構文の性質を反映していると見られる。また、従来、隠喩の喩辞は「語り手と聞き手のあいだにまえて共通化されていなければならない」(佐藤 1978 : p.117) と指摘されるように、聞き手に理解されることが期待される喩辞を用いる傾向にある。これは、「A は B だ」構文が根拠の有無に関わらないイメージへの確信を表すため、発話者だけの独りよがりな理解とならないように聞き手もその場で理解できるイメージを選択するのだと思われる。構文の性質と運用される場・聞き手に喩辞の選択が動機付けられているのである。

べれば) 天国だった。

(村上春樹『1973年のピンボール』)

- (4) 女はもうそれ以上悲しい表情は出来ない——その悲哀のお面を被ったまま、
うつむきもせずに、まるで放心したようにぼそぼそといった。

(吉屋信子「鬼火」)

(3) は八号館と比較した九号館の心地よさを「天国」とする。大学の校舎と天国は本来まったく異質な空間であるが、両者を発話者の心内では同等とすることで、心地よさに関する評価を行う。(4) は悲しんでいる表情を「悲哀のお面」と表現する。顔はお面ではないが、ここでは両者を同一視し、そのお面の属性として「悲哀の」を付加することにより、＜悲しい表情＞を指示する名詞句を形成する。

反直喩は「でない」などの否定形式によって形成される比喩法である。反直喩は否定を用いてイメージが相応しくないことを表すことで、相手への応答やより相応しいイメージの存在を喚起するために用いる。

- (5) 真尋は一も二もなくクトゥグアに近づき、両手をクトゥグアの前に掲げた。

「あー、あったかい……お前、便利だな」

「わたしはストーブじゃない」

(逢空万太『這いよれ！ニャル子さん 2』)

- (6) シャ土の多い丘陵地方の

さびしい洞窟の中に眠ってゐるひとよ

君は貝でもない 骨でもない 物でもない。

さうして磯草の枯れた砂地に

ふるく錆びついた時計のやうでもないではないか。

ああ 君は「真理」の影か 幽霊か

いくとせもいくとせもそこに座ってゐる

ふしぎの魚のやうに生きてゐる木乃伊よ。

(萩原朔太郎「佛陀 或いは世界の謎」)

(5) は「真尋」がクトゥルフ神話における火の神クトゥグアを擬人化したヒロインの体から発せられる熱を利用して暖を取っていることに対して、クトゥグアが「ストーブじゃない」と応えている例である。真尋がクトゥグアをストーブとして扱うという行為に対して、その是非を言明するものである。この否定は「クトゥグア≠ストーブ」という真尋の取り扱い方に対して、ストーブとして扱うことの是非を否定するものであり、自身を便利な道具として用いることへの不満を表明する。事物の選択の是非が否定されることで相手への応答として機能する。(6) は詩の一節である。洞窟の中に眠っている人について、地中に長く存在するという共通点から貝・骨・物を提示した上で否定する。さらに、時の経過が存在する点で「ふるく錆びついた時計」という時間に関する事物を提示した上でそれをも否定する。この否定は、当該の存在を表現するために「貝」「骨」「物」「ふるく錆びついた時計」以上に適切なものが存在することを表す。否定の焦点はイメージの選択の是非にあり、それを否定することでより相応しいイメージの存在が想起される。このように反直喩はイメージの選択の是非を否定することで、

他者への応答や他の選択肢の喚起を行う。

このような隠喩と反直喩はみとめ方の文法形式とイメージの関係から成り立つ点で直喩と共通する。一方で、隠喩は対象への評価や指示物の形成を行い、反直喩は他者への応答や他の選択肢の喚起を行う。直喩が共有イメージによるあり様の具体化と表現の意図・目的による使い分けを行っていたのに対して、隠喩・反直喩の働きが異なっていることが分かる。従来、直喩は序章 2.3 節に見たように、隠喩との対比から主に意味論の観点で位置付けられてきた。それにより、直喩は物の外見を表すために用い、隠喩は内面的性質を表すために用いる（加藤 2018）ことが分かっている。直喩によるあり様の具体化と隠喩による評価の違いを意味的に捉えたものであるが、本論文ではその違いを文法形式・構文から捉え、さらに同様のメカニズムによって形成される反直喩との関係も踏まえて捉えた。

1.2. 直喩と目の前性

以上のようにみとめ方・真偽判断に関わる文法形式を用いて自身の心内におけるイメージの位置付けを行うというメカニズムは隠喩・直喩・反直喩に共通する。しかし、その働きは異なるものであった。直喩がレトリックとしてどのような表現上の働きを有した技法として位置付けられるかは、隠喩・反直喩以外の技法と比較する必要がある。

直喩は発話者と聞き手で共有されるイメージを用いて表現対象を具体的に描出する。このような働きを用いて 4 章に見たように対象に関わる複合的な情報の伝達や目の前性の喚起、程度の実感的な理解に用いられる。特に、目の前性は現代日本語において形容詞や副詞といった語彙項目では喚起できないものであり、レトリックを用いる必要がある⁶⁶。目の前性を喚起するレトリックであるという点で、直喩は隠喩や反直喩とはなく歴史的現在と近い働きを持つ。両者はともに語りのデフォルトを崩すことで成立する。たとえば文学テキスト、特に近代小説は、語り手が既に起きた事象を語ることによって構成されることが多い。ゆえに時制としては、相対的テンスのタ形（であった、だった）を語りのデフォルトとする。このような語りのデフォルトを崩すことで目の前性が喚起される。

- (7) 海岸の小さな町の駅に下りて、彼は、しばらくはものめずらしげにあたりを眺めていた。駅前の風景はすっかり変っていた。アーケードのついた明るいマーケットふうの通りができ、その道路も、固く舗装されてしまっている。

（山川方夫「夏の葬列」）

小説の冒頭部で、故郷の駅前の情景を描写した部分である。前二文は「眺めていた」「変わっていた」とタ形で語られる。三文目は「舗装されてしまっている」とル形で語られる。相対的テンスのタ形をル形へと転換し、既に起きたこととしてではなく同時的なものとして表示することで、舗装された道路をまさに目の前に見ているものとして描写する。このように、タ形で語るというデフォルトを崩してル形で語ることで歴史的現在が成立し、事象の目の前性が高まる。それと同様に、直喩は物理的に成立しない事象

⁶⁶ 松本（1996）が論じるように、奄美大島北部方言においては動詞の語尾変化が目の前性の喚起を担う。言語体系によって目の前性の喚起の方法が異なることが分かる。

であるイメージを文脈中に導入することで事実による語りを崩す。それにより、イメージの持つ具象性によって対象を目の前に見るように描写する。

- (8) 細く高い鼻が少し寂しいけれども、その下に小さくつぼんだ唇はまことに美しい蛭の輪のように伸び縮みがなめらかで、黙っている時も動いているかのような感じだから、もし皺があつたり色が悪かつたりすると、不潔に見えるはずだが、そうではなく濡れ光っていた。

(川端康成『雪国』)

(8) は 1 章 4.2 節、4 章 3.3 節でも述べたものであるが、蛭の蠢きや吸血のイメージによって唇が持つ生々しい美しさやエロティシズムを目の前に見ているように描出する。唇を当該の文章中で際立たせるために直喩を用いているのである。

歴史的現在とは、テンスを用いて語りの対象となる状況の時間軸上の位置付けを行うことで目の前性を喚起し、直喩はイメージを用いることで対象の事物・事柄を目の前に見るように描出する。両者は目の前性を喚起するレトリックとして働きが共通する。一方で、歴史的現在がル形を用いた文が表す事象全体の目の前性を高めるのに対し、直喩は被修飾部や題目が表す事物・事柄の目の前性を高めるという点で、目の前性を高める範囲が異なる。直喩のレトリックとしての働きは歴史的現在との比較から、対象となる事物・事柄に焦点を置いた目の前性の喚起であることが分かる。

以上のように本論文が行ってきた文法的な分析と考察の結果をもとにすることで、働きが共通したレトリックとの比較が可能となる。これまで直喩は、「ようだ」のような文法形式（比喩指標）の有無に着目され、「表現主体の比喩意識の反映」（中村 1977 : p.168）された表現として、その明示がない隠喩と区別されてきた。つまり、比喩であることをメタ的に説明した表現として位置付けられてきたのである。しかし、隠喩と直喩はレトリックとしての働きが異なるものであり、比較対象としての妥当性には疑義がある。むしろ、本論文が示したように、働きが共通する歴史的現在との比較を行うことで事物・事柄に焦点を置いた目の前性の喚起という直喩のレトリックとして持つ特徴を明らかにすることができる。

2. 本論文のまとめ

本論文は文法形式との関係を中心にして、直喩の形成されるシステムと表現としての働きを論じた。特に、直喩の成立と助動詞の関係、助動詞・副詞の選択によって生じるヴァリエーションごとの表現価値、文の成分としての働きについて論じた。

序章では、本論文が対象とする言語現象である直喩の定義と目的を述べた。また、直喩に関わる先行研究を概観し、これまでの研究の問題点と限界を述べた。そして、本論文は構文論とコーパス調査を用いて議論することを述べ、それぞれの概要を述べた。

第 1 章では「ようだ」「みたいだ」などの助動詞と直喩の成立との関係を論じた。直喩が成立するためには発話者の心理内の知覚像であるイメージを言語化し、それが聞き手に理解される必要がある。そこで、聞き手へと理解するに足るものとして提示するために助動詞などの文末部がイメージに確からしさを与える。直喩において必須成分である「ようだ」などの助動詞は、イメージへと根拠を持った確からしさを付与する。これ

により、物理的な事象としては存在しないが、発話者の心理上では確かに存在し、かつそのように認定するだけの根拠が存在することを明示した表現となる。それにより、発話者と聞き手で共有した理解を得られると見込んだ表現として直喩が成立する。つまり、直喩における助動詞はイメージの確度の指標として位置付けられるのである。そして、「ようだ」「みたいだ」「そうだ」といった助動詞や「思う」「感じる」のような知覚動詞が直喩の文末部に選択される原因をそれぞれの文法形式が持つ意味から論じた。

第2章では助動詞の選択によって生じる直喩のヴァリエーションの表現価値を論じた。それぞれの文法形式によって形成される直喩は、異なる表現価値を持つものであり、表現の目的や意図に応じて使い分けられる。そのような使い分けはテキストジャンルの分布、構文タイプの違いに反映された。そのような運用傾向の違いを明らかにすることで、「ようだ」型直喩、「みたいだ」型直喩、「そうだ」型直喩の表現価値を論じた。「ようだ」型直喩は、助動詞「ようだ」によって外的情報を根拠とした確からしさがイメージに付与されることで、聞き手と発話者で共有が見込まれるイメージの提示を行う。それによって、対象の事物の確かな様相を表す表現として用いられる。「みたいだ」型直喩は、助動詞「みたいだ」によって内的情報を根拠とした確からしさがイメージに付与されることで、聞き手との共有を前提としない発話者にとっての確かなイメージを提示する。聞き手との共有を前提としないことから、押しつけがましさなくなり会話文に用いられやすく、もしくは他者との一定の距離感を顕在化させる。「そうだ」型直喩は、「そうだ」のアスペクト用法における事態発生の確からしさによって、実際には起こり得ない事象の発生を錯覚するほどの甚だしさを持つことを表す。心が揺れ動くほどの甚だしさを有していることで、感情を伴った程度を伝達する。程度表現に相当する表現となっており、様態表現を中心とする直喩においては周辺的となる。

第3章では「まるで」「あたかも」「さながら」といった副詞と直喩の関係を論じた。副詞は直喩において必須ではなく任意に選択される要素である。これらの副詞は、比喩に対する発話者の心的態度を顕在化し、かつテキスト上では後続する情報がそれまでの情報と異質でありながらも意味であることへの断りとして働く。発話者の態度と読み手の解釈への働きかけを行うことで、直喩の情報としての質をコントロールする要素として位置付けた。そして、「まるで」型直喩、「あたかも」型直喩、「さながら」型直喩といった副詞の選択による直喩のヴァリエーションとその表現価値を論じた。「まるで」は後続する比喩におけるイメージの確からしさが極めて高いとする発話者の態度を表示する。イメージに高い確からしさを抱くということは、発話者にとって対象を表現するための最適な選択であることを意味する。「あたかも」は対象の概念的性質や非言語的情報を具体的に言い換える。直喩に用いられた場合は、対象を具象物のイメージによって言い換える表現を形成する。それは言い換えれば、概念や非言語的情報を具体的に説明することであり、「あたかも」型直喩はそのような性質を反映して「哲学」や「芸術・美術」といった概念や非言語的情報を言語によって説明するテキストへの出現が主になる。つまり、イメージによる説明を行うという表現価値を持つ。「さながら」は連続性が存在することを示す。直喩に用いられた場合、イメージと発話者の実感に連続性が認められることを表示する。表現対象に対する発話者の実感をイメージによって具象化する表現を形成する。そのため、エッセイのような書き手の経験とその実感を描くことを主とするテキストへと主に出現する。

第4章は直喩の構文上の働きについて論じた。直喩は様態・属性のような事物・事柄

のあり様から評価・程度のような対象へ抱く発話者の心理的な情報まで表すことができる。特に、様態・属性を表すために用いることが多く、直喩の典型的な用法である。様態・属性の表現としての直喩は、発話者と聞き手で共有されるイメージを用いることを利用して、対象の持つ複雑な属性や情報の伝達や目の前に見ているように表現するという目の前性の喚起を行う。程度表現として用いた直喩は、対象の状態や属性の程度を限定して表示する。その点で、程度副詞と共通する。しかし、誰もが共有できるイメージを提示することで、相対的であり解釈に個人差がある状態や属性の程度に対して、発話者がどのような程度として認定しているかを聞き手が実感的に理解できるようにする。発話者にとっての甚だしさの認定を表示するのみである程度副詞とは異なる働きを持つ。イメージを用いて程度という抽象的かつ相対的な範疇を具体的に伝達する方略と位置付けられた。

そして、本章では1節にてここまでの議論を踏まえた上で直喩のレトリックとしての位置付けを述べた。直喩はイメージとみとめ方に関わる文法形式によって形成されるという成立面では隠喩や反直喩と共通する。しかし、レトリックとしての働きの面ではこれらの比喩法よりも、目の前性を高める技法である歴史的現在と共通する。そして、事象の目の前性を高める歴史的現在に対して、直喩は事物・事柄に焦点を絞った目の前性の喚起であるという点で機能分担があることを述べた。

3. 理論的な寄与

本論文は以上のように文法に着目することで直喩の形成システムと表現上の働きを論じた。直喩とはイメージを文法的に支えることで言語表現化する技法となる。そして、その支えは、みとめ方・真偽判断の文法カテゴリー、特に確からしさを表す文末部が担う。また、叙述の態度という事柄目当てのモダリティも支えの一つであり、副詞が担う。このような支えに用いる確からしさや事柄目当てのモダリティの種類に応じてヴァリエーションが生まれる。このようなヴァリエーションは表現の意図、目的に応じて使い分けられる。

これまでの比喩研究は、序章の先行研究に見たように文法カテゴリーを用いた分析は行われてこなかった。しかし、本論文が示したように、直喩の形成やその構文上の働きは日本語の文法と密接な関係にある。それは、直喩の分析に文法的な観点が切り離せないことを示している。しかし、従来の比喩論は文法論を用いず、文法論は比喩を対象とすることが少なかったため、比喩と文法の関わりには未解明の問題が多い。比喩論は、これまで「類似性」「隣接性」「包含性」「事実否定性」「喩辞」「被喩辞」「記述的」「強意的」「写像」のような独自の概念を立て、理論を構築してきた。しかし、これらの概念によって記述されている比喩の構造がどのような日本語の意味・文法に支えられて成立しているかが明確でなかった。しかし、本論文で見たように直喩はその形成システム、表現上の働き、レトリックとしての位置付けにおいて特殊な概念を用いずとも、文法・意味に関わる一般的な概念を用いて行うことが可能である。本論文が構文論やコーパス調査を用いて直喩を分析・考察したことは、これまで疎遠であった比喩と文法を結びつけ、より一般的な概念を用いて直喩表現の実態の一端を解明したものと評価できる。

4. 今後の課題

本論文は直喩を構文論とコーパス調査によって分析・考察することで、直喩を支える日本語の文法と直喩表現の運用実態の一端を解明したものである。今後の課題としては文法と比喩の関係、比喩の運用実態の解明の継続的な研究がある。

前者は、直喩以外の比喩法である隠喩・換喩・提喩・諷喩が成立するにあたっての文法の働きを解明することである。直喩は「AはBのようだ」「AのようなB」といった助動詞を支えとして文・節・句のレベルで対象を叙述・修飾することで成立する。隠喩は、「AはBだ」などのコピュラ文、「AのB」といった連体句、喩辞「B」の指示物変化による言語現象である。コピュラ文や連体句による隠喩表現は「である」「の」といった文法形式によって構成され、本論文と同様の手法によって解明できると予測される。一方で、「狼（指示するのは人物）が来た」のように喩辞「狼」の指示物が変化することで成り立つ隠喩（いわゆる不在の隠喩）は、語の指示や意味変化によって成立する。しかし、その変化は語の持つ意味・文法的性質に依拠することが予測される。これまで、このような現象は意味の面に着目されて論じられてきたが、語の文法的性質にも着目して論じる必要がある。換喩・提喩は不在の隠喩と同様に指示物の変化によって成立する。換喩については大田垣（2009）、大田垣（2010）、大田垣（2017）などの一連の論考が存在し、意味・文法の側面から論じられている。提喩については、森（1998）、森（2002）、山泉（2005）によって主に認知意味論の立場から論じられている。換喩・提喩における指示変化の意味的なメカニズムの研究は継続的に進展している。一方で、森（2002）が指摘するように、「AはBの顔だ」「AはBの象徴だ」のようにAとBに隣接関係、包含関係が認められ、かつ文によって提示される言語現象が存在する。森（2002）はこれらを「明示的換喩」「明示的提喩」と名付けている。このような明示的換喩、明示的提喩は「Aは～顔だ」のように形式的な名詞を述語とし、述語名詞に「Bの」という連体句を補充することで成立する。これは、西山（2003）が論じる「広島はカキ料理の本場だ」のようないわゆるカキ料理構文を用いたレトリックとして見ることができる。このような名詞述語文研究の成果を取り入れることで、換喩・提喩と文法の間を論じることができる。

課題としてもう一つ、比喩の運用実態の解明がある。本論文は直喩のヴァリエーションを指摘し、それらの使い分けを論じた。しかし、取り扱ったヴァリエーションは「AはBのようだ」「AはBみたいだ」「AはBそうだ」「まるでAはBのようだ」「あたかもAはBのようだ」「さながらAはBのようだ」といった典型的な表現を中心とした限られたものである。助動詞や接辞でも「如し」や「風」「状」「的」など取り扱うことのできなかった形式が多々あり、副詞でも「ちょうど」「まさに」のように「あたかも」「さながら」などと用例数的にも同等の出現を見せる形式や「例えば」「たとえるなら」のようなメタ的に比喩に言及する例などを扱うことができなかった。また、佐藤（2019）が論じる「天使すぎるアイドル」のような「すぎる」の新規的用法も直喩を形成する文法形式として認めることができる。このような新規に生まれる文法形式も視野に入れて、直喩の広範なヴァリエーションの分析・考察も実態解明として必要になる。また、運用実態の解明としては、構文のヴァリエーションの他に作家や作品における個別的な使用傾向の調査・分析といった文体論的な方向もある。これまでの研究において作家・作品における直喩の使用傾向は調査されてきており、特に喩辞の出現傾向から作家の特性が

論じられてきた。しかし、直喩の働きについては不明であったので、調査結果が何を意味しているかを正確に意味付けることが困難であった。ゆえに、序章 2.1 節に見た中村（1977）や山口（1984）、概念メタファー理論が代表するような表現主体の心理や認識の反映として見られることが主であった。4 章で論じたように、直喩は様態・属性の表現としては複合的な属性や情報の伝達、目の前性の喚起を行い、程度表現としては聞き手の実感的理解に用いられる。このような本論文の明らかにした直喩の構文における働きを踏まえると、作家がどのような点で目の前性を喚起しようとしたか、もしくはどのような点で読者の理解を促すかを見るための文体的指標として位置付けられる。そのように直喩を文体的指標とすることで、作家がどのようにテキストを構築しているかを明らかにすることができるかと期待される。

参考文献

- 五十嵐力（1909）『新文章講話』早稲田大学出版部。
- 池上嘉彦・松浪有・今井邦彦編（1983）『大修館英語学事典』大修館書店。
- 稲益佐知子（2004）「直喩表現の研究方法についての一試案 - 枠組みの提示と分析」『文体論研究』50 号、pp.89 - 103：文体論学会。
- 稲益佐知子（2015）「『恐怖』を修飾する表現について：直喩の果たす役割に着目して」『表現研究』102 号、pp.37 - 46：表現学会。
- 内田賢徳（1976）「『ゴト』と『ゴトシ』 - 直喩の述語 - 」『帝塚山学院大学研究論集』11 号、pp.125 - 140：帝塚山学院大学研究論集編集委員会。
- 内田賢徳（1977）「『ようだ』『みたいだ』の転用について」『国語国文』46 巻 5 号、pp.359 - 369：京都大学国語国文学会。
- 大田垣仁（2009）「指示的換喩と意味変化 - 名前転送における語彙化のパターン - 」『日本語の研究』5 巻 4 号、pp.31 - 46：日本語学会。
- 大田垣仁（2010）「換喩と述定 - 内の換喩における流動的な名詞句解釈のヴァリエーションと成立可否の観点からみた - 」『語文』94 号、pp.44 - 56：大阪大学国語国文学会。
- 大田垣仁（2015）「措定辞『トイウ』の比喩的な用法について - コピュラ文との対象からみた - 」『語文』109 号、pp.97 - 80：大阪大学国語国文学会。
- 大田垣仁（2017）「換喩と種差 - 換喩使用の目的と条件 - 」『語文』109 号、pp.72 - 54：大阪大学国語国文学会。
- 大堀壽夫（2002）『認知言語学』東京大学出版会。
- 大山敏子（1956）『英語修辞法』篠崎書林。
- 岡本雅史（2020）「直喩標識としての『じゃないけど』：談話における直喩とアナロジーの再考に向けて」『日本認知言語学会論文集』20 号、pp.126 - 137：日本認知言語学会。
- 春日和男（1968）「比況 - ごとし・ようだ」『国文学』33 巻 12 号、pp.130 - 138：至文堂。
- 加藤祥（2018）「隠喩と直喩の違いは何か - 用例に見る隠喩と直喩の使い分けから - 」『認知言語学研究』3 号、pp.1 - 22：日本認知言語学会。
- 加藤祥・浅原正幸・山崎誠（2019）「分類語彙表番号を付加した『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の書籍・新聞・雑誌データ」『日本語の研究』15 巻 2 号、pp.134 - 141：日本語学会。
- 加藤祥・菊地礼・浅原正幸（2020）「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に基づく指標比喩データベース」『自然言語処理』27 巻 4 号、pp.853 - 887：言語処理学会。

- 金岡孝（1960）「比喩について - その表現心理的構造と言語的性格」『清泉女子大学紀要』7号：清泉女子大学.
- 菊地康人（2000）『『ようだ』と『らしい』 - 『そうだ』『だろう』との比較も含めて - 』『国語学』第51巻1号、pp.46 - 60：国語学会.
- 菊地礼（2018）「比喩指標としての『感じる』 - 文法形式と比喩の関係 - 」『言語資源活用ワークショップ発表論文集』3号、pp.288 - 297：国立国語研究所.
- 菊地礼（2019）「連体修飾構造の直喩における属性の表現」『中央大學国文』68号、pp.138 - 125：中央大学国文学会.
- Kikuchi Rei, Kato Sachi, Asahara Masayuki, 2019, "Collecting figurative expressions using indicators and a semantic tagged Japanese corpus", ICLC15th.
- 菊地礼（2020a）「偽の情報を提示する構文と比喩 - 『まるで』と『よう』 - 」『中央大學国文』63号、pp.250 - 234：中央大学国文学会.
- 菊地礼（2020b）「文法形式と比喩の関係 - 知覚動詞を用いた直喩について - 」『国立国語研究所論集』19号、pp.31 - 45：国立国語研究所.
- 菊地礼（2020c）「直喩のレトリックとしての特性 - 非文学テキストとの比較から - 」『第22回語用論学会全国大会発表論文集』15号、pp.49 - 56：日本語用論学会.
- 菊地礼（2021a）「比喩と助動詞の関係 - 『ようだ』と『みたいだ』 - 」『大学院研究年報』50号、pp.251 - 266：中央大学.
- 菊地礼（2021b）「直喩はなぜ『ようだ』を要求するか - 『そうだ』『らしい』との比較を通して - 」『中央大學国文』64号、pp.106 - 88：中央大学国文学会.
- 木坂基（1976）「近代比喩と文体 - 独歩・藤村・芥川の直喩」『表現学論考 今井文男教授還暦記念論集』：今井文男教授還暦記念論集刊行委員会
- 木下りか（2003）「直喩形式と類似性 - ヨウダとニテイル」『大手前大学人文科学部論集』4号、pp.153 - 164：大手前大学.
- 木下りか（2013）『認識的モダリティと推論』ひつじ書房.
- 工藤浩（2016）『副詞と文』ひつじ書房.
- 小池康（2003）「比況のモダリティの史的変遷 - マルデを中心に - 」『計量国語学』23巻8号、pp.387 - 406：計量国語学会.
- 小出美河子（1997）「比喩的構造にもとづく否定型式の表現」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』9号、pp.21 - 46：早稲田大学.
- 後藤秀貴（2018）「〈感情は液体〉メタファーの成立基盤と制約 - 概念メタファーの『まだら』をめぐって」（鍋島弘治朗・楠見孝・内海彰（編）『メタファー研究1』ひつじ書房）.
- 小松原哲太（2016）『レトリックと意味の創造性』京都大学学術出版会.
- 小松原哲太（2017）「比喩を導入する構文としての直喩の語用論的機能」（加藤重広・滝浦真人（編）『日本語語用論フォーラム2』、pp.47 - 73：ひつじ書房）.
- Komatsubara Tetsuta, 2021, "The Corpus of Japanese Figurative Language : Toward a comprehensive framework for describing figurative language", 『国際文化研究：神戸大学大学院国際文化学研究科紀要』55号、pp.107 - 134：神戸大学大学院国際文化学研究科.
- 小松原哲太・田丸歩実（2019）「日本語における直喩の写像方略の類型」『日本認知言語学会大会論文集』19号、pp.7 - 49：日本認知言語学会.
- 小柳智一（2014）『『じもの』考 - 比喩・注釈 - 』『万葉集研究』35号、pp.247 - 284：塙書房.
- 蔡薰婕（2017）「スケール構造を用いた程度修飾・数量修飾の分析 - 『ほど』『分』を対象として - 」『日本語の研究』13巻2号、pp.18 - 34：日本語学会.
- 佐藤武義・前田富祺（2014）『日本語大辞典』朝倉書店.

- 佐藤信夫（1978）『レトリック感覚』講談社.
- 佐藤信夫（1981）『レトリック認識』講談社.
- 佐藤信夫・佐々木健一・松尾大（2006）『レトリック事典』大修館書店.
- 佐藤らな（2019）「天使すぎるアイドルは何が過剰なのか：N すぎる構文の意味」『東京大学言語学論集』41 号、pp.279 - 293：東京大学大学院人文社会系研究科・文学部言語学研究室.
- 澤田真紀（2003）「村上春樹の比喩表現の研究」『日本文学』99 号、pp.67 - 82：東京女子大学.
- 志波彩子（2013）「『ト見ラレル』の推定性をめぐって - ラシイ、ヨウダ、ソウダ、ダロウとの比較も含め - 」『日本語文法』13 巻 2 号、pp.122 - 138：日本語文法学会.
- 島村瀧太郎（1902）『新美辞学』（『抱月全集』第 4 巻、天佑社、1919 年所収）天佑社.
- 修徳健（2015）「『ノルウェーの森』の二つの中訳本の対照に係る試論 - 比喩指標語を例に - 」（斎藤倫明・石井正彦編『日本語語彙へのアプローチ』おうふう）.
- 白井伊津子（2010）「萬葉後期の譬喩表現 - 直喩の形式」『国語と国文学』87 巻 11 号、pp.38 - 50：ぎょうせい.
- 水藤新子（1998）「『流れる』の比喩表現」『早稲田大学日本語教育研究センター紀要』11 号、pp.245 - 263：早稲田大学.
- 杉村泰（2001）「推論の型と推論の根拠の関連について - ニチガイナイとヨウダ、ラシイの違い - 」『ことばの科学』14 号、pp.23 - 40：名古屋大学言語文化学部言語文化研究会.
- 杉本巧（2005）「隠喩と直喩」『広島大学日本語教育』15 号、pp.1 - 8：広島大学大学院教育学研究科日本語教育学講座.
- 瀬戸賢一（1986）『レトリックの宇宙』海鳴社.
- 瀬戸賢一（1995）『メタファー思考』講談社現代新書.
- 瀬戸賢一（1997）『認識のレトリック』海鳴社.
- 芹澤剛（1993）「直喩の形式とその意味（一） - 共通性と能喩のかかわり - 」『園田学園女子大学論文集』28 号、pp.27 - 37：園田学園女子大学.
- 芹澤剛（1995）「直喩の形式とその意味（二） - 共通性の言語化をめぐって - 」『園田学園女子大学国文学会誌』26 号、pp.1 - 8：園田学園女子大学国文学会.
- 銭秀双（2019）「概念メタファー《人間は植物》の日中対照研究」『日本認知言語学会論文集』19 号、pp.435 - 441：日本認知言語学会.
- 高田早苗（1889）『美辞学』金港堂（国立国会図書館デジタルコレクション：
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/865174>）.
- 橘豊（1999）『日本語表現論考』おうふう.
- 多門靖容（1996）「喩辞によるテキストのイメージ記述についての覚え書」『愛知学院大学文学部紀要』26 号、pp.55 - 65：愛知学院大学文学会.
- 多門靖容（2004）「比喩と連体修飾、メンバ、カテゴリと存在」『日本語学』23 巻 3 号、pp.40 - 49：明治書院.
- 多門靖容（2006）『比喩表現論』風間書房.
- 多門靖容（2010）「隠喩とは何か」『日本語学最前線』、pp.515 - 527：和泉書院.
- 多門靖容（2018）「書評 半沢幹一著『言語表現喩像論』」『日本語の研究』14 巻 2 号、pp.118 - 125：日本語学会.
- 時枝誠記（1960）『文章研究序説』山田書院.
- 富田正一（1958）「平安時代の『ごとし』」『解釈』4 巻 9 号：解釈学会.
- 中川祐治（2013）「比況の副詞の位置」『国語の研究』38 号、pp.10 - 18：大分大学国語国文学会.
- 中村明（1977）『比喩表現の理論と分類』国立国語研究所報告 57：秀英出版.
- 鍋島弘治朗（2012）『日本語のメタファー』くろしお出版.

- 鍋島弘治朗（2016）『メタファーと身体性』ひつじ書房.
- 西山佑司（2003）『日本語名詞句の意味論と語用論』：ひつじ書房.
- 仁田義雄（2000）「認識のモダリティとその周辺」『日本語の文法 3』：岩波書店（仁田義雄（2009）『日本語のモダリティとその周辺』（仁田義雄日本語文法著作選）：ひつじ書房収録）.
- 仁田義雄（2002）『副詞的表現の諸相』くろしお出版.
- 日本語記述文法研究会編（2003）『現代日本語文法 4 モダリティ』東京：くろしお出版.
- 日本語記述文法研究会（2007）『現代日本語文法 3 アスペクト・テンス・肯否』くろしお出版.
- 日本語文法学会編（2014）『日本語文法事典』大修館書店.
- 波来谷史代（2009）「直喩の二種類について - ソシュールとヤーコブソンの言語理論を手がかりに - 」『美学』60 巻 1 号、pp.30 - 43：美学会.
- 橋本邦彦（1984）「直喩文の構造と機能」『室蘭工業大学研究報告 文科編』4 号、pp.65 - 87：室蘭工業大学.
- 原口裕（1973）『「みたようだ」から『みたいだ』へ』『静岡女子大学国文研究』7 号、pp.81 - 85：静岡女子大学国語国文学会.
- 半沢幹一（1979）「上代の比喩表現について - 「共通性」と素材との関連から - 」『国語学研究』19 号、pp.36 - 47：東北大学文学部国語学研究室内「国語学研究」刊行会.
- 半沢幹一（1981）「万葉比喩論序論 - 直喩の認定と表現形式」『共立女子大学文芸学部紀要』27 号、pp.319 - 347：共立女子大学.
- はんざわかんいち（1987）『「日日の祝祭」というレトリック - 庄野潤三の実感比喩』『文学藝術』10 号、pp.67 - 104：共立女子大学文芸学部.
- 半沢幹一（1993）「比喩は死にますか？ - 慣用と否定をめぐって - 」『表現学論考 第三』（今井文男先生喜寿記念論集刊行委員会編）.
- 半沢幹一（2016）『言語表現喩像論』おうふう.
- 平井昭徳（1989）「直喩と隠喩 - 類似性との関わりをめぐって - 」『英語学の視点』、pp.353 - 368：九州大学出版会.
- 星屋雅博（2006）「直喩 古典修辞学的考察」『METROPOLE』29 号、pp.21 - 44：首都大学東京.
- 前田直子（2006）『「ように」の意味・用法』笠間書院.
- 益岡隆志（2000）『日本語文法の諸相』くろしお出版.
- 松浦光（2017）「現代日本語における気象現象の概念化：概念メタファー理論によるアプローチ」名古屋大学大学院国際言語文化研究科博士学位論文.
- 松川美紀枝（2006）「現代における比喩の構造とその効果 - 村上春樹『海辺のカフカ』における直喩表現に着目して - 」『尾道大学日本文学論叢』2 号、pp.111 - 128：尾道大学日本文学会.
- 松本泰丈（1996）「奄美大島北部方言のメノマエ性 - 龍郷町瀬留」（鈴木泰・角田大作『日本語文法の諸問題 - 高橋太郎先生古希記念論文集』ひつじ書房）.
- 水谷静夫（1995）『「まるで」攷』『計量国語学』20 巻 3 号、pp.99 - 111：計量国語学会.
- 光信仁美（2013）『「ような」と『ように』の交代 - 名詞句 N1 のような X な N2 における - 』『関西外国語大学研究論集』97 号、pp.267 - 284：関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部.
- 宮地幸一（1968）『「～みたようだ」から『～みたいだ』への漸移相』『東京学芸大学国語国文学』3 号、pp.1 - 9：東京学芸大学国語国文学会.
- 苗苒（2001）「中国語直喩表現及び中日直喩構文の比較：『象...一样』と『ようだ』』『経営研

- 究』15巻12号、pp.225 - 245：愛知学泉大学経営研究所。
- 榑山洋介（2002）『認知意味論のしくみ』：研究社。
- 榑山洋介（2019）「百科事典の意味と比喻 - 指示対象の特徴の重要性 -」（鍋島弘治朗・楠見孝・内海彰（編）『メタファー研究2』ひつじ書房）。
- 森山卓郎（1995）「推量・比喻比況・例示 - 『よう／みたい』の多義性をめぐって - 」（『日本語の研究 宮地裕・敦子先生古稀記念論集』、pp.493 - 526：明治書院。
- 森雄一（1998）「提喩についての一考察」『明海日本語』4号、pp.49 - 57：明海大学日本語学会。
- 森雄一（2002）「提喩研究の新展開 非対称性を中心に」『表現研究』76号、pp.15 - 22：表現学会。
- 森雄一（2002）「明示的提喩・換喩形式をめぐって」『認知言語学論考』2号、pp.1 - 24：ひつじ書房。
- 安井稔（2007）『新版 言外の意味』開拓社。
- 山泉実（2005）「シネクドキシの認知意味論へ向けて - 類によるシネクドキシ再考 - 」（『認知言語学論考』4号、pp.271 - 312：ひつじ書房）。
- 山口堯二（2002）「『やうなり＞やうだ』の通時的变化」『京都語文』8号、pp.102 - 119：仏教大学国語国文学会。
- 山口仲美（1984）『平安文学の文体の研究』：明治書院。
- 山崎絢子（2009）「ネット日記における対読み手意識 - ブログと SNS を材料にして - 」（『国文』112号、pp.59 - 69：お茶の水女子大学国語国文学会）。
- 山梨正明（1988）『比喻と理解』東京大学出版会。
- 米倉よう子（2013）「類似性から派生する〈間〉主観的用法 - 直喩から引用導入機能への文法化 - 」（金杉高雄・岡智之・米倉よう子『認知歴史言語学』認知日本語学講座 7巻：くろしお出版）。
- 利沢行夫（1985）『戦略としての隠喩 - 日常言語・小説にみる「ことば」のしくみ』中教出版。
- 渡辺ゆかり（2000）「直喩を表す『体言句 X+のような+体言句 Y』の意味特徴」『日本語教育』105号、pp.31 - 40：社団法人日本語教育学会。
- 渡辺ゆかり（2001）「ヨウニ節を用いた直喩表現の類型」『広島女学院大学日本文学』11号、pp.1 - 20：広島女学院大学。
- 渡辺由貴（2015）「文末表現『と思ふ』と『とおぼゆ』の史的変遷」『日本語文法』15巻2号、pp.116 - 132：日本語文法学会。
- 藁谷隆純（2005）「『蹴りたい背中』における直喩表現の一考察」『日本語日本文学』15号、pp.31 - 47：創価大学日本語日本文学会。
- Aristotle. *The Art of Rhetoric*. (戸塚七郎(訳)(1992)『弁論術』、東京：岩波書店)。
- Aristotle. *Poetics*. (松本仁助・岡道男(訳)(1997)「詩学」『アリストテレース詩学／ホラーティウス詩論』、東京：岩波書店)。
- Goldberg, Adele E. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: The University of Chicago Press (河上誓作・早瀬尚子・谷口一美・堀田優子(訳)(2001)『構文文法論—英語構文への認知的アプローチ』東京：研究社)。
- I・A・Richards(1936) *The Philosophy of Rhetoric*, 1936, New York (石橋幸太郎(訳)(1961)『新修辞学原論』東京：南雲堂)。
- Lakoff, G. and M. Johnson. (1980) *Metaphors We Live By*. Chicago: University of Chicago Press. (渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸(訳)(1986)『レトリックと人生』東京：大修館書店)。
- Paul Grice (1989) "Studies in the Way of Words" by the President and Fellows of Harvard College. (邦訳：清塚邦彦訳 (1998)『論理と会話』勁草書房)。
- Paul Ricoeur(1975) *La métaphore vive* Paris: Seuil (久米博(訳)(1984)『生きた隠喩』東京：岩波書

店).

Quintilianus. *Institutio Oratoria* (森谷宇一(訳)(2005)『弁論家の教育』京都大学学術出版会).

資料

コーパス

- 国立国語研究所「現代日本語書き言葉均衡コーパス (ver 1.1)」
(<https://chunagon.ninjal.ac.jp/bccwj-nt/search>) 検索アプリケーション:「中納言」
- 国立国語研究所「日本語歴史コーパス (ver 2021.3)」
(<https://ccd.ninjal.ac.jp/chj/>) 検索アプリケーション:「中納言」
- 国立国語研究所「短単位語数 Excel データ(ver 1.1)」
(https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/bcc-chu-suw.html)
- NINJAL - LWP for BCCWJ (<https://nlb.ninjal.ac.jp/>)
- Twitter (<https://twitter.com>)

書籍

- 『群像 2018年5月号』講談社.
逢空万太『這いよれ! ニャル子さん2』GA文庫.
安部公房『壁』新潮文庫.
エドガー・アラン・ポオ・阿部知二訳『ポオ小説全集1』創元推理文庫.
川端康成『雪国』新潮文庫.
新海誠『小説 君の名は。』角川文庫.
高原英理『リテラリーゴシック・イン・ジャパン』ちくま文庫.
多和田葉子『犬婬入り』講談社文庫.
ドストエフスキー・米川正夫訳『白痴』岩波文庫.
野村美月『文学少女と繋がれた愚者』ファミ通文庫.
野村美月『文学少女と月花を孕く水妖』ファミ通文庫.
萩原朔太郎『日本の詩歌第14 萩原朔太郎』中央公論社.
村上春樹『1973年のピンボール』講談社.
村上春樹『神の子どもたちはみな踊る』新潮文庫.
村上春樹『東京奇譚集』新潮文庫.
森鷗外『山椒大夫・高瀬舟』新潮文庫.
山川方夫『夏の葬列』集英社文庫.
山田太一『異人たちとの夏』新潮文庫.
吉川豊子・編『『新編』日本女性文学全集 第3巻』菁柿堂.
吉屋信子『鬼火・底のぬけた柄杓』講談社文芸文庫.
吉行淳之介『娼婦の部屋・不意の出来事』新潮文庫.

本論文は以下の論文及び発表資料に加筆修正を行ったものである。

第1章「直喩と助動詞」及び第2章「助動詞による直喩のヴァリエーション」

- ・菊地礼「文法形式と比喩の関係：知覚動詞を用いた直喩について」『国立国語研究所論集』19号、pp.31 - 45、2020年7月：国立国語研究所.
- ・菊地礼「比喩と助動詞の関係 - 『みたいだ』と『ようだ』 - 」『大学院研究年報』第50号、pp.251 - 266、2021年2月：中央大学.
- ・菊地礼「直喩はなぜ『ようだ』を要求するのか - 「そうだ」「らしい」との比較を通して - 」『中央大學国文』第64号、pp.106 - 88、2021年3月：中央大学国文学会

第3章「直喩と副詞」

- ・菊地礼「偽の情報を提示する構文と比喩：『まるで』と『よう』」『中央大學国文』63号、pp.250 - 234、2020年3月：中央大学国文学会.

第4章「構文成分としての直喩」

- ・菊地礼「連体修飾形式の直喩における属性の表現」『中央大學国文』62号、pp.138 - 125、2019年3月：中央大学国文学会.
- ・菊地礼「直喩のレトリックとしての特性 - 非文学テキストとの比較から - 」『第22回日本語用論学会大会発表論文集』15号、pp.49 - 56、2020年7月：日本語用論学会.
- ・菊地礼「直喩の運用類型 - 構文上の機能に着目して - 」第153回表現学会東京例会発表資料、2020年10月.
- ・菊地礼「直喩による程度表現の働き」『表現研究』115号、近刊：表現学会.